

べきものの無い所が、即ち物の本體にして天地の始めである。故に既に其の本體より、萬物を生ずるに至れば、即ち茲に初めて名の名づくべきものが現はれて來るから、無名は即ち天地の始めであつて、有名は即ち萬物の母であると言ふ主觀的の宇宙觀を展開したのである。斯るが故に常に無欲なれば、天地の妙を觀ることを得るも、常に有欲を有すれば其の微を觀ると云ふのは、無欲なれば自然の妙を觀ることを得るも、自然の本體が働く時には、即ち有欲となつて萬物の究極する状態即ち微と穴を知ることを得るものである。故に此の有無の兩者は、同體異名のものなれば此れを玄と名くるも、此の玄なるものは極めて微妙にして、萬有を包含するものなれば、玄の又玄は衆妙の門となつて、如何なるものでも包括して剩す所なく。一切の妙理を具有するものなれば、此れを衆妙の門であると云ふたのである。此れが即ち老子の有する宇宙觀であつて、自然の大道が氣となり形となりて顯はるゝに、其の間に何等の作意ないものであると云ふのであるから、思想的にも道家と何等の交渉なきも、太史公さへ老子が百六十歳、或は二百餘歳と云へるは、蓋し其の道を修めて壽を養へるを以てなりと云へるを見れば、既に太史公の時代には道家が、老子の利用に一步を進めて居つたことが明かである。

二 莊子及び列子

老子の學説を祖述して、之れを光輝あらしめたものは、即ち莊子及び列子である。此の二子は恰も孔門に於ける子思、孟軻の如きものであつて、老子の學説は莊子、列子等の手に依りて、之れを擴大せられたものである。而して其の特性は、獨善的人であつて、決して天下國家を経緯せんとする人ではなかつた。故に儒者が汲々として、仁義道を述ぶるに對し、莊子は、井蛙には以て海を語る可からざるは、虚に拘るからである。夏蟲には以て氷を語る可からざるは、教へに束せらるゝからである。今爾は涯涘より出で大海を觀ざれば、乃ち爾の醜を知るべければ、爾と將に大利を語り得るであらう。と云ふが如き論法を以て、隨時隨處に其の靈妙なる筆力と、奔放なる思想を以て超人的の思想を展開して居る。其の同一系統に屬せる、列子も亦聖人萬能論を以て、教化の主體せんとする儒者に對して、天瑞篇には左の如く述べて居る。
天地に全功なく、聖人に全能なく。萬物に全用にし。故に天は生覆を職とし、地は形載を職とし、聖は教化を職とし、物は宜しき所を職とす。然らば則ち天にも短とする所あり。地にも長と

周末に現はれたる二大思潮

する所あり。聖にも非とする所あり。物にも通ずる所がある。何となれば、則ち生覆するものは形載すること能はず。形載する者は教化すること能はず。宜しき所に違ふこと能はず。宜しく定る所のものは、所位に合しないからである。故に天地の道は陰に非ざれば乃ち陽である。聖人の教は、仁に非ざれば乃ち義である。萬物の宜しきは、剛に非ざれば乃ち柔であるのは、是れ皆宜しき所に従つて、所位すること能はざるからである。

と云ふが如き思想を以て、聖人の萬能論を覆へし。又莊子は社會の得意なる者に對するよりも、寧ろ其の隱者に對して興味を有したる人であるから、隱者に對しては繕性篇に、左の如く述べて居る。

古の所謂志を得るものは、軒冕(榮達)の謂に非ずして、其の以て樂を益すこと無きを謂ふものなるも、今の所謂志を得る者と云ふは、軒冕の謂なるも、軒冕の身に在るは、性命に非ずして、物の儼來るは寄である。寄の來るは固くべからず、其去るも止むべからず。故に軒冕のために志を肆にせず。窮約の爲めに俗に趨かざれば其の樂は、彼(窮達)と此れと同じきものなるが故に、憂なるのみ。今、寄去れば則ち樂まず。是に由つて之を觀れば、樂むと雖も未だ嘗て荒まずんばあらず。故に曰く、己を物に喪ひ、性を俗に喪ふものは、之れを倒置の民と謂ふ。

と云ふが如き態度を以て、物の外に自ら其の志を高尙にせんとする概を示し。又儒教の尙ぶ所の齋戒に對しても、人間世篇には左の如き批評を爲して居る。

顔回曰く、回が家貧にして惟酒を飲まず、葷を茹はざるもの數月なるが、斯くの如きは齋と爲すべきかと。曰く是れ祭祀の齋にして心の齋に非らずと。回曰く敢て心齋を問ふ。仲尼曰く、若志を一にすれば、是れを聽くに耳を以てすることなく、是れを聽くに心を以てす、是れを聽くに心を以てすること無くして、之れを聽くに氣を以てす。聽なるものは耳に止り、心は符に止るも。氣なるものは、虚にして物を待つものである。唯道なるものは、虚に集むるものなれば、虚は心齋である。

と之れは莊子が孔門子弟の門答に言寄せて、有形の齋よりも、無形の齋を尊ぶべきを説いて、孔門の形式を破したるものなるが、列子も、亦湯問篇には

江浦の間に蟻蟲(最小蟲)を生ず、其れを名けて焦螟と謂ふ。羣飛して蚊の睫に集るも相觸れず。栖宿去來すれども、蚊は覺らず。離朱、子羽(黄帝時代の明目の人)は、晝に方りて背を拭ひ、眉を揚げて之を望むも、其の形を觀ず。饒俞、師曠(古の聰耳の人)は、夜に方りて耳を俛て

之れを聴くも、其の聲を聴かざるに、唯だ黄帝と容成子のみは、空峒（山名）の上に居つて、同齋三月、心死し形廢して、徐に神を以て視れば、塊然として之れを見ること、嵩山の阿の若く、徐に氣を以て聴けば、平然として之れを聴くこと、雷霆の聲の若し。と云ふが如き方法を以て、蠶より細に入り、有形より無形に入りて、人をして其の心志を括静ならしめんとする、莊子及び列子の思想は、老子の道を祖述し培養して、恰も孔子の教へと對立して、支那の思想界に於ける、二大潮流を確立したるものにして、古代に於ける支那思想界の偉觀である。

第三節 列子と印度思想の影響

1 史記に顯はれたる莊子

莊子は老子の學術を擴大し、更に列子等の思想を産み出したる人である。されど其の人と爲りに就いては、之れを明かにする事を得ざるも、史記列傳に依つて其の人と爲りの一斑を録すれば、莊子は蒙人である。名は周と云ふ。嘗て蒙の漆園の吏となつた。梁の恵王、齊の宣王と時を同

じうした。其の學は闕はざる所無きも、其の要は老子の言に基つき之れに歸した。故に其の著書十餘萬言は、大抵率ね寓言である。漁父、盜路、胾筮を作つて孔子の徒を詆訾し、以て老子の術を明かにし。畏累虛、亢桑子の屬は、皆空語にして事實に非らざるも。然も善く書を屬し、辭を離ね事を指し。情を類して、用て儒、墨を剽剝した。故に當世の宿學と雖も、自ら解免すること能はず。其の言は洗洋自恣にして、以て己に適ふ。故に王公大人も、能く之を器とせられなかつた。

楚の威王は、莊子の賢を聞き使をして幣を厚うして、之を迎へしめ。許すに相たるを以てせるも、莊周は笑つて楚の使者に謂ひて曰ふには、千金は重利であり、郷相は尊位なるも。子は獨り郊祭の犧牛を見ざる乎。之を養食すること數歳、衣するに文繡を以てし、以て太廟に入る。是の時に當つて、狐豚たらんと欲すと雖も、豈に得可けんや。子は亟かに去れ、我を汚すこと無かれ。我は寧ろ汚瀆の中に遊戯して、自ら快とせん。國を持つ者の爲めに覇せらるゝこと無く、終身仕へずして、以て吾志を快とせんかな。

周末に現はれたる二大思潮

とは司馬遷の筆になつた、彼の事略である。されば莊子を距ること未だ遠からざるに時代に於てすら、より以上を語つて、詳かならざるに、今日に於て之れを説明せんとするは無理である。故に

予はかゝる史實を詮索するよりも、寧ろ進んで彼の思想的内面を考察せんとするものなるが、彼の思想は即ち老子の説を繼承せるものなれば、彼の思想を考察するには、更に溯つて今少しく老子の思想的傾向を考察するの必要がある。

故に予は莊子の思想を諒解するに先立つて、老子の思想的傾向を考察するの必要を感じたのである。何となれば、老子は東周の晩年に生れ、其の職は周の守藏室の吏であるから、今日で云へば、即ち帝室圖書館の事務員とも云ふべきものであつて、周室の記録又は古文書等に親しむの機會が多かつた。然るに其の晩年に至つて、周室の衰へるのを見て、函谷關を越えて西方に行かんとするに臨み、關の令尹喜の求めに應じて、老子五千言の書を殘して、牛に騎つて關を出で、去つて行く所を知らないといふのが即ち老子である。然らば老子が此の時行くに西方を撰んだと云ふことは、果して如何なる事情であつたかは、之を詳にする事を得ないが、既に中原に見限を付けて、西方に行くと云ふ所を見れば、茲に何等かの目的又は希望を有して居つたと云ふ事は、之れを考へ得られるばかりでなく、函谷に關を設けてあつたと云ふことは、已に西方と交通が有つたと云ふ事を物語る有力なる事實である。

然らば老子が關を出づるには、必ずや相當の理由があつたのみならず、今日で云へば税關長にも等しき令尹が、彼の出關を見逃さずして、彼を擁して五千言を殘さしめて之れを世に紹介し、彼をして千歳の盛名を保たしめたる點を考へると、令尹喜も亦斯道に對して、志の有つた人であると云ふことが出来るのである。

以上の事實を綜合する時は、老子の遺著たる道德經の中には、徹頭徹尾儒教の形式的儀禮、又は形而下の方面に重きを置くものと正反對に、凡ての形式より離れて、形よりして下なる生活以外に形よりして上なる精神的生活を求めんとしたる點は、即ち印度に於ける佛教思想、殊に後世に於て流行せる『禪』の思想と共通せる點が有る所を見ると、老子の關を出でたるには、或は其の方面に向つて一步を進めんとする、精神的の欲求を以てしたのでは無いかと思はれる。果して斯くの如きものであつたとすれば、西域と周との交通は如何なる時代に開始せられたものであるかと云ふ事も併せて之れを考へねばならぬが、それには殷の紂王の時代に初めて象牙の箸を作つたものが現れたので、箕子は之れを敷じて『彼象箸を爲くる、必ず盛るに土簋を以てせず。將に玉杯を爲くらんとすべく、玉杯、象箸は、必ず藜藿を羹にし、短褐を衣て、芻茨の下に舍らざるべく、則ち錦衣九重、高臺廣室此れに稱ひて、以て求むれば、天下も足らざるべし』と云へるを見ると、已に此の時代に西戎より象牙が輸入せられたことを知るものであるが、其の後春秋時代に至つては、西北の

周末に現はれたる二大思潮

諸侯は戦争に象を用ひしものあるを見れば、此の象は暹羅、安南等の南方より來りしか、或は天山南北路の何れかより、輸入せられたことは明かである。然らば老子の思想にも、印度思想の混入せる跡がないでもないと思はれるのである。

口 列子に現はれたる西方の聖人

予の觀察をして誤り無きものたらしむれば、老子の學問を繼承せる莊子が、徹底せる超越的態度を以て、死生一如の平等觀を有し、俗智を排斥して迷執を去り、無始無終の域に達すれば、人間界の總ての煩累は、自然に超越して、逍遙自在の天地に遊び得るものであると云ふ思想は、老子が無爲の大道を鼓吹したる獨創的思想に對して、莊子は陶酔の餘り、極力之れを敷衍し、擴大したるものなれば、其の莊子の流れを汲みたる列子が、其の思想を高調するのは當然であるも、此の列子其人は果して實在せるものなりや否や、史記の列傳等には更に之れに言及して居らぬから、之れを知る事を得ないが、列子の天瑞篇の初めには、

子列子は、鄭の圃に居ること四十年なるも、人之之れを知る者なく。國君、卿大夫も、之れ眎ること衆庶の如くなりしが、國足らざるを以て（飢饉）將に衛に嫁かんとしたれば、弟子は曰く。

先生嫁かば反る期なかる可し。弟子敢へて調ふ所あり。先生將に何を以て教へんとするか、先生は壺丘子林（列子の師）の言を聞かざりしかと。子列子笑ふて曰く、壺子何をか謂へるや。然りと雖も、夫子嘗て伯昏瞀人に語り、吾側に之れを聞けり。試みに女に告げん。云々（下略）

と云へるを見れば、鄭人であつたと云ふことは明である。其の全篇の用語には、或は漢初の人ではないかとも思はれる點もある。要するに其の學説は莊子に比すれば、更に一段の超越振りを示し、老子の和光同塵主義よりも、更に一步を進めて人生以外に、華胥の國と云ふ一種の理想境を描いて居るのみならず列子は周穆王の時、西極の國より化人の來れるありて、水火に入り、金石を貫山川を反へし、城邑を移し、虚に乗じて墜ちず云々と云ふて居るのは、暫らく措くも、列子の思想には、明かに印度の思想及び其の傳説が現はれて居ることは、

商の大宰は孔子に見えて曰く、丘は聖者かと。孔子曰く、聖は則ち何ぞ敢てせん。然かも則ち丘は博學多識なる者なりと。商の大宰曰く、三王は聖者かと。孔子曰く、三王は善く智勇に任ずる者なり。聖は則ち丘知らずと。曰く五帝は聖者かと。孔子曰く、五帝は善く仁義に任ずる者なり。聖は則ち丘知らずと。曰く三皇は聖者かと。孔子曰く、三皇は善く時に因るに任ずる者なり。聖は則ち丘知らずと、商の大宰大いに駭いて曰く、然らば則ち孰か聖なると。孔子動容して問

周末に現はれたる二大思潮

ありて曰く、西方の人聖者あり、治めずして亂れず。言ずして自ら信ぜられ、化せずして自ら行はれ、蕩蕩乎として、民能く名づくることなし。丘其の聖たることを疑ふも、知らず眞に聖たるか、眞に聖たらざるかと、商の太宰嚳然として、心計して曰く、孔丘我を欺くか。云々の語が仲尼篇にあるのを見ると、列子の時代には、既に西方の聖人云々の説があつたものと云ふことは、之れを疑ふに由なければ、列子の思想に印度思想の影響があるのは、別に問題ではないが、更に之れを莊子、老子に溯りても、多量の印度思想の痕跡を留め居るのは、強ち之れを不思議がる必要もないと思はれるのである。

ハ 本章に對する概評

予は支那に於ける五千年の歴史を通じて、最も華やかなりし春秋戰國時代の思想界を説明するに當りて、僅かに孔老の二者を以て之れが代表的思想家と爲し。之れに配するに莊子、列子、又は子思、孟子等の數人を以てし、しかも其の諸子が主張せる學說の主要すらも之れを説明せずして、單なる思想的傾向と其の思想を産出したる、社會的の現象のみを説明するに止めたるは、著者としても頗る不満足のものであるが、如何せん此等の諸子に就いて、其の學說の内面までも説明せんとすれば、數くも本篇に數倍するの紙數に非ざれば不可能の事である。

故に著者は極めて概括的に、周末に於て發生したる孔老の二大思潮は、其の後三千年を経たる今日に至るも、昨尚ほ今の如き有様を以て、陰に陽に世道人心を維持するの力を有し、時に若干の消長ありとするも、世々に其の人ありて其の學を繼承し。益々其の精微を發揮し、蔚然たる勢力を以て支那の社會と民衆とに、物質精神の兩方面に亘る源泉となり、文學にも、美術にも、此の兩家の思想を以て、充たされつゝあるを喜ぶものである。

以上の如き事實に基いて之れを觀察すれば、孔老の兩家は殆んど鳥の兩翼の如き形を以て、支那民族の實生活を支配しつゝあるも、爾餘の百家は恰も春花秋月の如く、美は則ち美なるも、民族的思想的根蒂とはなつて居らぬ。故に實際上より見たる周末以來の思想的傾向は、略ぼ之れを盡し得たるものとして本章を歸結するに當り、漢民族が黃河流域の上流たる山岳地帯に崛起してよりこの方、未だ二千餘年を出ざるに早くも已に前述の如き徑路を辿りて、千古不磨の思想的文化を創造したるは、單なる歴史的經過の發展より見ても、彼等の精神的能力は、實に偉大なるものであると云はねばならぬ。

然るに此の二千餘年前の古文化は、輓近に於ける歐洲戰後の思想界を刺戟して、大なる光芒を現

はし來り、激甚なる生存競争に喘ぎ切りたる歐米人士には、一の慰安ともなり又彼等を反省せしむるの警策ともなりて、新に之れが普及を見んとする而已ならず、支那に於ても亦考古學的の研究が日に進みて、吾人が歴史上に於て其の實在の如何さへ疑はれたる問題が、河南又は河北方面に於ける殷墟の發掘に依りて、續々として資料の現出を見ることとなり。此の方面の研究が進むに従つて吾人は更に或る種の新生面が開かるゝと云ふことを信じて疑はざると同時に、吾人は是れと同一文化の下に生存せる關係より、更に一段の研究を進めねばならぬと念願するものである。

第五章 秦漢二朝の思想及び宗教

第一節 始皇の封禪と求仙

1 始皇の統一

秦の始皇は顛頂の裔大業が柏翳を生んだ。此の翳が舜に仕へて姓を嬴と賜ふた。其の子孫は又周の孝王に仕へて、馬を汧渭の間に養ふて、大いに繁殖したと云ふので、地を分つて附庸と爲し、秦に邑せしめた。夫れより後二世を経て始めて大となり。惠王の世に至り周を救ふて功ありし爲め封じて諸侯と爲し、賜ふに岐西の地を以てした。故に秦の興りたるは惠王東遷以後の事であつて、國としては頗る新しきものである。其の後百里侯の如き賢人を用ひて徳を修め。又晋の文公の霸業を輔け、漸く列國の間に勢力を扶殖することとなり。又法家では商鞅、兵家では白起、縦横家では張儀等を用ひて、六國を滅し終に天下を統一したのが即ち始皇である。

始皇帝名は政、秦の三十世昭襄王に繼いで立ち、王位に在る事二十五年にして天下を統一して、

自ら帝位に即き「徳は三皇を兼ね、功は五帝に過ぐる」と云ふので、死後に於て諡するの風を改め、自らが世中に始皇帝と稱した。始皇と云ふのは即ち第一世の皇帝と云ふ意味であつて、二世、三世と傳へて、子孫萬世に至らしめんとするものであつた。しかし始皇が此の諡法を改めて、自ら皇帝と稱するが如きは、單なる始皇の自負心より出でたる如くなるも、其の實之れを思想的に觀察すれば、實に破天荒なる大統一を行ひたる始皇は、單なる自負心のみならずして、彼の其の祖先は勿論、歴代の君主が統治したる領土よりも廣大なる領土を開拓し。又歴代の帝王が惱まされたる北狄に備ふるには、萬里の長城を築き、又南越と稱する現在に於ける交趾支那までも大兵を出して南海の象郡を置くと云ふが如き有様であつて、西域諸國には其の時より、支那の名を轟かしめて秦を呼ぶに震旦を以てせしむるに至つたのである。

況んや又三代以來の封建制度を一變して、郡縣の制度を布きたるは、未だ嘗て見る事の出来ない變革であつた。しかも其の統一が武力的統一であつたから、其の思想的方面に及ぼしたる影響は、煩瑣なる儀禮を説く儒者を惡みて、諸種の學術を排斥し、單に醫藥、卜筮、種樹の書を除きたる外は一切の書籍の私有を禁ずるのみならず、天下の書を集めて之れを焚き、又咸陽の諸生四百六十四人を坑に埋て殺すと云ふが如き、前古無比なる暴政を行ひ、先王の遺法は全く地を拂はしめたのである。

ある。併し此れは春秋戰國以來の極めて、煩雜なる思想界に對する一の反動であつて、始皇の此の舉は或る意味に於ては、當時の思想其物が始皇をして、斯かる暴舉に出でしめたとも云ふことも出来るのである。

口方士の活躍

右の如き暴虐なる始皇も、肉體の疾病に對しては醫藥を必要とし、精神上の煩悶に對しては卜筮を必要とし、日常生活の資源を得る爲めには農業又は植種を必要とし、之れを挾書の律と云ふ書籍の私有禁止會から除外した。されば始皇が書籍の私有を禁じ、又天下の書生を坑殺したのは、彼等が先王の遺法を云々して、始皇の政治を批議するを以て之を坑殺したるも、前記の三者は之れを除外して、焚書の厄を免れしめた所を見ると、人間としての始皇には、始皇としての人生觀があつて、醫藥、卜筮、植種の三書と離れるが出来なかつたのは、誠に面白い所である。されど之れを好く言へば始皇の人間性であるか、此れを皮肉に批評すれば、始皇の人間味を暴露する弱點であつた故に其の間隙より入りて始皇の心を捉ふるものが現はれ來た。此れは如何なるものであつたかと云ふに、周代以來官職として、神に事へることを專業とする巫祝の外に、民間にありて巫祝を業と

大支那大系

する方士が、巧に始皇の心胸に喰ひ入つて、さしもの英雄兒たる始皇を股掌の上に翻弄した。然らば其の方士は如何にして彼の心を捉へたかと云ふに、始皇が天下統一の大功を石に勒して此れを泰山の上に建てたのは、即ち始皇が天下を統一した三年後であつた。此の時に當りて齊の方士徐市と云ふものは上書して不老不死の薬を蓬萊瀛洲に求めんことを請ふたれば、始皇は快く之れを諾して、徐市の請がまゝに童男童女を與へて、海に入つて之れを求めしめた。此の徐市とは如何なるものであるかと云ふに、徐市は即ち徐福のことであつて、彼が唱道したる三神山とは、『海中に三神山あり、名けて蓬萊、方丈、瀛洲と云ふ。仙人之れに居る。請ふ齊戒せる童男童女を得て、之れを求めんと。』と云ふのであつた。此に於てか流石の剛邁なる始皇も手も無く其の術中に陥入り男童女數千人を發して、海に入つて仙人を求めしめたと云ふことは、史記の本紀に現はれたる文字である。しかして其の時代は神武紀元四四一年（西紀前二二一年）であつた。然るに此の徐福の入海求仙は、如何なる結果となつたかと云ふに、漢書の郊祀誌には、

蓬萊、方丈、瀛洲の三神山は、渤海の中に在りて、人を距ること遠からざるも、仙人及び不死の薬がありと傳へられて居る。此れを望めば雲の如くにして、遂に能く到る者無かりしに、秦の始皇が、海上（今の芝罘）に到るに及んで、方士は競ふて此れに及ばざることを懼るゝ者の如くな

りしを以て、始皇は人を遣はし童男童女を齎らして、之れを求めしめたるに、皆風を以て解（辯解）を爲し、臨むべくして至る可からずと稱した。

と云ふ記事がある。想ふに天資英邁なる始皇にして、斯る説明と辯解とに依りて満足したと云ふことは、已に不思議であるが、其處には即ち始皇も亦一個の人間としての弱點もあり、煩悶もあつた結果、斯る方士の彀中に入つたのであつて、そこに彼も亦人類に共通せる精神的の欲求があつて知らず識らずの間に、彼の心は、方士の手中に握られたのである。故に始皇の行動は、支那に於ける宗教發達史の上より見れば、其の事是非は別問題として、極めて興味のある資料を提供したものと云はねばならぬ。

ハ 方士の起源に就いて

ト筮と云ふ文字は、上古の時代より屢々現はれたるものであつて、本篇に於ても隨所に現はれて居るが、未だ方士と云ふ文字に逢着せざりしを以て、其の起源が果して如何なる時代であつたかと云ふことは不明なるも、之れを常識的に考へる時は、五帝時代の少昊に代つて起ちたる顓頊高陽氏は『九黎徳を亂り、民神雜糅して、方物すべからざるを以て、之を受け、乃ち南正重に命じて

秦漢二朝の思想及び宗教

思想・宗教

天を司らしめ、以て神に屬し。火正黎に命じて、地を司らしめ、以て民に屬せしめ。以て相侵し瀆すこと勿らしめた」と云ふ時代より、已に神に對する或種の専門的の奉仕者があつたことが想像せらる。が、其の後歴代の王者は、あらゆる場合に、卜筮に依つて神意を伺ひ、其の進止を定め來りしも、周代に至つては、制度の上に卜筮を業とする専門家を置き、之れを巫、祝の二者に分ち、大祝、小祝、喪祝、甸祝、詛祝とし、巫には、司巫、男巫、女巫等があつて、天神、地祇、人鬼に對する一切の禮を掌る大宗伯の下に屬せしめて居る。而して説文には、巫を解するに「女は能く無形に仕へて、舞を以て神を降する者なり」と云ひ。巫を解して「能く齋肅にして、神明に事ふるものなり」と云ふて居る。又周官には「司巫は、凡そ喪事あれば、巫は降靈を掌る」と云ふて居るが、此れは人が死して、已に殮したる後は、巫に就いて降すと云ふて、死後の神靈は巫に由つて、降すと云ふ意味である。故に此れは日本に於ける坊間の神降しに類したるものと知るべきである。女巫には、喪儀には關係なくして、神に事へしむるものとの二者があつた。故に春官には凡そ神に仕ふる者は、其の藝を以て、之れが貴賤の等を爲す。凡そ神を以て仕ふるものは、三辰の法を掌り、以て鬼と神と示（祇）の居を猶り、其の名物を辯じ、冬至の日を以て、天神、人鬼に致し。夏至の日を以て、地示（祇）物類に致し。國の荒凶

民の禮喪を禱（禱と同義）ふ。と云ふが如き條文あるを見れば、三代以來、神に仕ふる専門家ありしものを、周代に至つて、之れを官制の中に入れて、其の職司を明かにしたるものと思はれる。然らば此の専門家を置く以前にも、既に民間では一般に之れを行ひたれば、假令ひ専門家が現はれても、決して其の風俗が改まるものには非ずして、朝廷の儀式に用ひらるゝ以外に、民間にありて隨時隨所に之れを行ふものが、即ち方士であつたと云ふことは明かである。されば此の方士の仕事は、或は神に仕へ、或は死者の靈を降す等の事柄は勿論、此等民間の巫祝は、其の術を神秘ならしむる爲めに、或は豫言を爲し、又は卜筮を行ひ。進んでは長生不老の仙人を談じ、或は不老不死の藥を説くに至つたものと思はれる。

二 封禪と金人

始皇は六國を併呑し、封建の制度を打破して、郡縣の制を布き、北には萬里の長城を築いて、北守の姿勢を取り。南は越を征して南進の實を擧げたるを以て、自ら其功に誇つて、鄒澤山に石を建て功業を彰し。泰山に登りて之れを封じ。又梁父（山名）に禪したることであるが、此の封

秦漢二朝の思想及び宗教

と云ふは碑を埋めたる上に地を盛りて、之れを封じたる上に、社を建て、祭典を行ふものにして、梁父に禪すると云ふのは、其の山の土を潔めて、之れを掘りたる上にて祭典を行ふたのである。而して此れ等は皆天神、地祇を祭るものなるが、其の目的は福を求め、禍を禳ふ爲であるのを見れば其の封建の世たる、郡縣の世たるを問はず、漢民族の思想風俗には、何等の變化がないことを明かにするものである。

次に又始皇の事蹟に於て、極めて注意すべき點は、天下を統一して皇帝と稱するや、直ちに天下の兵器を咸陽に集めて之れを鑄造し、重さ千石の鐘、神人各々十二を造つた。之れは統一の世となつて、兵器が不要となつたので、之れを鑄造して鹿身、龍頭の鐘。及び其れを載せる臺（鐘）と十二の金人（銅像）を造つたのであるが、其の重さ千石と云ふは、之れは百二十斤を一石として、十二萬斤と云ふ説と、其の倍數たる二十四萬斤であると云ふ二説もある。夫れは敢て問題とする必要もない。が、予は只茲に金人と云ふ文字に對して、一の注意が拂ひたいのである。何となれば、始皇の世には已に西域と通じて、西域は支那を呼ぶに震旦を以てしたれば、恐らく此の十二人の金人は、佛像ではなかつたかと云ふことである。尤も此の説は漢の武帝の元狩二年（西暦紀元前一二一年）に、將軍霍去病が匈奴を伐つて、金人を得て歸つたと云ふに對して、唐の顔師古が佛像で

あると云ふ解釋をして居ると、老莊の思想内面に、多量に印度的色彩を帯びて居る外に、列子の如きは前に引用したるが如く、西方の聖人云々の言を爲して居る點を思ひ合せば、偶然に十二の銅像を造つたものとも思はれない。故に此れは只一の疑問として、博雅の宗教を待つこととした。

第二節 漢の高祖の定鼎

1 高祖の相貌

秦の天下は始皇即位の四十年後には、既に亡びて劉邦、項羽等の群雄が覇を争ふこととなり、數年を出ずして、劉邦、字季の手に依つて天下は統一せられ、漢の世となり季は高祖皇帝と呼ばれた高祖は生るゝに當りて、彼の母は大澤の邊に息ふて、神と通じたと夢みたるに、其の時雷雨晦冥なるに依り、彼の祖父は行いて之れを見たるに、龍が其の上に交するのを見て、季は生れたと云ふ居る。其の相貌は隆準（鼻の高き）にして、龍顏、美鬚を有し、左の股には七十二の黒子があつた人と爲り寛仁大度にして人を愛し、家人の生産を事とせず、壯なるに及んで、泗上の亭長となつたが或時罪人を咸陽に送りて、皇帝の盛んなる儀容を見て『大丈夫將に斯くの如くなる可し』と云ふ

たこのことである。

然るに單父の人呂公と云ふものあり。好んで人を相したるに、彼の狀貌を見て「我人を相する」と多けれども、君の相の如くなるもの無し、願くば君自愛せよ。我れに息女あり、願くば箕帚の妾となさん」と云ふて、卒に彼に與へたのが、即ち後の呂公である。昔より君徳を稱するには、何れも皆種々の祥瑞を傳へて、其の人を神ならしめんとしたるも、吾人は未だ呂公の如く、好んで人の相を見、其の相に依つて、自ら其女を與へて妻としたと云ふが如きことは、未だ其の例を知らない然らば、此れも亦或る意味に於ける、卜筮の延長であつて、後世に於ける觀相を以て專業とする者を出す濫觴であると思はる。殊に季には、居常一種獨特の生氣が溢れて居つたものと見えて、秦の始皇の全盛時代に、東南に天子の氣があると云ふので、東遊して之れを鎮壓せねばならぬと云ふことが、或は泰山に登つて封禪を行ふ動機と爲つたものと思はれる。此の時季は、芒碭山澤の間に隠れしに、彼の夫人呂氏は、常に之れを尋ね來るを以て、季は怪しんで之れを呂氏に問ひたるに「君に居る所は、常に上に雲氣あり。故に之れに従ふて尋ねれば、必ず君に會ふことを得ると」答へたれば、季は之れを聞いて心潛に喜んだと云ふことである。又或る時季は痛飲して夜澤中を渡りたるに、大蛇の道に當れるを以て、劍を抜いて之れを切りたるに、後人來つて蛇の所に至れば、老翁

が哭して「吾れは白帝の子なるに、今赤帝の子の爲めに斬られた」と云ふて、忽ち其の姿を隠したと云ふことを聞いて、季は心に獨り喜んで自負したとのことである。斯くの如きは、殆んど小説にも等しき事件なるも、陰陽五行説を以て天地萬有の根源と爲し其の五行の徳に依つて、天下の王者となつたと云ふ傳統的の思想は、封建の世を破壊して郡縣となり、又郡縣の世を倒して再び第二の王朝の現出を見んとするに當りても、依然として斯る事柄が人心を支配するに、最も大なる原動力となつて居る所を見れば、秦の始皇が吳起蒙恬等の武將を驅使して天下の諸侯を撃滅し、又商鞅、李斯の如き酷吏を寵用して、苛法を以て民を壓する時に當りても斯くの如き漠然たる傳説の主人公が現はれて、寛仁大度の政を以て之れに代りたるは、恰も四時運行の序の如きものであつて、支那民族の思想より言へば、實に當然なる出來事なるも、之れを思想及び宗教の方面より觀察すれば、呂氏の觀相と云ひ、呂后の觀氣と云ひ。何れも將に興らんとする道教の前驅者たるが如き感を與ふるものである。

高祖の統一

高祖は秦の二世胡亥の世に當りて、項羽、樊增等の諸豪と争ひ、武力に於ては常に劣勢なりしに

秦漢二朝の思想及び宗教

拘らず、張良、蕭何、韓信等の謀臣名將を用ひて、遂に漢中に入つて秦を定めたる後、直ちに歸つて霸上に陳して、諸縣の父老豪傑を召して、父老は秦の苛法に苦むこと久し。我は諸侯と約するに先づ關中に入りたる者は王たらん。との言を以てしたれば、我は關中に王たるべきものなれば、父老と約するに法三章のみを以てせん。即ち人を殺す者は死せん。人を傷け及び盜する者は、罪に致さん。其餘の苛法は悉く之れを除かん。」と云ふたので、秦の民は大いに喜んだとのことであるが、此れは支那民族としては、理想的の君主であつて、此れ以上の善政は無いのである。然るに其の後數年間は天下の風雲未だ定まらざりしも、幾許も無くして天下は統一せられ、群臣に擁せられ入關後の五年目には、遂に帝位に即いた。此れは神武紀元四五九年（西曆前二〇二年）であつた斯くして天下を統一したる高祖は、直ちに功臣を封じ、十八人の元君の位次を定め、高祖の父太公を尊んで太上皇となし、秦の苛法に懲りて法令を簡易にしたる爲め、群臣は酒を飲んで功を争ひ。或は狂呼して劍を抜いて柱を切ると云ふ有様であつた。故に叔孫通は、高祖に説いて、「儒者は進取し難きも、共に守成すべし。願くば魯の書生を徵して、共に朝儀を興さん」と云ひたれば、高祖は之れに従ひたるも、魯の兩生は敢て來らずして「禮樂は徳を積んで、而して後に興すべきなり」と云ひたれば、通は召す所の諸生、及び上の左右と、其の弟子百餘人と共に編絶（位地を示す

標準）を造りて、禮を習はしめ、翌年、長樂宮の成れるを機會に、諸侯群臣の朝賀するに當り、闕者（式部官）は禮を修め、諸侯王以下六百石に至るまで、次を以て奉賀せしめたるに、愼恐肅敬せざる者なく、禮を畢つて法酒を置くに、御史は法を執り、儀の如くならざるものは、擧げて輒ち引き去らしめられたれば、朝を竟へ酒を罷むるまで、敢て喧嘩して禮を失する者なかりかば、高祖は「吾乃ち今日皇帝の貴きを知つた」と云ふたとのことである。此れは即ち秦始皇の破壊後の文物を蒐集して、再び文學を復興する動機となり。今日では支那學を呼ぶに、漢學を以てする事となつたのも叔孫通の建策以來の興學の結果である。

ハ 闊達なる高祖

高祖は元來一個の武辦であつて、固より名門の出でもなく、又詩書禮樂を事としたる者でもない故に或る時高祖の臣陸賈が進みて、詩書を説きたるに「乃公は馬上天下を得たり、蓋んぞ詩書を事とせん」と罵りたれば、賈は「陛下は馬上を以て之れを得たるも、蓋んぞ馬上を以て之れを治む可けんや、文武並び用ゆるは長久の術なり。秦をして天下を併せて仁義を行ひ、先聖に法らしめば、陛下蓋んぞ之れを得んや」と言ひたれば、高祖は曰く、「試みに我が爲めに書を著し、秦の失ひし所

秦漢二朝の思想及び宗教

以と、吾が得たる所以と、及び成敗とを誌せよ」と、依つて賈は書十二篇を著はしたるに、奏する毎に善と稱し、號して『新語』と名けた。

又即位の十一年淮南王黥布の叛せし時、自ら將として之れを伐ち、其の翌年黥布を破つて歸るに當り、魯(曲阜)を過ぎて太宰を以て孔子を祀り、沛に過ぎり酒を置いて、宗室故人を召して飲ましめ、酒酣なるに及んで、高祖は自ら、

大風起るや雲飛揚す。威海内に加るや故郷に歸る。安くんぞ猛士を得て四方を守らむ。(大風起兮

雲飛揚。威加海内兮歸故郷。安得猛士兮守四方。)と云ふ歌を諒ふて、興を盡し、沛中の子弟をして此の歌を習はしめ、沛を以て湯沐の邑とした。想ふに身を草澤より起したる高祖は、陸賈の集めたる得失と、古今の成敗とを聞き、極めて耳新しき名論であると云ふ感じを以て、是れを新語と名づけたるが如きは、何等の凝滞を示さざるものなるが、殊に富み四海を保ちて、得意の絶頂の時に當りて、叛將を征服したる歸路故郷に過れて、先づ孔子を祀り、更に郷黨の宗室故人を招いて置酒し、興酣なるに及んで、大風の歌を歌ふて歡を盡したるが如きは、其の間に一點の僞虚もなく、作爲もなく、自然の儘に胸中の感懐を述べ、安くんぞ猛士を得て四方を守らんと云ふに到りては、或る種の人生觀を悟りたるものゝ如き口吻があつて、其の人格を見ることの出来る、有漢一代の絶唱である。

ニ 高尚なる縦横策

高祖は支那に於ける『英雄色を好み、豪傑酒を好む』と云ふ言葉其儘の人物であつて、山東時代には相當に發展したるものゝ如くなるが、即位の後にも、戚姬を愛して呂后を疎んじ、呂公の生みたる太子の仁弱なるを好まず、戚姬の生みたる如意を以て太子と爲さんとしたるに、群臣之れを争ふても如何ともすることを得ざりしが、呂后は人をして強ひて張良に之れが計を求めしめたるに、張良は、是れは口舌を以て争ひ難きものである。思ふに上の致すこと能はざるものは、東國公、綺里季、夏黄公、角里の四先生である。此の四人は、上が士を慢侮するを以て、逃がれて山中に隠れ義として漢の臣とならず。故に上は、此の四人を高して居られるから、今太子をして、書を作り詞を卑ふして、安車を以て固く請はしめば、宜しく來るべきを以て、至れば以て客と爲し。時に從ひて入朝し。上をして之れを見せしむれば、即ち一助ならん』と答へた。

依つて呂公は、人をして太子の書を奉じて、之れを招かしめたるに、四人は之れに應じて至りし時、偶々帝は布を撃つて還り、愈々太子を易へんとして、置酒せらるゝに當り、太子も之れに侍し

たるが、張良の招きし所の四人が之れに従ひ。年皆八十餘鬚眉皓白にして、衣冠甚だ偉なりしかば上は怪んで之れに問へば、四人は進みて、各々其の姓名に答へし爲め、上は大いに驚いて曰く、「吾れ公を求むること數々なれども、公は吾れを避けて逃れたるに、今何に依りて、吾が兒に従つて遊べるや」と四人は曰く、「陛下は士を輕んじて、能く罵るを以て、臣等は義として辱められざりしが、今太子は仁孝恭敬にして、士を愛するを以て、天下頸を延べて、太子の爲めに死せんことを願はざる者なし、故に臣等は來れるのみ」と、上は曰く、「公を煩はさん、幸に卒に調護せよ」と。四人の出でたる後、上は戚夫人を召して、之れを指示して曰く、「吾れ之れを換へんと欲すれど、彼の四人の者之れを輔く、羽翼己に成れり動し難し」と。

右は漢室内廷の問題に過ぎざるも、漸くして統一の緒に就きたるの秋に當り、長幼の序を亂りて太子の發立を見るが如き事あらんか、漢室の天下は再び亂れて麻の如きものありしならんも、張良は之れを正面より諫めて阻止すること能はざるに依り、戰國以來蘇秦、張儀等が、縱横の策を弄して天下を遊説したる故智に仿ひ、極めて高尚にして然も意義有る縱横の策を弄して、商山の四公を招きて、高祖の内寵を制御したる手腕もさることながら、不出世の英雄たる高祖をして、其の私情を抛せしむるに至りたるは、蓋し當時に於ける一般的の思想的傾向が、尙能く長を長とし、老を

老として、未だ亂れざるものありし爲め、斯る皮肉にして、而も高尚なる縱横策が適中したるものであると思へば、漢室内廷の一問題も、偶以て當時に於ける社會思想の半面を窺ふべき、好資料を貽されたるものと云はねばならぬ。

第三節 西漢前期の治績

1 惠帝の治法

惠帝名は盈、即ち高祖の太子にして、呂后の出である。即位の後、曹參を擧げて宰相と爲したるが、曹參は一に先の宰相蕭何の約束に従つて、無爲の治を行ひしため、百姓は之れを歌ふて、蕭何相となれば、較として畫一の如し、曹參之れに代りて、守りて失ふこと勿し。載其れ清淨にして、民以て寧壹なり。と云へるを見れば、蕭何と云ひ。曹參と云ひ。何れも皆人を使ふに、各々其の能を以てして、能く其の能を盡くさしめたるを以て、清淨寧壹の治を致したのである。されど在位八年にして崩ぜられたるを以て、未だ充分の治蹟を擧ぐることは出来なかつた。

これに次いで立ちたる文帝（名は恒）は、即位の後高祖の元君陳平を擧げて、左丞相と爲し。周勃を擧げて、右丞相と爲し。惠帝の治法を繼承し。千里の馬を獻じたるものあるに對して、帝は「鸞旗前に在り、屬者後に在り、吉行（巡幸）には日に五十里、士行（軍事）には日に三十里なるに、朕千里の馬に乗りて、獨り先づ何處にか行かん」と云ふて、其の馬を返し道里の費を與へたる上更に詔して「朕は獻を受けざるを以て、四方より來り獻すること勿らしめよ」と云はれた。此れは即ち文帝新政の第一歩であつた。

口 宰相の責任

帝は益々國家の政務に精勵し、右丞相勃に天下一歳の決獄は幾何ぞと問はれたるに、勃は知らずと謝したれば、一歳の錢穀の出入は幾何ぞと問はれたるに、勃は亦知らずと謝し、惶愧して汗出で背を沾ほしたるが、帝は亦左丞相平に問はれたれば、平は曰く「主どる者あり。即し決獄を問はゞ廷尉を責めよ。錢穀を問はゞ、治粟内史を責めよ」と答へければ、帝は「君が主どる所は何事ぞ」と問はれたれば、平は謝して曰く「陛下は罪を宰相に待たしむ。宰相は、上は天子を佐けて陰陽を理め。四時を順じ、下は萬物の宜しきを遂げしめ。外は四夷を鎮撫し、内は百姓を親附せしめ。大

夫は各其職を得せしむるものなり」と答へたれば、帝は「善」と稱せられた。之れは獨り陳平が帝に對して奏したる、陳平一人の理想に非して、彼等漢民族が、古代より抱懐せる政治に對する理想の中には、其の心を正しふし、其意を誠にすれば、自然と天地神明に貫通して、造化を化育し得ると云ふ信念があつて、之れを以て治國平天下に應用せんとするものなれば、天子の宰相となつて、萬機を處理してゆくには、即ち陰陽を燮理し、四時に順じて萬物の宜しきを遂げしむると云ふ抱負と、責任とを有するのは、蓋し當然の事ではある。然るに會々帝に對して、之れを奏したる爲め、此の話が極めて有名なるものとなつたのである。

ハ 各司の專責

陳平の理想が徹底したか否かは別問題として、兎に角各司が其の責めに任じて、權貴を避けざる者が各方面に輩出したるは、惠帝の治政に於ける一の偉觀である。故に予は其の一二を左に録する事とした。

帝の即位二年には、張釋之を擧げて廷尉に任ぜられたるに、上が中謂橋に行幸せらるるに當り一人ありて橋下を走りしたため、乘輿の馬驚きたれば、捕へて廷尉に渡したるに、釋之は蹕を犯

すものは、罰金に當ると奏したれば、上は之れを怒られたるも、釋之は「法に斯如し。更に之れを重くせば、此の法は民に信ぜられず、廷尉は天下の平なるに、一度び傾かば天下の法を用ゆる者は、皆之れが爲めに輕重せられて、民は何處にか手足をおく所あらんや」と奏したれば、上は良久して曰く、廷尉の當は是なりと云はれた。

又高廟の玉環を盗むものありしに、之れを捕へて、廷尉に下して始めしめたるが、釋之は棄市に當ると奏したれば、上は大いに怒りて「人先帝の櫃を盗む。吾れ之れを族に致さんと欲するものなるに、廷尉は法を以て之れを奏す。吾が宗廟を恭承する所以に非ざるなり」と云はれたるに、釋之は「宗廟の櫃を盗みて之れを族にせば、假令愚民長陵一杯の土を取るものあらば、何を以てか其の法を加へんや」と云ふたれば、帝は之れを允された。

又或る時帝は、匈奴が上郡雲中に入寇したるを以て、周亞夫、劉禮、徐厲等の各將軍に命じて各地に分駐して之れに備へしめ、自ら行いて軍を犒はれたるが、劉禮、徐厲の軍は、車駕直ちに馳せて軍門に入り、大將以下は悉く之れを送迎したるに、獨り周亞夫の軍に至りては入る事を得ざるを以て、先驅の者をして天子將に軍門に至らんとすと云はしめたるに、都尉は軍中は將軍の命を聞いて天子の詔を聞かずと云ひたるを以て、上は即ち使を遣はして、節を持して將軍亞

夫に詔して、言を傳へて門を開かしめられたるに、門士は車騎に請ふて曰く、將軍は軍中に馳することを得ずと約せりと、依つて上は即ち轡を按じ徐行して營に至り、禮を爲して去られたれば、群臣は皆驚きたるに、上は「嗚呼惟れ眞の將軍なり」と云はれた。

右の如きは、僅に其の一端であるが、要するに惠文の二朝は、稀に見る治政であつて、民の此の時に及んで、始めて戰國以來の苦難を脱する事を得たるが、文帝に繼いで立ちたる景帝も、又惠文の治を續けて、天下の太平を來さしめた。

二 惠、文、景三朝の總評

後世の史家は「漢が興つてよりこの方、秦の煩苛を除き民と休息し。加ふるに惠文は恭敬を以て帝の業に従ふに至りて、五六十歳の間に風を移し俗を易へ、黎民酷厚にして國家無事なるを以て、人は給し家は足り。都鄙の廩庾は皆滿ち。府庫は餘財を餘し。京師の錢は巨萬を累ね。貫朽ちて校す可からず。大倉の粟は陳々相因りて充溢して外に露出し、紅腐して勝て食ふ可からず。吏と爲るものは子孫を長じ、官に居る者は以て姓號と爲す。故に倉氏、庫氏等もあると云ふ有様なれば、自愛して法を犯す事を重る。然れども罔疏にして民富むを以て、或は驕溢に至り、又兼併の徒ありて

郷曲に武斷し、又宗室も士を有し、公卿以下は奢侈度なくなりしは、蓋し物盛んにして、衰ふるは固より其の變である」と云へるは、其の當時に於ける治政の有様を描寫して餘蘊なきものである

第四節 孝武皇帝と方士

1 董仲舒と魯の申公

孝武皇帝名は徹、漢の第五世の君主である。此の時初めて元を立て、建元と號し、即位の年を以て元年と稱した。之れが即ち支那に於ける年號の始である。後世に至りて我が國にも亦此の風が輸入せられて、歴代の天皇は必ず元號を用ひらるゝことゝなつた。帝も亦祖宗の遺法を繼承して治道に精勵し、始めは儒術を以て天下を治めんと欲して、賢良、方正、直言、極諫の士を擧げて、親ら之れを策問せられた。此れが後世の天子が自ら天下の士を擧げて策問せらるゝ殿試の濫觴である。帝の親政第一歩たる此の策問に對して、最も明快なる答を爲して、天子の信任を得て儒學を天下に勃興せしめたるものは、即ち有名なる大儒董仲舒であつた。その董仲舒、策論は、事は強勉するのみである。強勉して學問すれば、即ち聞見博くして、智益々明となり。強勉

して道を行へば、即ち徳日に興りて大いに效あり。又曰く仁君は心を正しくして、以て朝廷を正し朝廷を正しくして、以て百官を正し。百官を正しくして、以て萬民を正し。萬民を正しふして以て四方を正し。四方正しければ、遠近正に一ならざるはなくして、邪氣の其の間に奸する事なし。茲を以て陰陽は調ひ。風雨は時あり。群生は和し。萬民は殖し。諸福の物の致すべきの祥は、畢く至らざるものなくして、王道は終るものである。

陛下行高くして恩厚く、智明らかにして意美なり。民を愛して士を好む。然れども、教化立たず、萬民正しからざれば、比へば琴瑟の調はざるごとし甚しき時は、必ず解いて之れを高調して即ち彈するものなるが如く、政を爲して行はれざるごとし甚しき時は、必ず變じ更めて之れを化すれば、即ち理むべきなり。漢は天下を得てより以來常に治を欲すれども、今に至るまで能く治まらざるものあれば、將に更めて化すべきものを、改めて化せざるからである。

又曰く、士を養ふは、大學より大なるは無し。大學なるものは、賢士の關する所にして、教化の本源である。願くば大學を興し、名師を置きて、天下の士を養はれたしと。

又曰く、郡守、縣令、民の師帥なれば、承流して化を宣せしむべきものなれば、宜しく列侯、郡守をして、各々其の吏民の賢なる者を選びて、年毎に各三人を貢せしむべし。

又曰く、春秋は一統を大にせしものにして、天地の常經古今の通義なるに、今師毎に道を異にし、人毎に論を異にするを以て、臣の愚は以爲く、諸れ六藝の化の孔子の術に非ざるものは、皆其の道を絶つては、而して後統紀一なるべく、法度明かなるべくして、民從ふ所を知らん。

と答へたるを以て、帝は其の答へを善として、直ちに江都の相とせられた。故此の董仲舒は、恰も高祖の時代に叔孫通が朝廷の儀禮を定めて、戰國の後を受けて破壊せられたる禮樂を正し、以て秩序整然たらしめたと等しく、董仲舒は是れを學術思想の上より、孔子を中心とする儒教主義に基づいて、天下人心の歸趨を定めんと欲し。之れが爲めには大學の擴張と、歲貢の方法と、學說の統一とを行ふて、其の實現を期したるものなれば、董仲舒は、實に漢一代の儒學復興第一人物であつた。

右の如き建策が容れられたる結果、帝は四方の賢者を招かんと欲して、各方面に於て之れを物色し、魯の申公と云ふ大學者の名を聞いて使者を遣はし、安車蒲輪を奉じ、東帛に壁を加へて之れを迎へたるに、已に到りたるを以て、問ふに治亂の道を以てしたるに、年八十餘の公は、之れに答へて「治を爲すは、多言に非ずして、力行の如何を省るのみ」と答へた。

此の申公は、果して如何なる人物であつたかは、史籍も明かに之れを傳へて居らぬ。故に其の人

物如何を知る事を得ざるも、要するに道家の流を汲みたる隠君子が、帝の安車蒲輪東帛加壁の殊禮に感じて、老軀を掲げて帝都に到り、謁見はして見たものゝ、根が老莊の主義を體する人物であるから、天下の治亂は口舌の能くする所に非ずして、要は實行の如何を省るのみと言ふ言葉で、帝の頂門に一針を加へたるは、支那に於ける孔老の二大思潮が、一貫して社會の表裏に周流して、各々其の特色を發揮したことを如實に物語るものである。さもあらばあれ、帝の五年には益々儒術を尊重して、遂に五經博士を置かれた。此れが支那の學界に始めて、博士と云ふ稱呼の現るゝ起源であつた。

口 丹砂、鍊金説の擡頭

武帝は漢室歴代の君主の中では、頗る英邁なる君主であつて、東は朝鮮を征して四郡を置き。西は萬里の長城を出で、單于と戰ふと云ふが如き人物であつた上に、先王の遺法を繼承して儒術を以て天下を治めんと欲し、即位の七年には、元を改め元光と稱し、郡國に詔して孝廉各一人を擧げしめた。然るに元光二年には、動機の如何は之れを知るに由なきも、方士李少君と云ふものを引見せられた。此の李少君は極めて巧妙に、帝の心理を捉へて之れを操縦し、且つ其の言が屢々適

大支那大系

中したるを以て、英邁なる武帝も、根が深宮に成長せる身なれば、遂に其の術中に陥り、抜くことの出来ぬ有様となつたのである。

然らば彼は如何なる方法を以て、帝に説いたかと云ふに、彼は「竈を祭れば、即ち物を致し、丹沙は化して黄金と成り、蓬萊の仙者を見ることを得、之を見て以て封禪すれば、死せず」と云ふが如き方法を以てした。然るに帝は、之れを信じて親ら竈を祭り、又方士を遣はして海に入りて、安期生（仙人の名）の属を求めしめたるを以て、海上の燕齊（河北、山東）地方の迂怪の士は、多く來りて交々神事を言ふことゝなつた。されば帝が方士の言を聞いて、竈を神なりとして之れを祀りたるは、之れに依つて物を致さんとするの心理であつたことは明かである。然らば帝が四方を經略するには、物質の力を必要とせる關係より、物を求むるの心が動きたる其の虚に乗じて、巧みに喰ひ入りたるものと思はれる。

而して丹沙を化して黄金とすると云ふ説は、單に丹沙そのものが直ちに化して黄金となると云ふにありしや否やは別として、丹沙そのものは、當時に於て既に其の紛末は強壯劑に使用したるものあれば、巧みに之れに説明を加へて、物質方面と肉體方面との要求に應ぜしめんとしたるものではないかとも思はれる。論じて茲に到れば、徐市が昔始皇に施したる故智を用ひて蓬萊説を持ち出し

思想の宗教

終に入海の擧を行はしめたものなるも、蓬萊、方丈、瀛洲の三神山は、其の何れの處に在るや不明なるも、兎に角海中に在る神山であつて、此の山中には不老不死の仙人が居住し、且つ不老不死の藥を有して居るから、人を遣はして之れを求むれば、必ず仙人を見ることを得られる。若し此の仙人を見た後に、名山に封禪すれば、不死なることを得ると云ふ所まで發展し、帝は之れを信じて方士を遣はして海に入らしめ、蓬萊に安期生等の徒を求めしめたるは、渤海沿岸に居住せる、いかさま方士の上京を促がして、我も我もと神仙説を振り舞はさしめたものと思はれる。

然らば此の安期生とは、如何なる者であるかと云ふに、列仙傳には彼は琅邪阜鄉亭の人にして、藥を東海の邊に賣りしが、人は皆彼の年を知らずして、千歳公と呼んで居つた。秦の始皇は曾て彼と共に語ることに三夜に及びしが去りたる後に彼の留めた書を見れば、今より千歳の後我を蓬萊山下に求めよとありたるを以て、始皇は直ちに人をして、東海に行きて之れを求めしめたるに、海中は常に風波ありて到ることを得ざりし爲め、遂に阜鄉亭に祠を建て、之れを祀つたと云ふことになつて居る。此れに由りて之れを觀れば、彼等はあらゆる事件を雲烟縹渺の中に置いて、蓬萊、神仙等を描いて、聞く人をして恍惚たらしむるも、之れを求むることは出来ないものとなつて居るのが即ち彼等方士の慣技であつた。故に其の後李少君が病死したる際にも、武帝は其の病死を信せずし

て、彼は即ち上仙したるものと信じたと云ふのを見れば、彼等の技量の到底尋常の者の及ぶもので無かつたと云ふ事が判るのである。

ハ 西域の経略と封禪

武帝は其の後益々方士の言に感ひつゝも、公孫弘が帝の策問に對して「人主は上に和徳あれば、百姓下に和合す。故に心和すれば、則ち氣和す。氣和すれば則ち形和し。形和すれば則ち聲和す。聲和すれば天地の和應す」と云ふて、かくならしむることが、即ち當世の務であると云ふ策問を見て之れを喜び、擯んで「第一と爲し、金馬門の待詔たらしめた。然るに齊人轅固と云ふもの、九十餘の老年を以て賢良を以て召されしに、固は公孫弘に對して「正學を務めて言へ、曲學して世に阿ること勿れ」と言ふたとのことであるが、是れは君主の意を迎ふる曲學派に對して、直言極諫する正義學派の二潮流が現はれて居つたことを知るに足る資料である。しかし孝、文、景の三世に亘りて蓄積せられたる富は、帝が間斷なく四方を經略しても、物力の窮する所とならず。元狩元年には博望侯張騫を西域に使はして、滇（干雲）國に通ぜしめ、二年には霍去病を以て驍騎將軍と爲し匈奴を伐たしめ、焉支、祈年山等を越えたるが、其後數年に亘つて匈奴を伐ち、元鼎二年には酒泉

武威郡を置いて、西域の通路を開かしたのみならず、南は南越を平げて九軍を置くと云ふが如き有様であつて、支那の領土は此の時を以て空前の大をなしたのである。
元封元年帝は、自ら將として萬里の長城を出で、單于を伐ち、又東の方海上を辿りて神仙を求め、泰山を封じ、肅然に禪し。五年には又泰山を増封し。太始三年には琅邪を巡つて海に浮び。四年には又東巡して明堂を祀り、封禪を修めると云ふが如き有様であつた。故に四方に對する經略と方士の言を聞いて神事を事として寧日なく、元を改むること數回に及び、即位當時の武帝と數年後の武帝とは、殆んど別人の如く、或は土木を興し、神仙を祈る等あらゆる限りの事を爲したるは、李少君以來文成、五里等の方士が、交々進みて之れを鼓吹し、遂に漢室の内部に巫蠱の疑獄を起し、皇后、太子も自殺すると云ふが如き悲劇を出だしたるが、其の晩年には神仙説の妖妄なる事を覺りたるも、尙ほ食を節し藥を服すれば、病稍々少なるべきのみと云ふて、精神的には神仙と離れたるも、日常生活には尙方士の説を用ひられたのである。

ニ 武帝の功罪

武帝は文帝の後を受けて、董仲舒、公孫弘等の説を用ひ、又兒寬等の經術を以て吏事を治めしめ

孔安國等をして六經を表章せしめたるを以て、帝一代の化を通觀すれば、儒教を勃興せしめ。漢民族の聲威を四方に發揚せしめたるは、即ち其の功蹟の大なるものなるも。中年より方士の言を信じて、無用なる土木を興し、或は不老不死の藥を求め。又神仙の生活を夢想して、得べからざるものを、無何有の郷に求めたる點は、或は其の罪とも云ふ事が出来る。しかし武帝の此の迷信的行爲は即ち漢民族が有したる、天地萬有の神に對する古代の信仰を大成して一の道教と云ふ、支那民族が自らの組織になる宗教を建設せしむるの動機となつたことは、思想史上及び宗教史上に劃然たる時機を造り出したるものと云はねばならぬ。

第六章 道教の建設時代

第一節 道教の初期

イ 古代に於ける信仰

古代の支那民族が有したる宗教的信仰の根源は、恰も人間に主權者があつて、政權を總攬するが如く、幽冥界にも亦天帝と稱するものがあつて、宇宙を主宰するものであると云ふ觀念は、既に各節を通じて述べたる通りなるが、此の觀念は終に政祭一致の政體を醸成した。故に本節に於ては、此れ等の天、又は神の種類を、左に列舉することとした。

一、天、此の天は百神の君であり、天子は萬國の主であるから、天子は毎年冬至の日を以て、天を南郊の圓丘に祀るのは、即ち冬至の日は太陽が、極南に位する日であつて、一陽來復の始まりなれば、此の日を以て天を祀るは、即ち陰陽の二氣中の陽位を祀る爲めである。而して之れを圓丘と云ふのは、土を築いて圓壇となして、天象の圓形に象るからである。

而して此の天に對しては、或は此れを天帝とも稱へ、又は上帝、昊天等の名を以て呼ぶこともある。

天帝の外に、五帝と稱するものを四郊に祀り、又春夏秋冬の四季に配して祀る事ともなつて居る。而して此れは天は唯一のものなるも、分れて五帝ともなり。又其の氣は木、火、土、金水の五行となり。春、夏、秋、冬の氣候となるもなれば、此等は皆天の作用であるとして、之れを祀るものなれば、單一的の多神教に似たる天は、五帝と稱へらるゝに至つて、交替的の多神教と變じたる觀がある。

二、寒暑。此等の寒暑は、天然自然の作用を迎へる意味に於て、春夏秋冬の氣を迎ふる爲めに、四時に祭祀を行ふのである。

三、日月。此の日月は、天上の諸星中に於て最も尊きものなれば、之れを祭るには、東門外に圓壇を築きて日を祭り、西門外に地を開いて月を祀ることとし。又蜡祭を行ふて、五穀の成熟を謝し。或は風雨の時ならざるに當りては、此等の諸神を祈ることもあつた。

四、星辰。星は木火土金水の五星を以て、其の主なるものと爲し。此れには一々の名稱と、其位する方面とを分つと共に、四季に當符めて、某星は某事の運命を掌るものとし、某星は農事を

掌る神であると云ふ風に分類して、此れを祀るものである。而して其の祭各は、郊祭と云ふて居る。

五、風祀及び雨祀及び其の他。風祀と雨祀とは、洪範に風を好む星と、雨を好む星があると云へるが如く、其の風を好む星は箕星であり。雨を好む星は畢星であるとして之れを祭り。雲又は雨は陰陽、闔闢、嘘呼（呼吸）の氣である。此の氣には各々神があつて之れを掌るものなれば之れを祭らねばならぬ事として居る。星は全體に於て二十八宿と爲し、之れを十二の辰に分つと云ふが如き煩雜極るものである。要するに此れらは、何れも皆天體に屬する神であつて、此の星にも皆其の職司がある。例せば文昌星は、凡ての文學を掌る星であるが、此の文昌星は道家に於ては、文昌帝君と變じて居ると云ふが如きものあつて、其の名稱は司録、司命、司春、司夏等の神としてある。

六、地祇。地祇は凡て地に屬するものであつて、此れを社稷、五祀、五岳、四鎮、四瀆、山川、岳嶺、墳衍等に分つて祭られて居る。

此の地も亦全體を祭るには、冬至の日に天を圓丘に祭るに對して、夏至の日を以て、地を方澤に祭る事として居る。此の方澤は、城外の北郊に小なる高丘を設け地象に則り、此れを方形に

屈曲せしめてある。而して此れは勿論大祀である。

七、社稷。此れは地祇は萬物を戴するものなるが、『社』と云ふのは其の土地の職能に依つて、農業、貨殖を爲すものなれば、此れを祭ることゝし。『祀』と云ふは、即ち穀神を代表せしむるものである。其の意味は自然力に依つて、五穀の發生するのは即ち穀に神あるが爲めであるとして、此れを祭る事となつて居る。而して其の祭は、中春及び中秋の二季を以てし、春は豊年を祈り秋は報祭の意味である。

八、五祀。此れは五行の氣は天に行はれ。五行の質は地に備はる。故に天に在つては五帝と爲り地に在つては五神となり。東西南北の五方に分列して、地を助けて萬物を化育するから、之れを祭るのである。

九、四望。此れは五岳、四嶺其の他の山川は、全國に亘つて居るものなれば、天子は之れを望祭（遙拜）するものである。何となれば、諸侯は其の境内の名山大川を祭るに過ぎないが、天子は其の疆域の四方に對して、之れを祭るには距離遠きを以て、四方に向つて之れを遙拜するのである。

以上は古代に於ける支那民族の信仰對象を略記し。此れを第一は自然崇拜として、天神、地祇、

山川、風雨を祭り、第二は靈魄崇拜に變じて、社會に功勞ある先哲の靈、又人鬼を祭つて其の福を迎へ、厄を除くものとなつたが、其の動機は感謝の意を捧げて、其の本を忘れずと云ふ意味より發達したものが祭祀である。其祭祀が發達して、種々の神が顯はれたのが、支那古代に於ける民族の信仰であつた。

『註』一、五祀は天然崇拜である。五岳とは、泰山（東）、霍山（南）、華山（西）、恒山（北）、嵩山（中）の五山であつて、五祀の思想より、山の代表的のものを祭ることゝなつてのである。四鎮とは、山に對する都會を代表するものであつて、古代に在つては、揚州の會稽、青州の沂山、幽州の醫無閭、冀州の霍山であるとは、鄭玄が周官の大宗伯の下の註に擧げられた地名である。四瀆とは、水を代表せるものであつて、江、河、渭、濟を指すものである。而して之れには『四瀆以て修まれば、萬民即ち宅あり』と云ふて、水害を免れる爲めの祭である。山川、丘嶺、墳衍等は、前記の如き特殊の山河を除く、凡て地上に現はれたる、一切の山川丘嶺を指すものである。

二、人と物との崇拜に就ては、竈神を祭つて居るが、此れは吾人の生活には炊を先にせねばならぬ。故に寵人を祭ることゝし。その他農業を創始したる神農、耕種を教へたる后稷、住宅、貯

水池、猫虎（猫は田鼠を捕へ、虎は田豚を捕へて、人生に功あるに依る）用水路等の八種を總稱して蜡と稱して居る。以上の八者は、何れも皆民生に功あるを以て、之れを祭ることとしたのである。

三、生活に直接功勞ある神としては、六宗と稱して、先王、先蠶（黃帝の姫蠶業の創始者）、先火（火の發明者）、先炊（割烹を始めたるもの）、先卜（卜筮の創始者）、高禰（產婆の創始者）を祭るものである。

四、厲、儼。此れは災を除く爲めである。厲と云ふは、人の死して宇宙の間に存在せる魂魄が、祭られざる時に祟りを爲すものなれば、之れを祭らねばならぬものとし。儼と云ふは、惡氣を驅逐する事であつて、熊皮を冠り、金色にて四目の面を敷き、玄衣に朱裳を着て矛を執つた、恐るべき假裝を爲し。春秋冬の三時に之れを行ふものである。其の他の小神、又は人鬼に對する種々の祭あるも、茲には之れを略して置く。

民間古代の信仰

孔子は中庸の道を旨とし、怪力亂神を語らずと高調して居るが、其の實支那の古代史には鬼神の

存在を信じ、此等の鬼神が能く吉凶禍福を人間に與ふるものとして、此れに對して祈禱すれば、罪を免れ福を得ると云ふが如き思想は、孔子の刪定せられたる六經の中にも枚擧げなき程の實例がある。殊に左傳には趙子（趙盾）の爲めに侵かされたとか、又伯有の鬼が出現したとか、實跡が祟りを爲したとか、狐突の申生の靈を見たとか云ふが如きは、其の例に乏しくない。又死後に於て其の靈魂と生活を共にせんと欲して、殉死するものが少なくなく、秦の穆公が薨じたる時、百七十四人の殉死があつたと云ふが如きは、即ち是れである。又死者の爲めに營む墳墓は、死者の永遠に居住する住宅であると云ふ觀念より、之れが爲めには、墓地を撰ぶに當りて、其の墓地が果して、死者の靈を安んずるものなりや否やを、卜筮に依つて之れを決したと云ふが如き事が行はれて居つた。

思想・宗教

次に祈禱と云ふ觀念も、古代より行はれて居つたと云ふことは、あらゆる古典に現はれて居る。而して其の祈禱を行ふには、犠牲を供へて神の靈感を請ふと云ふ觀念より、牛羊豚等の犠牲を供ふるは、まだしも甚しきは人身を以て、神の犠牲に供して神意を慰むると云ふやうなことが行はれたものであつて、鄴の民は河伯の言を信じて女子を水中に沈め。又魯の僖公は大旱の爲めに、巫者庇（人名）を焚き殺さんとしたこともあり。又宗廟、樂器、軍器等を新造したる場合には、皆牛羊豚鶏等を殺して、其の鮮血を塗ると云ふ風習もあつた。或る時は主人の鼻を打つて、其の鼻血を出し

道教の建設時代

之れを鬼神に饗したと云ふが如き記事も、左傳、公羊傳等に出て居る。此等の風習は、野蠻蒙昧の世に當りて、人の未だ火食せざる時代に、鮮血淋漓たる生肉を食したる遺習が火食庖厨の術が開けたる今の世となりても、尙ほ其の之れを改むること能はずして、神聖な祭祀と云ふが如き場合には、必ず斯くの如き血腥さきものを用ひ。甚しきは人身すらも犠牲に供すると云ふが如き風俗が残つて居るものと思はれる。

故に孔子も祭祀に對しては、かゝる残忍性は、之れを改むべきものであるとは明言せざるも「君子は其の聲を聞いて、其の肉を食はず」とか、又「君子は庖厨を遠ざく」とか云ふて、自己が食する爲めに、家畜等を殺すに残忍なる行爲を爲すべからざる旨を誡めてあるのを見ると、恐らくは氣の付かざりし筈なきも、有史以來の遺風たる血に滲みたる犠牲を神に供すると云ふ風習は、之れを改むるに由なくして、敢て之れに言及せられなかつたものとも思はれる。

右の外、夢兆とか、卜筮とか、天道（豫言類似のもの）とか云ふものが一般に行はれて居つた。夢兆と云ふのは、果して如何なる方法を用ひしかは明かならざるも、楚の子玉が河神を夢みたとか衛の成公が祖先康肅を夢みたとか、晋の中行獻子は夢に厲公と訴へたと云ふが如き記事が、非常に多數なるを見れば夢に對する占ひも盛んであつたことが判かる。詩經にも熊羆の夢を見れば、男を

生むの兆であると云ひ。虺蛇を夢みる時は、女を産むの兆であると云ひ。捕魚或は旄旗（旗の類）を夢みるは、豊年の兆であると云へる反對に、孔子は「甚だしいかな、吾が衰へたるや。久しいかな吾夢にだも周公を見ず」と云ふて、晩年夢にすら周公をみる事が出来ないとの歎を發して居るのを見れば、古代の支那人が、夢に重きを置いた事が明かである。

卜筮に關しては、已に説明する迄もなく、前項に於て屢々之れを述べた所である。惟だ此の卜筮の種類方法に關しては、頗る多數の方法があつて、龜を焼いて之れを卜する方法もあれば、筮竹を以て卜する者もあり、又占夢と稱して、夢の吉凶を占ふ専門家もあり。又眡祲と稱して、陰陽二氣の變化と消長を見て卜ふものもあり。馮相氏と云ふて、天文を見て曆法正すものもあり。又保章氏と云ふて、天文に依つて災異を前知するものもある。此等は皆所謂卜筮、其の他の方法を以て、天道と稱する豫言に類することを爲すものなるが、此れは「天に口無く、人をして言はしむ」と云ふ意味から來たものである。故に此等は時に童謡となつて、禍福消長を示さるゝものとして居つた故に堯が街衢に出で、童謡を聽いたのも、皆古代民族の信仰的方面の一端を語るものである。されど其の半面には、所謂野心家の製造する謠言もあれば、又迷信家の鼓吹する怪異の言論も行はれたれば、戦國時代の賢者として名の高かつた、鄭の子産は「天道頼むに足らず」と云ふて居るのは

此の間の消長を語るものである。故に予は上記の事實に依つて、古代に於ける民間信仰は、何等現代の社會と異なる所なきことを知り得たのである。

ハ 讖緯學者出現の濫觴

前述の如く古代に於ける民間の信仰は、萬有以て神と爲し。其の神示に依つて事を決せんとするものが即ち卜筮であり。夢兆であり。又天道と云ふが如き名と爲つた唯一の理由は、人類は萬物と共に陰陽の二氣より化成したるものなれば、是に順へば吉にして榮ゆるも、之に逆らへば凶にして亡ぶと云ふのが即ち易の原理である。故に此の陰陽二氣を打つて一丸となしたるものを、宋儒は太極又は無極と稱し。太極より兩儀（陰陽）を生じ。兩儀より四象、老陽、少陽、老陰、小陰を生じ。此の四象より八卦（乾、坤、艮、兌、坎、離、震、巽）を生ずと云ふものであるから、此の八卦は皆自然の現象を説明したものなれば此等皆易が根本思想となつて居るのである。しかし古代の易には未だ五行説は取り入れて居らぬ。而して此の五行説は、萬物は皆木、火、土、金、水の五行に依つて生ずるものなれば、此の五行は即ち宇宙の本體である。故に此れには逆行すべきものではないと云ふ思想も、易の陰陽思想と平行し得ることゝなつたのである。

されば漢に至つて易、陰陽説の外に、更に五行説を加へて、古書を説明せんとするの風が行はれてより、董仲舒の如きは、此の混合説を高潮し、鄭玄に至つて其の説を完成した。故に一度此の陰陽、五行が混合を見たる後は方技、又は術數と稱する一派が顯はれて、讖緯學と稱するものも生れた。而して此の讖緯學の依つて來る所は、如何なるものであるかと云ふに、讖は、未來の事を豫言する者を指し、緯とは經書に依りて其の大義を説明すると云ふ意味であつて、此れは決して出鱈目ではなく、經書を緯として天道を説明すると云ふのである。然れども此等の豫言は、決して漢代に初まつたものに非ずして、古く三代の當時より、此れに類するものがあり、戰國の世に至りては、益々各種の豫言者が現はれて、所謂天道と稱する一派をなしたつゝありしものが、漢代に至つて益々此の風が盛んとなり、遂に後漢の世に至りて、易に加ふるに五行説を以てし、此の五行の木を東と爲し。火を南と爲し。土を中と爲し。金を西と爲し。水を北と爲し。更に又之れに甲乙は木に屬し。丙丁は火に屬し。戊己は土に屬し。庚辛は金に屬し。壬癸は水に屬するものとし。又之れを日月にも掲げて、

十五日は、木に屬し、甲に屬し、乾に屬し、東に屬するものとす。
二十九日は、木に屬し、乙に屬し、坤に屬し、東に屬するものとす。

二十三日は、火に屬し、丙に屬し、南に屬し、艮に屬するものとす。

八日は、同じく火に屬し、丁に屬し、南に屬し、兌に屬するものとす。

戊は、土に屬し、坎に屬し、中に屬するものとす。

巳は、土に屬し、離に屬し、中に屬するものとす。

三日は、金に屬し、西に屬し、庚に屬し、震に屬するものとす。

十六日は、金に屬し、酉に屬し、辛に屬し、巽に屬するものとす。

と云ふが如き説を爲して、一陽の初めて生ずるのは、即ち震(☳)の卦なれば、三日の上弦に當り。八日の兌卦(☱)は更に一陽を加へたる乾(☰)卦の三爻に當る象なれば、之れを陽と爲るものなれば、十五日の滿月は又之れを陽に屬して、乾の卦に當符めたのである。

次に巽(☴)卦は、即ち一陰の兆する象であるから、即ち之れを十六日に當て符め。艮(☶)卦は更に一陰を増したる象であるから、二十三日の下弦を示す象であると爲し。坤(☷)卦の三爻は皆陰であるから、即ち二十九日と爲して居る。而して其の思想の根據とする所は、日月は共に北方の壬癸に逢へば皆滅するも、更に中の戊巳に至りたる後の翌月三日に至れば、初めて一陽の生ずる震の象となすものなれば、北方の壬癸より、更に中央に入るものとすれば、北方は此れ天の

最高の所であり、又凝陰の方であり。且つ其の一半は地下に没するが故に、之れを稱して納甲と云ふて居るが、是れは陽氣の充實せる甲と、陰氣の盛滿せる乙とは、各々北方壬癸の内に納入すべきものである。と云ふが如き方法を以て、説明して行くのが即ち讖緯家の特調である。故に之れを一言に説明すれば、易の陰陽を基礎としたる八卦に加ふるに五行説を以てし。更に之れに卜筮其の他の方技を交へて、其の説を神聖なるものと爲し、現在の事象は勿論、將來に對する吉凶、禍福を豫言することとなつたのは、前漢の中葉より後漢に至つて益々盛んとなり、三國時代に至りては更に幾段の進歩を見たるが、本節では之れを略して、只易に加ふるに五行説を以てするのが讖緯家であると云ふに止めて置く。

第二節 秦末漢初の思想界

1 始皇の錯覺

秦の始皇は前にも述べたるが如く、醫藥、卜筮、農業の書籍以外は、三代以來の徳治主義によりて大成せられたる儒教も、春秋時代に勃興したる諸子の學説も、全部之れを抛擲して、直ちに思想

中央集権を行はんとしたる彼の頭脳には、何等精神界を風靡すべき内容ある思想を有せずして、彼は惟だ彼の天下を統治するに便ならしむるため、一切の學術を排斥せんとしたる、極端なる利己的思想の持主であつた。故に諸種の書籍を一括して之れを焚き、是等の學業に従事する書生は之れを坑殺したるも、彼自身としては何等胸中に頼むべき思想もなく、又信すべき道も無かつたので、遂に方士の言を聞いて不老不死の薬を求め、又は泰山、梁父に封禪して、不可能なる不老不死の天地に逍遙せんとするの愚を演じたのである。

故に後世に至つて、秦代の思想を見んとしても、其の期間の極めて短かゝりしと同時に、學術の發達を阻止し、學者を壓迫したるため、秦代の學術思想として傳はるものも少なきは當然である。しかし彼れの統一前の支那は問題である、故に予は秦代のものとして、傳へられて居る呂代の思想を一瞥することゝしたるが、之れは殆んど老莊の思想を受けたものであつて、獨創的思想ではない。されど試みに其の一端を左に摘録すれば、

道は貞きを以て身を持ち、其の緒餘は以て國家を佐け。其の土直は以て天下を治むべきものである。之れに依つて之れをみれば、帝王の功は聖人の餘事にして、身を完ふし生を養ふ所以の道ではない。今茲に人有り隋侯の玉を持つて、千仞の雀を弾けば、世は必ず之れを笑ふであらう。

之れ何ぞや、重んずべき所のものを用ひずして、輕んずべき所のものを要するからである。夫れ生は豈特に、隋侯の玉より重きものならんや。

又出ずるには則ち車を以てし。入るには則ち輦を以てし。務めて以て自ら佚するに之れを命じて招楚(不安)の機と云ふ。肥肉と厚酒を以て努めて、租疆るは、之れを名けて瀟陽の食。云ふ。麋曼(こまやかなる膚)皎齒と鄭衛の音と以て務めて、自ら之れを樂しむものは、之れを名じて伐斧の性と云ふ。三好は貴富の致す所なり。故に古の人は敢て富を貴しとせざるは、性を重んずればなり。

とは即ち物欲を避けて、其の心を正しふし、其の身と性とを完ふすべしと云ふのが、呂子の思想である。故に呂子の思想は其の系統より云へば、即ち老莊の亞流である。此の外には極めて苛酷なる法律萬能主義の思想と、不老長生を希望する仙人説があつたのみなることは、既に述べた通りである。

漢初の思想界

漢初の思想界も亦秦代の影響を受けて、何等の特色を發揮して居らぬ。漢の高祖が草莽より崛起

して遂に天下を統一したるは、秦の前法に飽きたる人心に乗じて暴を除き良を安んぜんとする意思を現はすに、法三章を約して民をして其の堵に安んぜしめたと云ふこと。一般社會の欲求に合し、又社會の人心を得たる所以である。されど名門の出でもなく、又何等特殊の修養をなしたることなき人物が天下の人心を獲るには、卜筮とか、天道説が行はれたる時代だけに相當の挿話がある。例せば未だ微なりし時の高祖は、或は赤帝の子が白帝の子を斬つたとか、或は彼の身を置く所には必ず雲を生じて、其の所在が確め得られたとか云ふが如き、今日に於ける宣傳方法を以て、人心を歸嚮せしめた點を見ると、當時に於ける思想界の一斑が窺はれる。

しかし一步を譲りて右の如き説は、高祖自身の宣傳には非ずして後世の史家が高祖を偉大ならしむる爲めに、かゝる説を記述したとすれば、尙更かゝる色彩を有することが、支那に於て天下を争ふものには、絶對に必要であると云ふことを示す、絶好の資料であると云はねばならぬ。

然れども予は斯る一般的の傾向よりも、漢の高祖の崛起したのは、更により以上に天下の人心を衝動せしめたものと思はれるものがある。何となれば、従來は諸侯又は名門の出身者が、父祖の地位、又は領土的の根據地を有せるものが立つて、天下の人心を収めたるものなるに、高祖は全く其の型を破りて、匹夫より起つて何等特殊の學問、又は地位、閱歴を有せず。又根據地を有せざりし

ものが、直ちに起つて天下を争ひ、しかもこれを得たと云ふことは、痛く天下の人心を刺戟して、人々立つて天下を争ひ得るものであると云ふ感を抱かしめ「王侯將相寧ろ種あらんや」と叫ばしめたのである。蓋し高祖の崛起が特殊階級者のみが、争ひし天下を争ふて、庶民階級のものでも天下は争はれるものであると云ふ。極めて大なる教訓を與へたれば、後世に至りて競争の目的が、天下と爲つたと云ふことである。故に一言以て之れを蔽へば、到底制限選挙が普選の世となりたる以上の衝動を與へたるものであつた。

ハ 儒學の復興

然れども匹夫が起つて、天下を争ふと云ふのみを以てしては、天下の人心は絶えず、此れ等若干の野心政治家の爲めに、其の生活の安全を脅かされて、安定の日を得られざるものなれば、統一の大業を完成するには、必ず優越なる武力も必要であるが、又其の一方には、先王の治法及び禮樂をも整へて、始皇に依りて破壊せられたる、學術を復興する必要を感じたることは、恰も赤色露西亞が勞農の勢力に依つて、純共産主義の國家を組織して、舊來の資本主義的の社會組織を破壊しては見たものゝ、或る程度までは資本主義的の組織を以て、産業統制を行はざるに於ては、到底其の

衣食の供給すら完全ならざる爲め、其の急を救ふ爲めには、數年を出ずして、純共産主義の制度を改めて、所謂新經濟政策を提唱して、破壊し盡くされたる産業の復活を企てたと同じく馬上で天下を取つた高祖も、儒教の復興の必要を感じて終に始皇以來絶滅したる儒教を中心とする文學、及び禮樂を復興することゝなつたのである。

故に叔孫通を始め、董仲舒、鄭玄、弘安國、楊雄其の他の儒者が崛起して、後世の所謂漢儒と稱する一派を形成することゝなつた。されば漢の高祖も亦秦の始皇が祭りたる白、青、黄、赤の四帝に黒帝を加へて、此れを五祀と爲し。又彼の故郷たる沛邑には、枌榆(神木)社を設けて之れを祀り、又蚩尤を咸陽に祀りたる以外に、天祠、地社、天水、房中、堂上の五者を祀り。又東君(日神)雲(中君)族人炊(炊事の祭)施糜(粥の神)等を祀り。又河神、山神、靈星(農神)と云ふが如き種々の神を祭らしむるに、神巫を以てせしめたのを見れば、漢民族が古代より祀りたるものには其の種類の如何を問はず。五帝、五祀を始め、天地、日月、山川を祭つて、汎神教的の自然崇拜主義を取りたるが、未だ此の時代までは、甚しき牽強附會の迷信には陥つて居らなかつた。

然るに武帝の世に至りては、秦の始皇と其の趣嚮を同じくして、鬼神を敬する外、遂に方士の説を奉じて、鬼神は誠意を以てすれば、人身に馮依するものであると云ふ説を信じ、神仙は必ず之れ

を誠意に依りて致し得べきものと爲し。又竈神、三一(天一、地一、泰一)を合稱せるものゝ及び、五帝其の他の名山、大川等を祀ることは從來の通りであつた。が、其の中でも、泰一は最も尊貴すべきものと爲したれば、後世王莽の時代に至りては、天地、六宗よりして、河海、山川、其の他を祀る場所が、千七百と云ふ多數に上り。此れに要する犠牲の缺乏を來すまでに祭祀は擴大せられ、後漢に至りては讖緯説の流行と共に、昊天、上帝等の地位は、泰一の爲めに奪はれ、古代の如く此れを尊ばぬことゝなつたのである。

二 漢代の諸子

漢代に入つては文帝以來儒學の復興と共に、思想的にも稍復興の蹟を示し、淮南子の如きは、人心は其の性邪なきものなるも、之れを久しふすれば、變するものなれば、之れを務めて養ふべきものであるとて、左の如き説を述べて居る。

人の性は邪なきものなるも、久しく俗に湛(沈滯)ゆれば、則ち易るものにして、易れば本を忘れて、性に合するものゝ如くなるを以て、日月明かならんと欲すれども、浮雲之れを蓋ひ。河水清かならんと欲すれども、沙石之れを濺し、人性平かならんと欲するも、嗜欲之れを害する

が如きものなれば、惟だ聖人は物を遺れて、能く己に反ることを得るものである。
 夫れ舟に乗じて惑ふ者は、東西を知らざるも、斗極（北斗）を見れば、則ち寤るが如く、夫れ性も亦人の斗極なれば、以て自ら見ることあれば、則ち物の情を失はず。以て自ら見ざれば、則ち動いて惑營すること、例へば朧西に遊んで、愈深すれば愈々沈むが如きものである。
 とて人の性は元來邪なきものなるも、久しく俗中に沈溺すれば、其の俗は、變じて其の本を忘れ、却つて其の變じたる俗が、本然の性の如きものとなつて、恰も日月の明を浮雲が蓋ふ如くなるものなれば、人は自ら其の本性たる斗極を見て、本然の性に歸らねばならぬ。然るに若し之れを見ること能はざれば、役々營々として、愈々深すれば愈々沈み行くものであると云ふて居る。
 次に有名なる楊子も亦左の如く自然主義を鼓吹して、人生は夢の如き一の逆旅であると云ふ思想を述べて居る。

富貴なるものは、蝶夢に齊く。榮辱なるものも、蝸角に等しく、一身を貴賤、榮辱の場に寄すれば、一の逆旅である。一心を貴賤、榮辱の外に超ゆれば、一の虚舟なれば、外物は我に於て何か有らんや。
 とは即ち吾人が一身の富貴、榮辱に役々たるも、要するに富貴榮辱も、胡蝶の一夢の如く、極

めて短かく、蝸牛角上の如く極めて小なるものである。故に假令へ之れを得ても、逆旅の一宿にしめて、久居すべき所に非ざるが如きものである。故に一心を物外に超越すれば、恰も一の虚舟が大江の上に浮べば、四圍に何等の障碍物をも見出さざるが如く、逍遙自在にして、天地と其の體を同じふするものなれば、外物は我に於て何か有らんやと云ふ。極端なる唯心主義の主觀的生活を高調して居る。

又桂巖子とは、果して如何なる閱歷を有した人物なるかを知らざるも、兎に角彼の思想は、殆んと佛敎に等しきものがある。故に之れを左に記すこととした。

見有るものを質と謂ふも、而も見と曰ふべからず。今萬民の所謂無見の設も、君子の外とする所なれば、以て何とか爲さんや。或は謂ふ、性に善端あり。心に善質あり。尙ほ安くんぞ非善を以て、之れに應ぜんやと。曰く非なり。繭に糸あるも、繭は糸に非ざるなり。卵に雛あるも、卵は雛に非ざるなり。比類卒ね然かり。何の疑ひか之れあらん。

又、吉凶、利害は冥々にして見る事を得べからざるの中にありて。既に多く其の病を受くるも何に従つてか之れを知らん。故に曰ふ。聖人の問ふは、其の爲す所を問ふて、而して其の爲す所以を問ふこと無く、其の爲す所以を問ふも、遂に見ること能はざるものなるを以て、問はざるに

如かず。爲す可きは之を爲し。爲す可からざる所は、爲すこと勿れと問へば、此れ聖人と同質にして、何の過ちか之れ有らむ。
と云ふが如く、一種の思索的態度を以て機智を斥け、自ら之れを己に求めて、特別の天地を開拓せんとするものである。故に

源泉混々として、茫々たる晝夜は竭す。己に努むるものあるに似たるも、盈科して後に行き、己に平を持するに似たるも、嶽に循つて下に赴いて小間を遺さず。既に察する者に似たるも、溪谷に循ふて迷はず、或は萬里を奏して必ず至る。己に知る者に似たるも、山を鄣防して能く清淨に、知命に似たる者は、清からざるも入り、潔清なるも出でず。既に善化するに似たる者は、千仞の磬石に赴いて疑はず。既に勇者に似たるは、物皆大なるに因る。而して水獨り之に優る。既に武者に似たるは、徳の生を感じ、之れを死に失す。(下略)

と云ふが如きは、彼の思想が雄大にして、萬物共に自得せる境界を示したるものである。其の外漢代には黃石子、孔叢子、陸子、賈子等の諸子があつて、學界並びに思想界を賑はした。

ホ 本節の概評

秦漢時代の支那の思想界は、周末に咲き亂れたる百花が、秦代に至つて恰も秋霜に逢ふて其の姿を萎めたるが如き觀を呈したるも、前漢の世に至りて儒教は勿論、其の他の諸子百家も、惠、文二帝の培養に依りて、殆んど蘇生の觀を呈し。老莊其の他の學派も淮南子其の他の諸子に依りて之れを繼承せられ。更に武帝の世に至りては、神仙を好みたる影響を受けて、方士の登場する舞臺となり。理法の天は主宰の天と變じ、理性の神は人格の神となり。遂に道教一派の成立を見て、支那人の組織せる一の宗教的形體を具ふることとなつた。故に此の時代に至りては、古代の純朴にして質實なる國民性も、變じて多智多才の人物多く、又道教の發達と共に、頗る怪異の神仙説が行はれたる結果、支那の國民性は一變して功利的のものとなつた。何となれば、神仙説其の物は、極めて現世を超越したる飄逸のもの、如くなるも其の實彼等の唱ふる神仙なるものは、極めて功利的なる不老不死を唱へ、又神仙は禍福を左右すると云ふが如き説を爲したるため、古代に於ては極めて實質を主としたる民族も、遂に神仙其の他法家、名家等の諸説の影響を受けて、益々功利主義の信者となり、打算的の益壽延年より進みて、終に白日上昇して天地と其の生命を等しくするを得ると云ふが如き、道教を産み出したのである。

故に之れを換言すれば、支那民族の歴史以前は暫く措いて之れを論ぜざるも、有史以來は日常生活

活に必要な器具の製作を爲したる聖人の事蹟と、無爲して化すると云ふ、作意を離れたる自然主義を以て、彼等の現想的標準としたるものが、徐に變じて苟くも人智に依りて量られざるものは悉く之れを神として仰ぐこととなり。其の神は人に能く福を與へ、又禍をも與へると云ふ感念に變じ、之れに敬事して福を迎へ、禍を拂はねばならぬと云ふこととなり。茲に始めて報謝の祭は變じて、希求の爲めにする祈禱を合むものとなりしものが、社會の進歩と共に家系を重んじ、祖先を崇拜する事となりてより後は、更に一步を進めて神と人との交感説を産むに至り、此の神と人とを媒介するには卜筮、又は巫祝と云ふが如き鬼神に仕ふる專業者の出現したる徑路は、已に反復説明せる通りである。

然るに漢代に至つては、道家は此れ等の思想風俗を一爐に入れて、宗教的體系を組織した結果、玉石混淆の状態を免れずして、著しき迷信的傾向を有することとなり。古代に於て見たるが如き漢民族とは、其の性質を一變して、所謂驢に非ず、馬に非ざる一種特別の民族習慣を現出したと云ふことは、支那の思想史上より見れば、或る意味に於て幾分か退化を示したる觀がある。

第三節 道教の開創

1 道教の始祖張道陵

張道陵は後漢の桓帝の世に生れた。其の郷國は沛の豊邑の者にして、夙に大學に遊び五經に博通したるが晩年に至りて不老長生の道を學び、金丹の術を得たりと稱して、鶴鳴山に入つて道書二十四篇を著して其の説を高調した。彼は此の長生不老の道を求むるものには、皆米五斗を以て入門の贄となさしめたるを以て、世人は之れを呼んで五斗米道と稱して、彼の唱へたる道教なるものは、前記の如く種々雜駁なる風俗習慣の上に、顯はれたる萬有の神を拜するは勿論、民衆の慾求せる功利的觀念を利用して、巧に人民を誘ひたれば、民衆は蟻の甘きに附くが如く、互に先を争ふて彼の門に入りたるは、已に前漢の世が王莽の篡奪に依りて亡ぼされたる後を、光武帝の中興に依りて、東漢の世の再造せられても、既に十代を経たれば、漢の綱紀は紊れ、群雄は起つて天下を争はんとする時であつた。故に彼が道教を鼓吹するには、極めて便利なる時代であつた。試みに彼が道教を唱へたる、桓帝の治世を一瞥すれば、桓帝は尙ほ其の明君たるの資質を失はずして、敢て其の失徳と稱すべきもの無きと、宦官の跋扈甚しくて、遂に黨人の獄を惹起し、在位二十一年の間には、之を改むること七度に及び、其の間に登場せる人物には、或は李固、李膺を初め

大支那大系

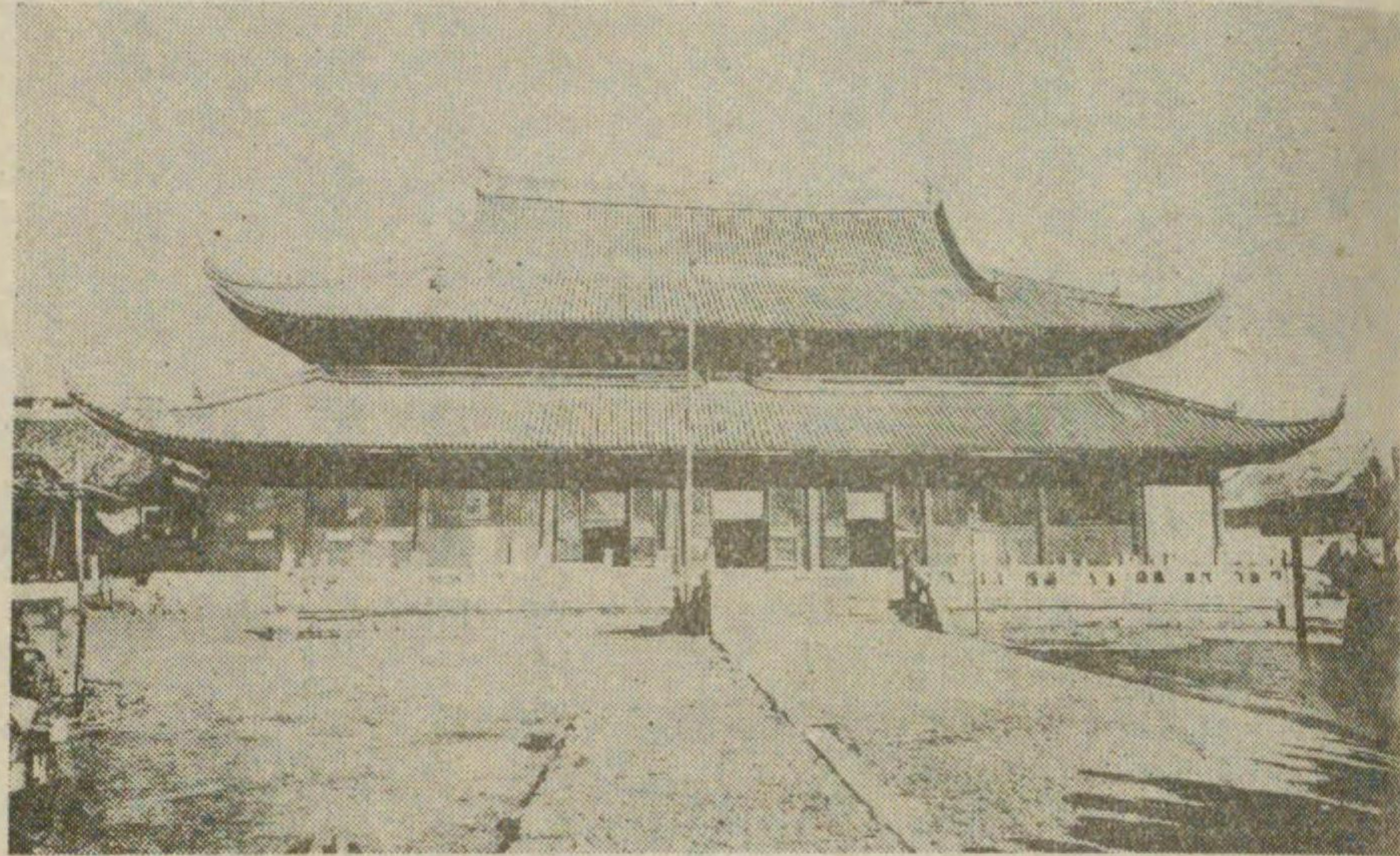
陳蕃、劉寬等の人物があつて、大體に於ては尙ほ其の治世を保たれた。然るに桓帝に繼いで立ちたる靈帝は、年十二にして即位し、竇太后は朝に臨みて、竇武を大將軍と爲し、陳蕃を大夫と爲し、



南京城外樓霞山紫霞洞

李膺、杜密等を擧げて朝に列せしめたるを以て、天下は皆太平を想望したるに、陳蕃、竇武等は宦官が國柄を弄し、海内を混亂するを惡み、曹節、王甫等を誅せんとしたるに謀漏れて宦官の爲めに乘ぜられ、即夜其の親しむ者と共に、血を軟りて共に誓ひ。幼帝を擁して前殿に御し、詔板を造りて王甫を拜して黃門令となし、其の黨をして節を持して武等を收め。強ふるに大逆も以てし。先づ陳蕃を捕へて之れを殺し

思想・宗教



蘇州元妙觀の三清殿

武は自殺したるを以て首を都亭に梟し。太后を南宮に移すと云ふが如き、大混亂を呉したるを始めとして、西邸を開いて宦を賣りければ、摧烈（人名）の如きは、五百萬を以て司徒の宦を得其子の問ふに外間の議論如何を以てしたるに、其子は「人皆其の銅臭を嫌ふのみ」と答へたと云ふが如き有様であつた。此の時に當つて鉅鹿の張角は、妖術を以て人に教授し。符水を以て病を療し、弟子を四方に遊ばしめて民衆を誘惑し。十四年の間に徒衆數十萬を得、之れを三十六方に分ち、大方は一萬餘人、小方は六七千人と爲し。各渠帥を置き一時共に起たしめた。彼等は到る所放火掠奪を事とし、旬日の間に天下響應して驚くべき大亂となつた。故に朝廷は皇甫嵩を遣はし、沛國の曹操と共に軍を合せて賊を破らしめた

道教の建設時代

張角の一味は皆身に黄巾を付けて、其の黨羽たることを示すの符號とした。故に世人は彼等を呼ぶに黄巾の賊を以てした。然らば此の黄巾の賊は、奸雄曹操が崛起して、三國の幕を開かしむるの動機を造りたるものにして、太平無事の世に起つたものでないことは明かである。而して此の張角と張道陵とは、如何なる關係を有せしかと云ふことは、道家の書籍は勿論、其他の書籍にも明確なる記録がないので、之れを判明することは出来ないが、要するに張道陵の創始せる五斗米道が、張角に依つて利用せられたことだけは確實である。

張道陵の生家

張道陵の生家に關しては、道家の手に成る『漢天師家傳』には、真人諡は道陵、字は輔漢、姓は張氏、豊邑の人、留侯子房八世の孫なり。母が天人北斗魁星より下りて、地に至り、薇蕪の香を以て之れに授くと夢みて之れを孕み、光武の建武十年甲午の正月望(十五)日、吳地の天目山に生れ、桓帝の水壽二年九月九日、呂西の赤城魁亭山中に於て、太上使者が遣はし、玉札を持して正一人の號を授けられたるに、即ち黒龍あり、一の紫輦に駕する玉女二人が來りて、真人と婦人雍氏とを引ひて車に登ほし、前導後從して迎へて一所に至れば、瓊樓玉門有り、闕城の金牌には玉字

を以て『大元都督正一人真人闕』と署してあつた。云々と記るし居る。かくて道陵の子衡、孫魯に至る三世は皆此の術を修め、陵と稱して天師と爲し、衡を繼師と爲し、魯を孫師と稱した。此の魯は始め荊州の太守劉焉の部下たりしが、其の後獨立して關中に據ること三十餘年にして、遂に曹操に降つたと云ふことである。

抑も此の五斗米の道と云ふは、病者あれば即ち符水を吞ましめ、或は又病者の姓名三通を書して其の一を山上に掲げ、其の一を地中に埋め、其の一を水中に沈め、稱して天地人の三官に祈つて、病を除くと云ふのである。然るに若し其の病癒えざる時は、其の人の信仰が未だ足らざるものと稱し、癒ゆれば其の術を神なりとした。而して張魯は自ら師君と稱し、諸學徒を稱して鬼卒と爲し。信從は姦令(意味不明)又は祭酒と稱し。鬼卒には老子を誦せしめ。又各地には無料の族館を建設し、又無料の餅肉を置いて、旅客をして自由に之れを取らしめたるが、若し貪心を起して過分に之れを取る者あれば、忽ち疾病に罹る者とした。此の外毎春夏には殺生を禁じ、酒を造らしめたることである。黄巾の賊張角も、亦此の術を修めて、太平道を創始して、張魯の子張盛に至りて、江西龍虎山に移り、今に至るも尙ほ連綿として其の道統を繼承し。依然として天師の號を稱して居る現代の天子は八十九代なりと記憶して居るが明瞭ではない。其の傳家の寶物としては、劍印、及

び都功籙等である。但し此の時代までは、未だ佛教の影響を受くること尠なきを以て、未だ後世に於けるが如く、道士の禁欲主義に依る、肉食妻帯禁止の風は起つて居ない。故に彼の子孫は世襲して居るが、後世に至りては完全に佛教の影響を受けて、禁欲主義を取りし爲め、他派よりは此の一派を稱して、火居道士と云つて居る。

ハ 老子と道教の関係

予は既に前節に於て述べた通り、張道陵の唱へたる道教と、老子の學説とは何等の關係無きものなるも、老子の學説中には、虛無主義を主として居る外に、或意味の社會主義的傾向を帯びて居るを以て、これを根據として人民を誘惑し、治病又は延年益壽等の神道に假托する以外に、民衆に最も都合よき一種の秘密結社を組織し、彼等の結社に加入したる者は、旅行するには無料の宿舎を有し、日常生活に必要な米肉は、無料にて之れ供給せられ。若し過分に取る者は、必ず疾病を得ると云ふが如きは、一種の共產主義的の社會を建設し、孔子の仁義を本とする、名節禮教に依る階級的社會の改造に反して、老子が超越的獨善主義を取りたるものを利用したものである。故に聖を絶ち、智を棄つれば、民の利百倍とか、

又天地は仁ならず、萬物を以て芻狗（祭祀に用ふる人形）と爲す。聖人は仁ならず、百姓を以て芻狗と爲す。天地の間は其れ猶ほ橐籥（フイゴ）の如きか、虚にして屈せず、愈々動けば愈々出づるも、多く言へば數窮る。中を守らんに如かず。
又谷神は死せず、之れを玄牝と謂ふ。玄牡の門は、之れを天地の根と謂ふ。綿々として存するが若く、之れを用ひて勤れ（勞倦）す。
又天は長く地は久し。天地の能く長くして且久しき所以のものは、其の自ら生ぜざるを以てなり、故に能く長生す。是を以て聖人は、其の身を後にして身先きんじ、其の身を外にして身存す。其の私無きを以てに非ずや。故に能く其私を爲す。
と云ふが如きは、即ち不老長生を説くの源泉ともなり。又後世に至りて吐納、導引の法を唱ふる根據となつたのである。
殊に谷神は死せずと云ふは、空虚にして靈妙なる道は、無始無終でなれば之れを玄牝と謂ふ一章の如きは、此の玄牝を種々に説いて、萬物を産むの母と爲し、又天地の根本であると云ふ説明に一步を進めて、天の永く地の久しき所以は、其の間に何等の私の無い自然であるから、長久を得るものなれば、聖人も亦其の身を後にすれば、人は其の間に何等の競争心を起さざるを以て、自然に

人の先きとなることを得、其の身を外にすれば、却つて其の身は存し得らるゝものであると云ふが如きは直ちにこれを敷衍して、前述の如き無料旅舎其の他の組織に應用せられたるも、其の老子とは何等の交歩のないことは云ふまでもないことである。

二 本章の總評

老子の道徳經五千言も、此の時に至りては、程々の風俗と思想とを合致して、新宗教を説立するには唯一無二の經典として利用せられた。勿論其の茲に至りたる動機としては、張道陵が生れるに先き立つこと八十餘年前（即ち後漢の永平十年）に、佛教が支那に渡來して、一の系體を有する宗教が、彼等の目前に展開せられ。其の經典は翻譯せられ。其の教主は衆人の前に祀らるゝと云ふ時代となつて來たので、彼等は之れに對抗する爲めにも、一の教主を必要とすることとなり。終に老子を利用することとしたる以上は、更に老子をして、より神聖ならしむる爲めに、支那民族の最も崇拜せる黃帝まで溯ることとなつたのは、既に述べた通りである。

然れども張道陵は此の時に至つて、特に老子を利用して一の教主となしたる動機は、桓帝九年に帝は既に方士の勸誘に依りて、親ら老子を祀られたるを以て、道陵の如き胸に一物あるものは、決して之れを見逃すべき筈はなく、直ちに之れを利用するの擧に出で、人民の最も苦痛とする病氣に對して、此れに符水を施し、又天、地、水の三者に祈りて其の病癒えたる時は、自己の道術なりとし、若し癒えざる時は其の信仰未熟の爲めと稱して、其の責に任ぜざる所は、極めて老獪なるものがあるが、彼の孫魯の如きは、初め劉焉の部下となりしに、後獨立して關中に割據すること三十年に及び、終に其の末流は黃巾の賊となつたのを見れば、彼も亦要するに匹夫天下を争ふの具として道教及び老子を利用したのではないかとも思はれる。

何となれば漢の高祖の天下を争ふにも、後漢の光武か漢室を再造するにも、或は天道説に依る豫言とか、又は其の他の神異に假託して、巧に人心を鼓動したる後、手に唾して事を爲したる歴史は彼等の能く知る所である。殊に王莽に篡奪せられたる西漢は、光武に依りて再造せられたるも、其の東漢も既に十餘世を経て、天下將に亂れんとして、黨錮の獄は連年に亘る秋なれば、何人も臂を振つて天下を争はんと欲する時代なれば、先づ其の人心を得るが爲めには、長生の道より進んで符水を用ひて、疾を治することゝ爲し、夫れを主として物質上の力を蓄へんと欲して案出したるものが、即ち五斗米道の依つて起りたる所以ではないとも思はれる。

然るに彼の描きたる壯圖は、何等の酬わらるゝ所無くして止みたるも、其の主力を古代よりの一

一般民衆の間に培かはれたる、形而下の方面に置きたる結果、天下を争ふて得ざりしとするも、道教と云ふ一種の宗教は建設せられて、後世に至るまで儒、佛、道、の三教は鼎立して、支那民族があらん限りは、其の存立を保つことゝなつたのは、形而上の方面では得る所なかりしも、形而下の方面では蓋し豫期以上の成功を贏ち得たるものである。若しそれ爾後に於ける道教の發達如何は、別章に於て之れを述べることゝし、茲には惟だ道教建設時代の概況を略述するに止めて置く。

第七章 佛教の渡來と其の普及

第一節 佛教渡來以前の西域の交通

1 佛教東漸に就いて

一般の支那歴史に現はれたる、佛教渡來の年月に關しては、後漢の明帝永平十年、即ち神武紀元七二七年（西曆七〇年）となつて居るが、此れより先き支那の文献には、佛教に關する種々の記録があつて、朱士行の經錄には秦の始皇の時代に、沙門室利防等十八人が、佛經を齎らして、來化したるも、始皇は其の異俗なるを以て、之れを捕へたと云ふ記事もあり。又漢武朝事には、前漢武帝の元狩年中に、匈奴を伐つて金人を得たるを以て、帝は香華禮拜して之れを甘泉宮に祀つたとか。又劉向列仙傳の序には、劉向は書を天録閣に校して、往々佛經のあるを見たとか。又魏略西戎傳には前漢哀帝の元壽元年に、博士景憲は月支國に使用して、浮圖の經を口授したと云ふが如き記事は、殆んど枚擧に違あらざれば、尠くとも漢以前に於て佛教は、既に支那に渡來して居つたものと思は

佛教の渡來と其の普及

れる。
 故に後漢の明帝永平年間より、初めて佛教が支那に傳來したと云ふ説は、想ふに佛教が漢の帝室に輸入せられたことを指すものと見るべきである。勿論此れを動機として、民間に行はれつゝありし佛教が、更に社會的に隆盛を極むることゝなつたのは當然である。
 故に予は先づ佛教渡來以前の支那と、西域との交通狀況を一瞥して、明帝以前に於て佛教は既に民間に傳へられしものたることを想察せんとするものである。試みに漢書に現はれたる、西域と漢との交通を一瞥すれば。

孝武帝の時に、始めて西域と通じたるものが三十六國なりしが、其の後稍分れて五十餘國となり。皆匈奴の西、烏孫の南にあり。南北に大山あり。中央に河あり。河の東西は六千餘里、南北は千餘里、東は則ち漢に接して、玉門、陽關を扼し、西は則ち限るに葱嶺を以てし。其の南山は東金城に出で、漢の南山に屬す。其の河に兩原あり。一は葱嶺山に出で、一は于闐に出づ。于闐は南山の下にあり。其の河北流して葱嶺河と合し、軍蒲昌海に注ぐ、蒲昌海は一に鹽澤と名づく玉門、陽關を去ること三餘里、廣袤三百餘里。其の水亭屈して冬夏増減せず。皆以て地下に潛行して南積石に出で、中國河と爲ると云ふ。玉門陽關より西域に出づるに兩道あり。鄯善より南山の北、波河に傍ふて西行して、莎車に至るを南道と云ふ。西葱嶺を越ゆれば、則ちソ月氏、安息に出で、車師前王庭より北山、波河に隨ふて西行すれば、疏勒に至るを北道と爲す。北道より西葱嶺を踰ゆれば、則ち宛、康居、奄蔡に出づ。云々

と云へるを見れば、武帝の世には既に西域に對して三十餘國と通じて居る上に、崔去病が金人(銅像)を得て歸る前年には、張騫を月支國に遣はして、匈奴を夾撃せんと策したこともある。故に此使者等は、既に佛あることを知りて歸りたることは明かである。されば佛教の東漸は、漢武の世に西域との交通が頻りに頻繁となつた頃から、既に之れを萌されたるものと見るのは、蓋し公平な觀察であると思はれる。

口 佛教傳來當時の狀況

佛教の傳來に就いても、又後漢の明帝七年説と十年説の二者があるも、吾人は何れが正確なるやを知らざるも、佛教の輸入せらるゝ動機は、永平三年明帝が金色の光り輝く大神が、殿前に飛降したと云ふ夢を見て、之れを群臣に問ひたれば、通人(通譯者)傳毅は、奏して天竺の佛であると云ふたので、帝は中郎蔡、秦經、博士王遵等十八人を遣はし、西域に至つて佛教を求めしめられた

佛教の渡來と其の普及

依つて蔡暗等は月支國に到つて、迦葉摩騰、竺法蘭等二僧を迎へ洛陽に歸りたるは、即ち永平七年又は十年と云はれて居る。

然らば此の帝の夢に入りたる大神云々と傳毅が奏して天竺の佛なりとなし、帝も亦直ちに之れを信じて、前記の十八人を西域に遣はされたと云ふことは、既に佛敎に對する或る程度の理解と常識のあつたことは明瞭である。蔡暗等と共に佛像、經卷を齎らし來れる摩騰等は、大いに明帝の歡迎する所となり、西雍門外に精舎を建て、之れに居せしめ、名づけて白馬寺と云ふた。是が即ち支那に於ける最古の佛敎寺院にして、之れを白馬寺と名けたのは、白馬が佛經を馱し來たれるを記念する爲めである。其の後洛陽に來れる彼等二僧は、如何なる行動を爲したるか云ふに、此の時多數の道士は、帝が西域人たる二僧を歡迎して、寺院を建立せられたと云ふので、大いに彼等の嫉妬を買ひ、終に道士と其の法術を闘はすこととなつた。

ハ 二僧の闘法と譯經

此れは即ち摩騰竺法蘭の二僧が、洛陽に到着して三年を経過したる永平十四年正月一日、五嶽及十八山の道士等が上奏して、佛敎僧侶と法を闘はし、且つ議論せんことを請ふたので、明帝は尙

書令宗庠を遣はし、佛、道の兩派をして、法を白馬寺に闘はしめられた。之れに参加したる道士は南嶽の褚善信、華嶽、劉正念、恒嶽の桓文度、岱嶽の焦得心、嵩嶽の呂惠通等を始め、六百九十名の道士にして、彼等は三壇を寺内南門外に築き、西壇には符籙の書を安置し、中壇には黄老等の書を安置し。東壇には祭器食物を列ねて諸神を祈禱した。之れに對し佛僧側では、道路の西側に佛舍利、經像を安置したるのみなりしが、道衆は壇上火を放つて、其の聖典が火に焚けざることを示さんとしたるに、豈に計らんや、悉く灰燼に歸したるは、佛敎の側では舍利が五色の光を放ち、空中に飛舞して種々の不思議を示し、迦葉摩騰も亦高く空中に飛んで、諸種の神變を示したれば、見るもの皆服し、呂惠通以下六百二十餘の道士及び内宮の婦人二百三十人は、一時に皆出家せしを以て朝廷は特に七個の僧寺を城外に、三尼寺を城内に建立せられ。南嶽の道士費叔才は憤死したとは漢の法本内傳に現はれて居る記事なるも、吾人は固より其の眞偽を明確にすることは出来ない。されど之れは少くとも新來の佛敎と道教との衝突を物語るだけは事實である。其の後摩騰、竺法蘭の二人は四十二章經、佛本行經、十地斷結經、二百六十戒合異、佛本章經等を翻譯したるも現在では四十二章經の外は、皆散佚して之れを見ることは出来ない。四十二章經は漢譯最古の佛經なれば、其の體裁は全く老子の道德經の如く、極めて簡單なるものを一節、一節に切りたる斷

佛敎の渡來と其の普及

片的のものであつて、後世に於けるが如き長文のものは、其の趣を異にして居る。而して此の經が譯成せらるゝや、朝廷は之れを書庫の石室中に韜藏せられたとも云ひ、又蘭臺の石室中に藏せられたと云ふ説もあるも、何れが真なるやを知らないが、要するに朝廷の書庫の中に藏せられたと云ふことは、疑ひの無いものと思はれる。

二月支國の沙門、支讖の來朝

其の後暫くは殆んど何等の記録を存せざるも、桓帝の建和元年に至りて、月支國の沙門支讖なるもの洛陽に來りて『般舟三昧經』及び『阿闍佛經』等二十一部を翻譯し。又此れに次いで、其の翌二年には安息國の僧安世高なるものが、洛陽に來つて譯經に従事して、三十九部の佛經を翻譯したる中に、初めて大乘經の翻譯を見ることとなつた。故に明帝以來八十年を経て、支那の佛敎は初めて小乘以外に、大乘經典を見ることとなつたのである。

然らば此の八十年間に於ける佛敎に對する一般の態度は如何なるものであつたかと云ふに、其の説の眞偽は兎に角として、法本内傳に依れば、六百二十人の道士中より出家したる男子と、内宮の婦人の出家したるもの二百三十人を安置する爲め、七僧寺と三尼寺とが建立せられたと云ふ以外に

は、殆んど之れと云ふ事蹟を傳へて居らぬのを見れば、摩騰、竺法蘭の爲めに、白馬寺を建立せられたのは、要するに始めて西域人が支那に來たと云ふので、之れを優待するの意味に於ける、寺院の建設であつて、民間は別として朝廷に於ては、明帝以外には、桓帝が始めて黄金の佛像を禁中に鑄造し、之れを親祭せられた。以外には、何等佛の形蹟がない。其の後靈帝の光和三年に至りて、西天竺の沙門竺佛朔が長安に來りて『道行般若經』を翻譯した。然るに獻帝の初平二年に至りて、蒼梧の儒士麻牟子と云ふ者、世亂を厭ふて仕官の志なく、銳意佛敎を修めたる爲め。世人は之れを誹りたれば、牟子は『理惑論』を製して、其の譏りを解いた。之れが儒者の佛敎に歸依したる最初の記録である。

ホ 民間の信佛の嚆矢

興平二年には下邳の相、竺融なるもの、佛を祀る爲めに祠堂を造り、人をして佛經を讀誦せしめ會する者五千餘人に至つた。此れが支那に於て民間に佛祠を建て、佛事を行ふたと云ふ最初の記録である。されど此の時代には、既に支婁迦讖、支曜等の翻譯家が續々として輩出し、佛敎も亦漸く盛大となり。漢末に至つては既に翻譯せられたる經典の數は、實に三百餘部の多數に上つたのであ

佛敎の渡來と其の普及

る。故に一面には、道教も亦佛教の刺戟を受けて、日一日と長足の進展を示し、又支那固有の文化では、許慎が現はれて説文と稱する文字學を大成し、又司馬遷は史記を、班固は漢書を著はして、史學の大系を垂れ、支那自體の面目を一新したる。されど之れは別に説明することゝした。

以上は後漢の明帝永平十年より、獻帝二十五年に至る（西紀六十七年より二百二十年に至る）一百五十三年間に亘る、支那に於ける佛教初期の歴史である。其の後の支那は魏、蜀、吳の三國の幕となり、一時佛教の流通は杜絶せらるゝかの如き狀を呈したるも、魏は洛陽に都したるを以て、後漢の餘緒を受けて之れを尊奉じ、吳は長江に跨りたるを以て、遂に佛教の弘通を見ることゝなりしも、獨り蜀の地方のみは、其の交通が不便なりし爲め、其の教化に浴することを得なかつた。

第二節 三國兩晉時代の佛教

1 孫權の信佛

吳の孫權は、建康に都した。時に康居國の沙門僧會なる者遊化を以て任となし。建康に到つて精勤道を行ひたりしが、偶々佛舍利を感得して、之れを孫權に示したれば、孫權は大いに嗟歎し、之

れが爲めに寺塔を建て、會をして之れに居らしめ、名付けて建初寺と云ふた。之れが即ち江南に於ける佛教寺院建設の初めにして、江南の佛教は之れより盛大となり。爾來二千年に近き星霜を経過したる今日に至るも、尙ほ支那に於ける佛教は江蘇、浙江を以て其の中心地とするの觀を呈して居る。

而して此の僧會が佛舍利を感得したる事情と、孫權が其の佛舍利を試むに鐵槌を以てし、又之れを水に投じたる等の事蹟は、支那の佛教史上では有名なる事件なるも、予は之れを略して、直ちに魏と佛教との關係を述べんとするものなるも、印度に於ける阿輸迦王の信佛も、孫權の信佛も、乃至は我國に於ける蘇我氏の信佛も、皆佛舍利の神變不可思議なる靈驗を説く點に於て、殆んど其符節を合するが如きものあるは、佛教發達史の上より見て、極めて注目すべき事件であることを、一言して置く次第である。

口 魏の文帝と佛教

思想・宗教

魏の文帝は曹操の子にして、後漢の獻帝二十五年に即位し、國を魏と稱し、黃初と改元した。後論して文帝と云ふ。帝の黃初五年に、月支國の優婆塞（五戒を受けたる佛教信者）支謙と云ふ者洛

佛教の渡來と其の普及

陽に來り、業を支良に受けたるが、良は又業を支謙に受けたので、世人は之れを稱して天下の博士は、三支に優るものなしと云ふた。然るに幾何もなくして、支謙は洛陽を去つて吳に入り、佛經百二十九部と云ふ多數の翻譯を完成した。

文帝の弟陳主曹植は、佛敎を讀む毎に即ち嗟賞感歎し、嘗て魚山に遊び空中に天樂の響を聞きたれば、其の聲節を寫して梵唄を作つた。其の梵唄は今尚ほ魚山流と云はれて、其の遺流を存して居る。又魏の齊王の嘉平二年には、西天竺の曇摩迦羅三藏洛陽に來りて、授戒の法を制した。之れは佛敎傳來以後百八十餘年にして、戒律が始めて傳へられた起源である。四年には天竺の沙門康僧鎧洛陽に來つて『無量壽經』を翻譯した。

魏の高貴郷公の甘露五年には、誰川の朱士行が始めて『道行般若經』を講述した。是れは支那に於ける、佛經講述の第一期であつた。然るに、士行は常に翻譯の未周を嘆じ、長安を發して于闐に到り、放光般若經を得て歸つた。之れに反して吳主孫皓は佛を信ぜず、命を下して孫權の建立せる佛寺を毀たしめ、又佛像に溺して病を得たので大いに悔悟し。會に従つて五戒を受け寺院を建立した。以上は三國時代に佛敎の行はれたる地方と、譯經の行はれたる状態であるが、朱士行が西城の于闐に原本を求めたと云ふことは、支那人が西域求法たる嚆矢である。

ハ 兩晋時代の佛敎

西晋の武帝泰始二年、侍中荀勗は洛陽に金の佛像十二體を造つた。十六年後には東晋の司馬炎が吳を亡ぼして天下を統一した。其の翌二年には西竺の僧婁至が廣州に來りて『十二遊經』を譯した。是れは海路より佛敎の渡來したる始めである。七年には月支國の沙門竺法護が長安に來つて『正法華經』等二百十部を翻譯した。又惠帝の永寧元年には西竺の沙門竺叔蘭、白法祖、支法度、法立、法炬等が長安に來つて、其に百六十五部の佛經を翻譯した。

以上は三國より西東二晋に至る數十年間の譯經成跡であるが、之れより中原は又亂れて麻の如く遂に五胡、十六國の大亂となつて、之れが統一を見るまでには、三百餘年歲月を経て、唐の世に至り、始めて統一を見たるも、佛敎は斯かる五胡、十六國の大亂に際しても、殆んど何等の影響を受けずして發達し。六朝に至つては驚く可き發達を示し。天臺、華嚴等は支那の佛敎として組織的の哲學體系を備へ、翻譯の如きは寧ろ統一せる時代よりも、分裂時代の方が、好成績を示すと云ふ異例を見た。しかし、是は獨り佛敎のみに非ずして、文學でも、思想でも、亂世を背景として産出せらるゝのが、支那民族の特徴なれば、佛敎も亦この徑路を辿つたに過ぎないのである。

佛敎の渡來と其の普及

二 牟子の理惑論

佛教が後漢の世、初めて支那に傳來してより後道士と衝突したる以後は、數十年を経過して猷帝の世に至るまで、殆んど何等の事跡を示さず。只牟子の『理惑論』のみが儒者と佛者との見解を見るべき、思想的の資料であるから、予は茲に溯つて理惑論の概略を説明することとした。同論は三十七ヶ條の問答より成り。其の内容は儒、佛、道の三教は、一致して居ると云ふことを主張して左の如く論じて居る。

夫れ見博き時は、即ち迷はず。聰聰なる時は、即ち惑はず。堯、舜、周公は、世事を修むるものなるも、佛と老子とは無爲を志すものである。

又、吾れ未だ佛教を解せざる時は、惑ふこと子よりも甚だしくして、五經を誦すと雖も、花と爲して未だ實となさざりしが、既に佛教の説を觀、老子の要を覺えて、枯淡の性を守り、無爲の行を觀じて、還つて事を見れば、尙ほ天井を望み、溪谷を窺ひしものが、嵩岱(大山の名)に上つて、丘地を見るが如く、五經は即ち五味、佛道は即ち五穀となつた。故に吾れは道を聞いてよりこの方、雲を開いて白日を見、炬火を手にして冥室に入るが如く爲つた。

と云ふが如き態度を以て、儒、佛、道の三者に對して、些の偏僻の見なく、極めて公平の見地を執つた。しかし道家の神仙、虚誕の説に對しては、其の態度を異にして、左の如く論じて居る。

辟穀の法は、數百千の術を以て、之れを行ふも效なければ、之れを徵無しと爲す。吾れ師に従ふて學ぶ所の人を見るに、或は自ら七百、五百、三百歳と稱するも、然かも其の學に従ふてより未だ三歳ならざるに、各自殞没して居る。

又人の『道を爲すものは、能く疾を却けて病まざれば、針藥を御せざるも癒ゆると云ふ者あるも之れあり得ることか』との間に答へて、

聖人も皆疾あつて、未だ疾なきものを見ず。神農も草を嘗めて、死せんとすること數十回に及び、黄帝は稽首して、針を岐伯に受けた。此の二聖は、豈に今の道士に如かざらんや。

又『道士は、堯、舜、周、孔の七十二の弟子は、皆死せずして仙となつたと云ふに對し佛家は皆將に死して能く免るゝもの無しと云ふが、是れは如何なるものなるかと』云ふ間に答へて、之れ妖妄の言を以てするものにして、聖人の語る所に非ざるなり。と云ひ又讀書に對しては、既に經傳諸子を修め、書は大小となく、之れを好まざるは無く、兵法は樂しまずと雖も、しかも尙ほ之れを讀み、神仙不死の書は讀むと雖も、抑へて信ぜず、以て虚談となす。

佛教の渡來と其の普及

と云ふて居るのを見ると、當時の道教は、其の建設の初期にして、只神仙不死の説を以て、愚者の間に行はれたるも、識者の間には行はれなかつたことが明かである。

第三節 東晉時代の佛教

1 佛圖澄の來朝

永嘉四年には、西天竺の沙門佛圖澄なる神僧が洛陽に來た。此の時後趙の石勒は洛陽に依つて多くの沙門を害したる時なりしも、澄に神異ありしを以て、石勒は之れを敬すること神の如く、石勒の死後其の弟季龍が立つに及んで、心を傾けて澄に仕へ。衣するに錦繡を以てし、輦は彫輦を以てし、朝會引見の時には、太子、諸侯が之れを扶翼をして、進むと云ふが如き優待を爲した。澄も亦化度を事として、弟子數千萬人に至り、國人は其の所在の方に向つて濫りに唾棄せず、常に相戒めて曰く「惡心を起す事勿れ。惡事を爲すこと勿れ。大和尚は常に汝の爲すことを知る」と、云ふに至りたるは、其の化の大なるを知るに足るものである。

同六年武邑の太守魯歆は、沙門道安を郡上に請ふて經を講ぜしめしに、闔城の人士來聽して其の

城角を崩す如き勢であつた。が、此の道安は佛圖澄の弟子にして、成業の後は檀溪寺に住せしが常陽の高士習鑿齒は書を以て好みを通じ。安の所に至つて自ら稱して「四海の習鑿齒」と云ひたれば、安は聲に應じて「彌天釋の道安」と答へたと云ふが如きは、六朝に於ける清談の風を開く讀書界の傾向を示すものである。

其の後東晉元帝の太興元年には、沙門竺潛に詔して、經を内殿に講ぜしめ。尊ぶに方外の大徳を以てし、着履昇殿を許し。又永昌元年には、西竺の沙門吉友が建康(今の南京)に來りて、丞相王道等に重んぜられ。時の名公は遂に皆其の門に至つて友となり。又明帝太寧元年には、帝は自ら丹青を御して、釋迦佛を禁内の樂賢殿に描き、興皇寺に幸して義學の僧百人を集めて共に佛道を論じ。又成帝の咸和五年には、會稽寶山の沙門法義に詔して、禁中に入つて五戒を傳授した。咸康元年には沙門支道林が、法道法華經を譯し。二年には尙書李邕は宅を捨て、靈曜寺と爲し。同六年には右軍王羲之が、西天竺達摩陀羅の爲めに、廬山に歸宗寺を建てた。此の時代の名流は競ふて佛者と交り結びたる中には、謝安、何充等もあつた。

慶帝の太和三年には、洛陽東の尼僧道馨は法華、維摩を講じたるが、聽衆市の如くなりしと云ふを見れば、此の時の佛教は文學の上にも、思想の上にも、最早民衆的のものとなつたことが判かる

佛教の渡來と其の普及

武帝の大元九年竺潛の示寂したる際には、特に詔して其の徳を頌し、又緡錢十萬を賜ふて其の塔を助建せられた。之れは沙門を勅葬するの始めであつた。

口 慧遠法師の道化

沙門慧遠は、姚秦の亂を避け晋に歸りたるも、關中の擾亂するに及びて其の徒を散じ、廬山に至りしは、武帝の太元九年であつた。時の九江刺史桓伊は、東林寺を建つて之れに居らしめした。遠は『法性論』を顯はして、涅槃常住の説を述べたるに、後に羅什三藏が來朝するに及んで、遠が未だ涅槃經の全文を見ずして、其の説を唱へたるを嘆服した。此の時代は晋室の微弱なりし爲め、天下の奇才は多く隠れて仕へず、劉遺民、雷次宗、陶淵明、謝靈運等一代の名賢十八人が過從した。後遠は百二十三人の道俗と、白蓮社を結んで、念佛を専修した。此の念佛門は、支那に於ける淨土門の濫觴となつたのである。

ハ 佛教各宗の林立

これより後安帝の隆安二年には、長安の沙門法顯が天竺に入つて經を求め、後海路より歸朝した。

又時の輔政桓玄は、帝に勸めて僧尼を淘汰せんとせしが、慧遠の力辯に依りて沙汰止みとなつた。柘跋氏は北魏の太宗として、即位するや天興と改元し。詔して佛法を興隆し、佛家寺院を修造せし爲め、柘跋氏の領土内では翕然として佛教が起つた。六年には、龜茲國の沙門鳩摩羅什洛陽に來り、姚秦の主姚興の國賓として遇せられ。沙門八百餘人を集めて、共に經論を譯すること三百餘卷に達した。其の門下には道生、僧肇、道融、僧叡、道恒、僧影、惠觀、惠慶等あり。此の中の生、肇、融、叡の四人は、關中の四聖と稱せられた。

抑も此の羅什の東來は、支那佛教東漸以來初めて、大乘佛教を齎らしたるを以て、支那佛教界の一大變化を來さしめ、後世に於ける大乘佛教の根柢は、實に此の時に始まつたのである。而して羅什が弘通したる學派は、印度の龍樹に依つて唱へられたる空宗であつた。此の空宗は後世の三論宗である。三論宗とは、中觀論と、十二門論と、百論の三者を以て其の根本とするから、之れを三論宗と唱へられたのである。此の三論は皆羅什の翻譯に係るものである。而して其の門下の八傑は、皆此の學を傳へたる中にも、道生の學徒は次第相承して、唐の吉藏即ち嘉祥大師に至つて最も隆盛を極め、吉藏より高麗の慧灌に傳へられ、慧灌が之れを我國に傳へたものたれば、奈良朝の初期に於ては、三論の華は早くも奈良の都に開いたのである。之の三論は、八不の中道の理を述ぶるもの

佛教の渡來と其の普及

大支那大系

であつて、一切の事理は、不生、不滅、不去、不來、不一、不異、不斷、不常の八不であつて、此の八不は即ち中道の實相であると云ふのである。羅什は、又三論を傳へたる外に、成實宗をも傳へたるが、此れは羅什の譯した成實論は、弟子僧叡に命じて之れを講ぜしめたのが、終に一宗として發達したものである。其の後種々の哲匠輩出して之れを弘通し。梁より唐に至つて最も盛を極めたるが、中唐以後は遂に其の學は絶えたるも、日本には三論と共に輸入せられ。今日は僅かに若干の書籍を残すのみにて此れを専修するの學徒は無くなつた。

二 法顯の歸國と諸三藏の來化

法顯は安帝の隆安二年に出發したる求法僧であるが、元興六年海路より歸朝し、其の遊歴せる西天竺三十餘國の狀況を記したる『南海寄歸傳』は、極めて古き旅行記として有名である。此れは支那の僧侶が、始めて中度に至りたる求法者である。而して此の法顯は齋らしたる經典を多數に翻譯した人である。九年又印度の佛駄跋陀羅が廬山に來りて、慧遠法師の蓮社に入り禪經を譯した。此れが禪法の一端が支那に傳へられた嚆矢である。其の後佛駄跋陀羅は、又華嚴經六十卷を翻譯した。

思想・宗教

宋の少帝の景平元年、曇無讖三藏は、北凉に於て涅槃經を翻譯した。此れは北凉の高祖元始十年であつた。涅槃經には南北の二傳があつて、南傳は二十六卷、北傳は四十卷なるが、曇無讖の譯は北本である。が譯成ると共に涅槃經と稱へる一派が開かれ、曇無讖は其の開祖となつて『佛性は常住するものである。故に一切の衆生は、悉く佛性を有す』のであると云ふを以て主旨として居る。此の宗は後世天臺宗の勃興すると共に、遂に天臺宗に屬することゝなつた。文帝の元嘉元年迦濕密羅國の三藏曇摩密多是建康に來つて、觀普賢經等十部を譯し、又量耶舍は觀無量壽經を譯し、同四年智嚴は瓔珞本經等十四部を譯した。時に僧慧琳は才學を以て文帝に幸せられ。顔延之と共に朝政に參與したれば、時人は黒衣の宰相と稱した。僧侶の參政は琳に初まつたのである。同じく七年、帝は迦濕密羅の國三藏求那跋摩の名を聞き、沙門道敏を遣し海を航して之れを迎へしめたるに、跋摩は欣然として廣州に到つた。帝は又使を遣はして、之れを金陵に迎へて、祇洹寺に居せしめた。僕射何尚之等之れに師事した。帝は嘗つて跋摩に、朕は齋戒不殺を以て天下を御せんと欲するも、未だ之れを爲す事を得ず」と問はれたるに、跋摩は之れに答へて『帝王の修むる所は匹夫と異なる。匹夫は身賤にして名微なれば、言令威なきを以て、若し克己苦節するに非ずんば、何の用をも爲さざるが、帝王は四海を以て家となし、兆民を子と爲すものなれば、一た

佛教の渡來と其の普及

大支那系

び嘉言を出せば、即ち四民咸く悦び。一たび善政を布けば、即ち神人を以て和し。刑は天命せず、役は力を券せざれば、風雨は時に應じ、百穀は繁茂す。此れを以て齋を持すとすものなれば、持齋も亦大である。此の不殺を以てすれば、不殺も亦大にして、寧ろ半日の餐に、一禽の命を全ふして、而して後弘濟と爲すものならんや」と云ひたれば、帝は机を撫し嘆じて曰く「俗は遠理に迷ひ僧は近教に滯るものなるに、法師の言の如きは、謂つべし人天の際を極むるものなり」とは、實に名問答であつたと云はねばならぬ。元嘉十一年求跋摩は南林寺に於て戒壇を建て、僧尼の爲めに授戒した。之れが支那に於ける最初の戒壇である。同十二年沙門慧珣は十誦律の疏を造つて、之れを講演した。之れが十誦律を講ずるの始まりである。

ホ 魏の太武と文成

同十五年魏の太武帝は、中原を平定して江北悉く臣服せしに、司徒崔皓は道士寇謙之と同じく法を信ぜず。常に帝の爲めに佛法は虚誕にして、世の害を爲すものなれば、宜しく之れを除くべしと上言したれば、帝は之れに動かされ。終に二十三年、即ち魏の太平眞君年（西紀四四〇年）に至りて、太武は詔して佛像經卷を破毀し、沙門は長幼と無く、悉く之れを坑殺した。然るに太子は佛を信じて、屢々諫めたるも聞かれざるを以て、其の詔書の降下を緩にして、遠近に之れを豫聞せしめたる爲め、沙門は多く逃匿して免ることを得たるも、唯だ塔廟の魏地に在るものは遺子なく廢毀せられた。之れが支那に於ける初期の排佛である。後世三武一宗の難と稱する、第一武の厄であつた。

同二十九年魏の文成帝（興安と改元す）即位して、大いに佛法を興した其の詔に曰く。

釋迦如來の功は大千を救ひ。惠は塵境に流れ、生死を尋ねるものは、其の達觀なるを嘆じ。文義を覽る者は、其の妙門を貴ぶ。故に前より以來、崇尚せざる者は無く。我が國家も亦常に尊事する所なり。朕は鴻緒を承けて、萬邦に君臨し。先志を思述して、以て斯道を隆かんにす。乃ち諸郡に制して、佛塔を建てしめ。佛法を好樂するものは、沙門となることを聽す。とあつたので、天下は風を臨んで頓に舊觀に復した。其の翌年五級の大塔を建て、太宗以下五帝の爲めに、釋迦像五軀を造り、高さ各一丈六尺にして、赤金五萬斤を用ひたと云ふ事である。又、光武帝は孝建元年文帝の忌日を以て、八齋戒を中興寺に設け、寺中にて晝食したるに、從臣袁敏孫は食後更に魚肉を進めたと云ふので、帝は怒つて其の官を免じた。又沙門道猷を内殿に召して説法せしめ、勅して新安寺の法主と爲した。太明六年四月八日には、内殿に於て佛を浴し僧に齊

佛教の渡來と其の普及

した。又沙門慧觀等は此の時代に於て、二十部の經を翻譯した。明帝の泰始元年には、沙門道猛に勅して綱領と爲し、毎月錢三萬を給し、又僧瑾に詔して、天下の僧主と爲した。神僧寶誌が現はれて、種々の奇蹟を示したも、此の時代であつた。

第四節 帝王の信仰

1 犠牲の禁止

佛教渡來以後の事蹟と、譯經進展の狀況とは既に之を略述した。されど年を経ると共に、帝王の信仰は益々盛んとなり、明帝三年には、永寧寺に三十餘丈の浮圖を建て、天下第一と稱せられ五年には、魏の昭玄は都統(僧官)曇曜の上奏に依つて、民間より平年は粟を僧曹(僧官)に入れを僧祇粟を名づけ、凶年には之れを出して、飢民を賑はすこととした。茲に於てか、僧祇粟は天下に普及せられた。同七年魏の獻文帝は、佛學を好み、常に僧を延ひて玄理を談し、世を棄つるの志ありしが、本年を以て位を太子に傳へ、崇光宮に居して、太上皇と稱し、僧數百と禪乘を修した。泰裕元年、上皇は詔して「今より後は、天地宗社を祀るに、牲牢を用ゆること勿れ」との命を

下したるに因り、此れ等の祭祀に當りて、牛羊等の犠牲を用ひざりし爲め、一年に七萬五千の性命を活し得た。之れは佛教主義に依る動物愛護の發露であつた。此の外に齊の武帝永寧年間には法獻法暢二僧の才學が、世に秀でたる爲め、帝は肩輿を賜ふて寵異し政治に參與せしめ、又寺院に幸して、佛教の講話を聴き、又僧侶と共に、佛教の教理を討論すると云ふ有様にして、帝王の學としては、殆んど佛教を以て其の主とするが如きものとなつた。故に梁の武帝の如きは、自ら願文を草して、群臣道俗二萬餘人を率ゐて、菩提心を發して、長く道教を棄ると云ふが如き時代となつた。

口 地論宗の創立

梁の天監六年には、帝自ら太品般若經を註し、僧法雲に命じて、百僚の爲めに之れを講ぜしめた。此の時代の高僧は、光宅寺の法雲、開善寺の智藏、莊嚴寺の僧旻の三人を、梁の三大法師と推稱せられた。其の翌七年(魏宣武帝永平七年)には、菩提流支及び勒那摩提の諸三藏に詔して、太極殿に於て十地論を譯せしめ、帝自ら之れを筆受し、四年を経て之れを完結した。此れが地論宗の根本經典となつたのである。

地論宗は、十地論に依つて宗を建てたる爲め、地論宗と名くるものである。之れは華嚴經の十地

佛教の渡來と其の普及

品を本とし、之れに堅慧、金剛軍、世親等の印度の高僧が、釋論を施したるものなるが、今茲に譯されたるものは、世親の十地論を譯したのである。故に此の論に依つて光統、慧順、道親の諸師は盛んに之れを講述し、其の後隋にありては、靈佑、慧藏、惠遠、智矩、唐にありては、道修、法侶、靈幹、辦相等の哲匠が、皆之れを鼓吹したるも、中唐の世に至りて、華嚴宗の勃興と共に之れに屬した。

魏の宣武帝は、深く佛教の意に通じ、諸僧及び群臣の爲めに、式乾殿に於いて維摩經を講ぜられた。此の時に西域より洛陽に來れる僧侶は、三千餘人に及び、州郡等の僧侶は、二百餘萬人に達し南方に於ける梁の武帝と相對して、佛教の興隆を示した時代であつた。

武帝の天監十年、帝は沙門を集めて、文を作り誓を立つて、永く酒肉を斷つた。其の翌十一年には、寶亮に勅して撰せしめたる、涅槃經疏に御製の序を附し、同十三年には神僧實誌の入寂に當り帝は詔して、之れを鍾山に葬り、車駕親臨した。又十五年には、魏の胡太后は、篤く佛法を信じ、永寧寺に高さ九十丈の塔を建てた。之れに懸けたる、鈴聲は靜夜十里に達したと云ふ事である。

ハ 達摩の渡來

天監十六年、武帝は又性牢を止めて、蔬菜を用ひることとし、天下の道觀に詔して、道觀を廢し道士を還俗せしめた。沙門慧超に詔して、壽光殿の學士と爲し、之れを禁中に留居せしめた。之れが内道場制の始りである。同十七年には、魏の孝文帝も亦天下諸郡に詔して、五十の塔を建てしめた。此の年律の弘通者僧佑は示寂した。佑は帝の尊信を受け、肩輿を賜ふて内殿に入り、六宮の爲めに授戒し。又出三藏記、釋迦譜、弘明集等の著述を爲したる高僧であつた。又同十八年會稽の沙門慧皎は、高僧傳を著した。故に從來譯經を專問とせる支那佛教界も、此の時代に到りて、經論の註釋、並に僧傳等が支那僧の手に依りて世に現るゝことゝなつた。

斯くの如く、南北の皇帝が競ふて經論の翻譯は勿論、寺塔の建立を爲し、又王侯宰相及び天下の名士は、悉く佛教を談ずると云ふが如き全盛時代に當り、梁の武帝は普通元年に圓壇を築き、沙門慧約に就いて具足戒を受け、太子以下の僧俗四萬八千人の受戒者があつた。其翌年宋雲等を西域に遣はし、佛經を求めしめた。斯る時代にありて、支那の佛經界に一大衝動を與へたるは、南天竺の菩提達摩が、大通元年を以て、海に浮んで廣州に來た。因つて帝は、使を遣はして之れを迎へ、朕は即位以來寺を造り、經を寫し、僧を度する等のこと擧げて數ふ可からず、其の功德は如何と問ひたるに。達摩は無功德と答へた。依つて更に帝は眞の功德如何と問へば達摩は「聖諦第一

佛教の渡來と其の普及

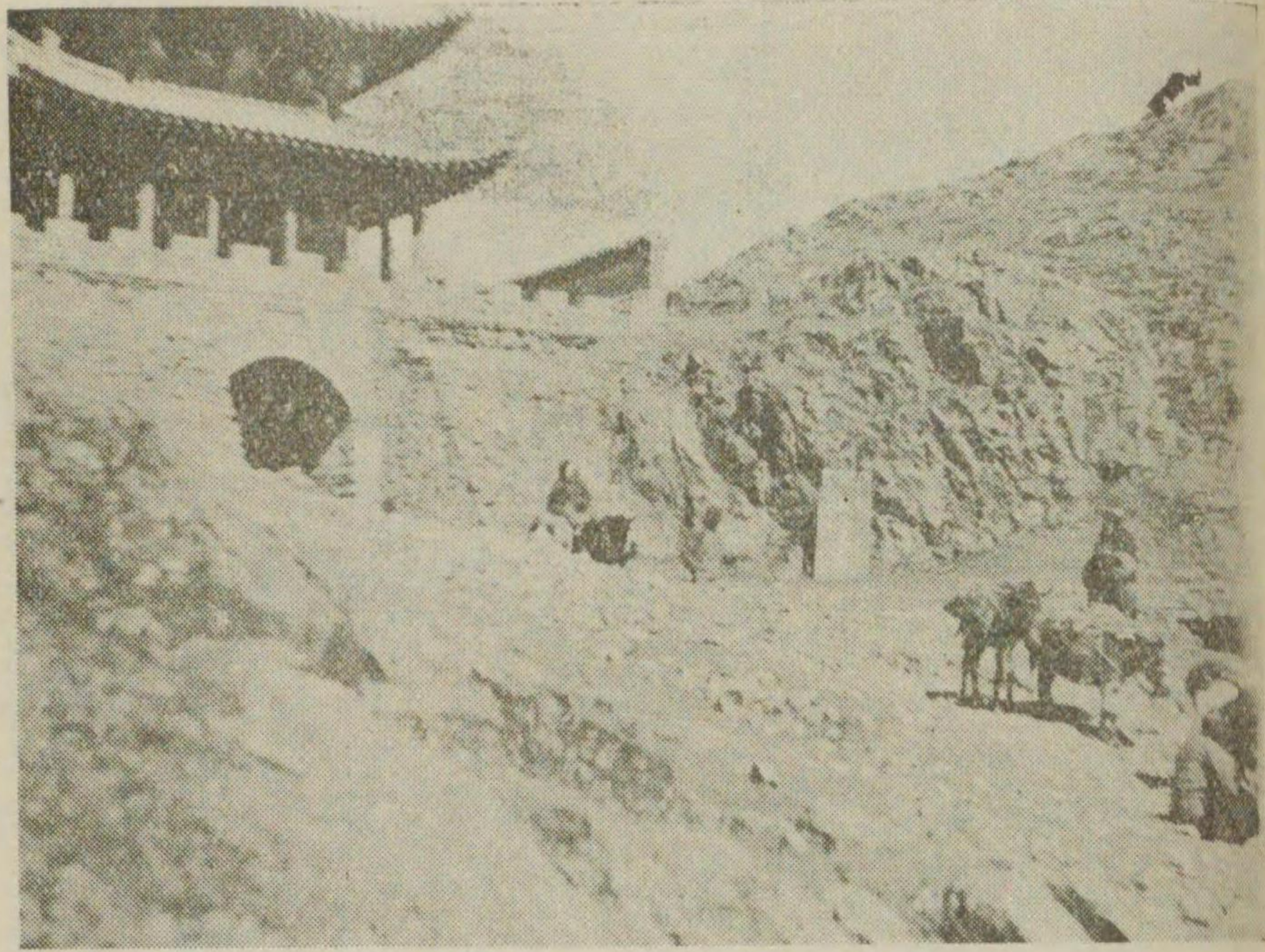
大支那大系

義』と答へた。然るに帝は其の言旨を解しなかつた。依つて達摩は、揚子江に渡つて魏に行き、嵩山の少林寺に留り、終日壁に面して坐禪した。魏の光明帝は之れを聞いて、三度召したるも到らず、後惠可を得て法を傳へ、大同元年（神武紀元一九五五年、西曆五三五年）に示寂した。之れが、即ち支那に於ける禪宗の第一祖である。

二 傅翁と曇鸞

武帝は、達摩の喝破せる第一義に透徹する能はず、同泰寺に幸して身を捨て、群臣は一億萬錢を以て帝を贖ふて宮に歸る。斯くの如くすること三度に及びたるが、太子も亦天性佛を好み、佛教の經論は皆之れを披覽し、又天下の才子を引いて之れと遊び倦むことなく、文雅の盛んなることは晋朝以來未だ其の比を見なかつた。然るに帝に先立つて大通三年に薨去した。之れが有名なる昭明太子である。同六年傅翁と云ふ居士が鐘山に至つて、庵を双樹の下に結び、自ら稱して『双林當來下生善惠大師』と稱した。此の傅翁は屢々奇蹟を現はし、武帝の尊敬を受けたが、嘗て始めて輪藏を造つた。此の輪藏とは一の柱を中心として、其周圍に廻轉式の書架を附け、其間に數本の横木を出し、手以て其の一木を押す時は、其の書架全部が廻轉するものなるが、此れを一廻轉すれば、大

思想・宗教



山西五台山第一門

佛教の渡來と其の普及

藏を一回讀みたと同様の功德があると云ふて、大藏を讀むこと能はざるものに佛縁を結ばしめんとするのである。

此の輪藏は後に我國にも傳へられ、今でも大寺院には之れを設けられて居るが、其の輪藏の傍には必ず傅翁を中心として二童子の像が安置せられて居る。此の二童子は、即ち翁の二子普建、普成である。而して其の傅翁の像は、儒履、道冠、佛袈袋と稱して、儒を足とし、道を頭とし、佛を體としたる、精神的の服装として居るのは、即ち翁の思想が三教一致論者であると云ふことを表徴したものである。

又大通八年（東魏、黃帝興和四年）には



山西五台山曇鸞の舊蹟

魏の高僧曇鸞が示寂した。此の曇鸞は、初め道教を信奉したが、長命するに非ずんば、道を成ずること難きを恐れ、江を渡つて陶隱居（宏景）に道術を受け、歸る途中に於て、菩提留支三藏に逢ひ、佛の長生の法は、却つて此の上の仙術に如かずと云ひたれば、留支は地に唾して曰く「此れ何の言ぞや、此方に（支那）何ぞ長生の法あらん。假令少しく長年を得るも、更に三有輪廻を離せず」とて、即ち授くるに觀經を以てして曰く「此れ大仙の法なり。之れに依つて修業すれば、將に生死を解脱するを得べし」と。依つて曇は此れを受けて、悉く仙經を焚き、専ら念佛を事とし魏主の重する所となり。號して神鸞と云ふた

寂するに及んで、之れを勅葬し、碑を建て「鸞神宇萬遠、機變無方」云々の語があつた。此の曇鸞の道は、其の後唐の善導に至つて大成せられ、遂に支那に於ける淨土門の隆盛を見るに至つた。

ホ 慧文と眞諦

北齋の慧文は後世に天臺宗を創立したる、智者大師の法祖父に當る人である。僧迦跋陀羅が、印度より佛像を齎して廣州に來り、又曇鸞が化を北魏に唱へ、武帝に盂蘭盆を設けて、佛事を行ふと云ふが如き時代に在つた。慧文は獨り河南に在つて、空、假、中の三諦の妙理を説いて、天下に獨歩せしむ、其の門下には南岳の慧思禪師等の大徳が現はれ、遂に其の法孫智者に至つて、天臺の教觀を隋朝に高調し、支那佛敎學としての一大系を組織した。故に此の時代の佛敎界の大勢は、一言にして之れを盡せば、最早印度の佛敎と云ふよりは、將に支那の佛敎として、特殊の研究と、體系とを産み出し、又は産み出さんとするの時期であつた。

教宗思想

然るに此の時に當つて、南方佛敎の第一外護者たる梁の武帝は、政治方面よりも、寧ろ佛敎に對する興味が深かりし爲め、庶政は之れを權臣侯景に一任したれば、景は帝を弑して取つて之れに代つた。茲に於てか、印度より來れる眞諦三藏は、亂を避けて印度に歸らんとしたるも、廣州の刺史

佛敎の渡來と其の普及

大支那大系

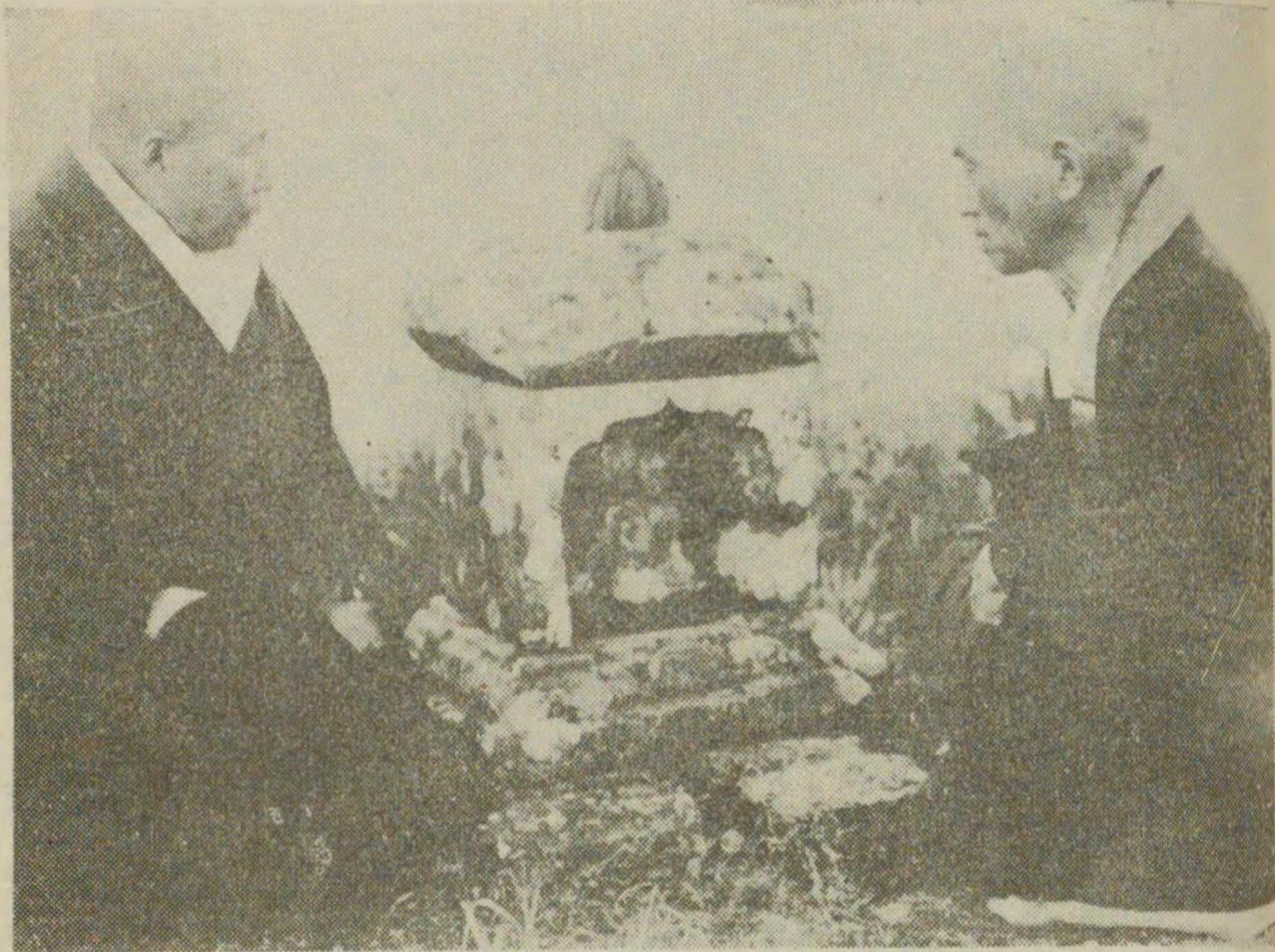
歐陽の請に依つて、遂に留つて五十餘部の經論を翻譯した。其の中には、起信論等の如き前代未聞の隨緣眞如説も現はれたる爲め、此の説は後世に至るも大乘佛教の各派は、皆此れを引用する事となつた。其の外三藏は、攝大乘論を譯して、法相宗の先驅者と爲り。又俱舍論を譯して、俱舍宗を開く基礎を築き、支那に於ける大小二乗の佛教は、此の時代に於て、初めて大體の資料を充實することゝなつた。

第五節 隋朝佛教の概観

1 天臺の智者

北齋の慧文は、遠く龍樹の旨を受けて、大智度論に依つて、一心三智を證し、變亡雙照の域に達し、更に中論を讀んで、亦空、亦假、非有、非空の中道を體得し、徒千餘人を集めて、専ら大乘を業とし。河南に獨歩せしに、偶々南岳の慧思は其學を繼承し。更に之れを擴大して、陳の世に至つて法を南岳に提唱し。隨自意安樂の行を修めて、法華を專攻し。徳一世に高くして、遂に後世に於ける天臺宗を開創せし智者を得て、其の法を授けた。天臺宗は、印度の龍樹を以て第一祖と爲し、

思想・宗教



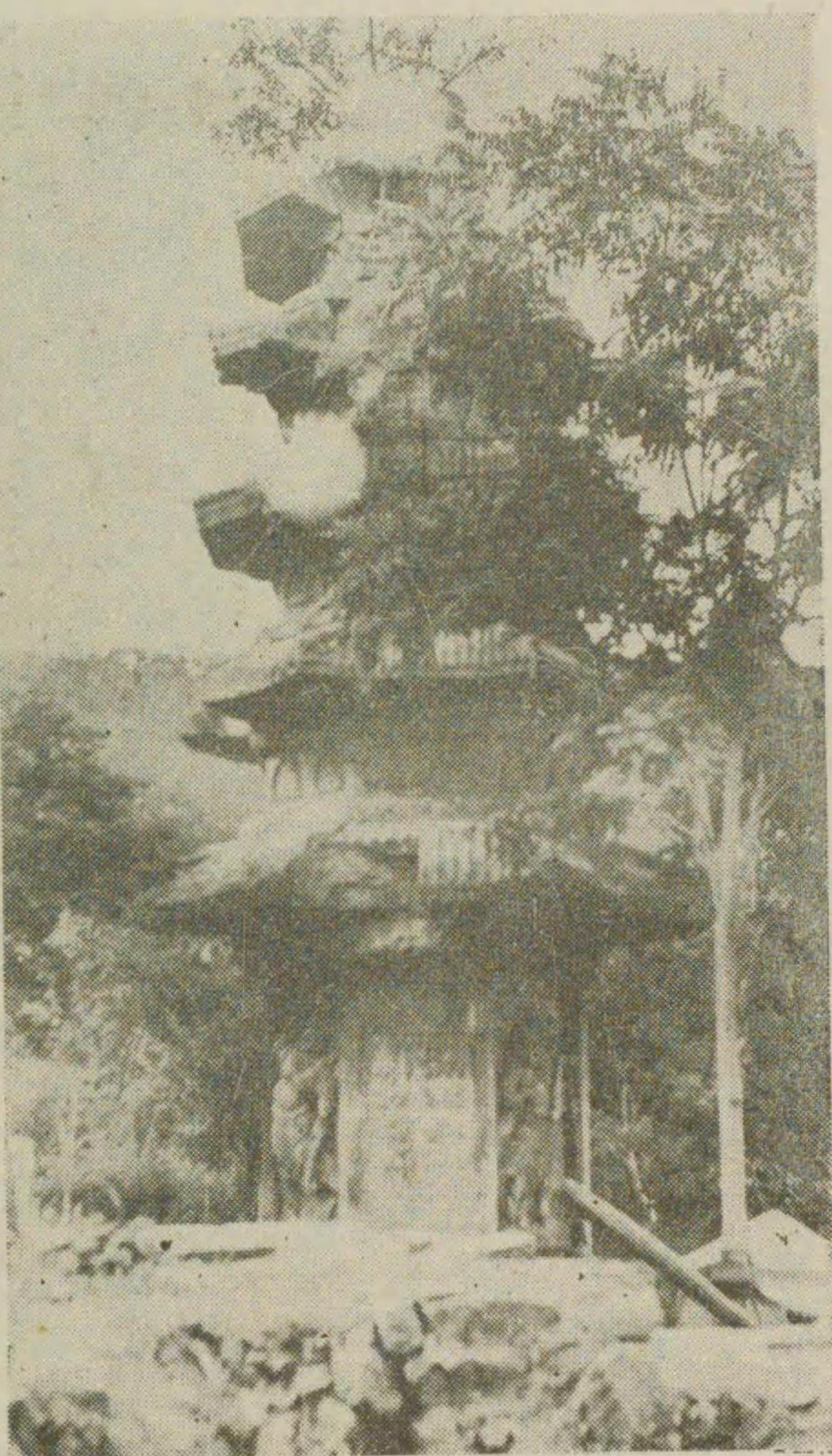
（長議會宗天台澤長左、主座台天谷梅右）墓の師大者智山台天江浙

佛教の渡來と其の普及

北齋の慧文を以て第二祖と爲し、南岳の慧思は其の第三祖である。其の著述には、四十二字門、淨行門、大乘止觀、隨自意安樂行、其他の著書がある。梁武天監十四年に生れ。陳の光大二年初めて南岳に登りたるは、五十四歳の時なりしが、宣帝の大建九年六月二十二日、壽六十三にして示寂した。此の慧思の門弟智顛は、從上列祖の法を大成して、遂に天臺宗を創立した。抑も此の智顛は、梁の武帝大同四年惠州に生れた人なるが、七歳にして、僧より晋門品を口授せらるゝこと一遍にして、誦を成したと云ふ神童なりしが、年十七にして亂を長沙に避け、佛前に於て僧となり。陳の文帝天嘉元年（年二十

大支那系

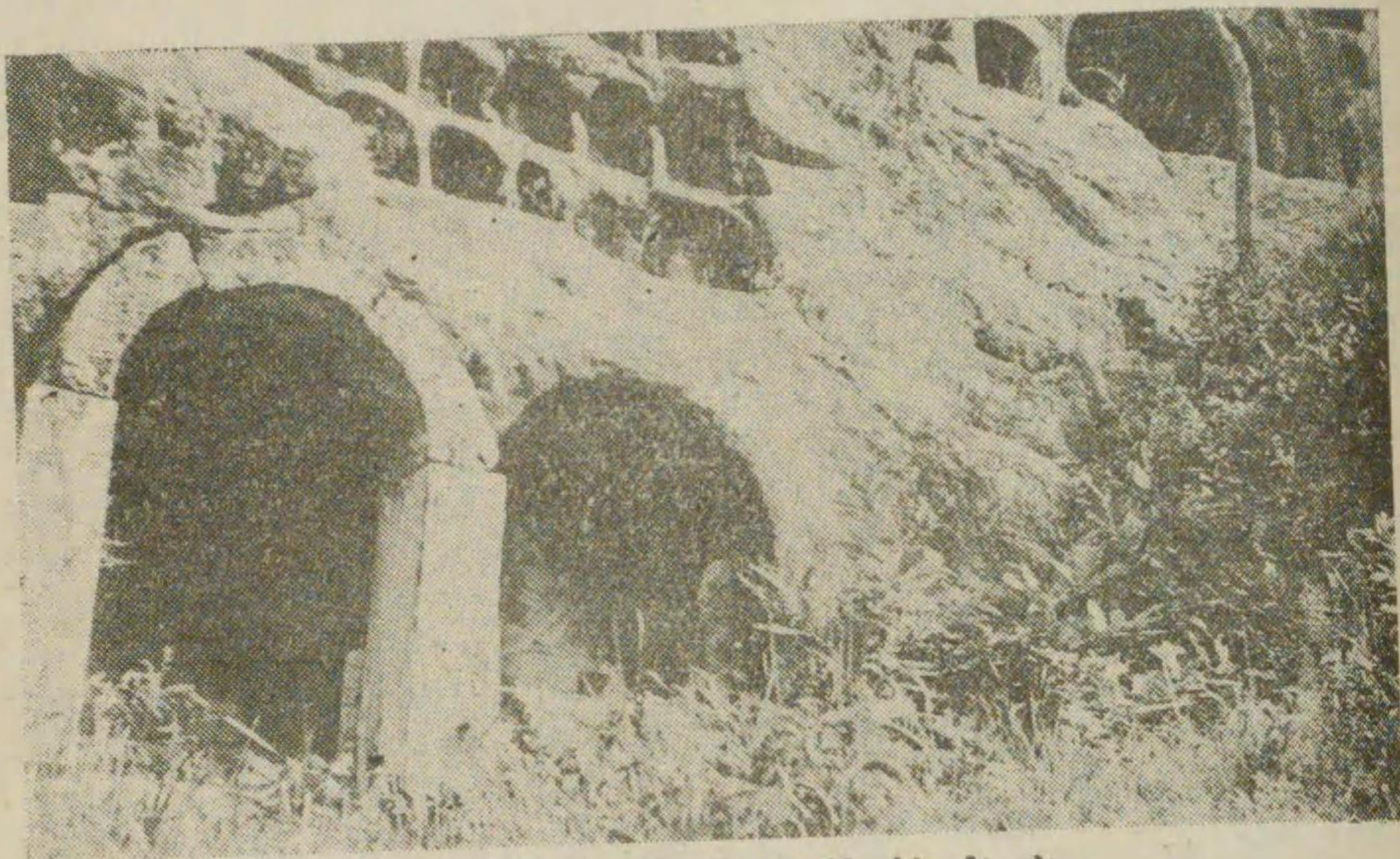
三三 慧思に謁して弟子となり。刻苦精勵、法華の旨を照了すること、高熙の幽谷に臨むが如く、諸法の相に達すること、長風の太虚に遊ぶが如き概を有したれば、師を辭して金陵に遊び、王侯の爲めに説法し、瓦官寺に留ること前後八歳に及びしも、大建七年秋九月、天臺山の優勝なることを聞き、宣師の慰留あるも聞かずして、遂に天臺山に登り、石橋に於て一老僧に遭ひたるに、老僧は曰く「禪師若し寺を建てんと欲せば、山下に皇太子の寺基あり、以て給を併げば、三



南京城外霞山隋朝建塔

國一となりて國清かるべし」との豫言を聞きたるに、果して即ち南朝の陳と、北朝の周と、齋の三國は、將に隋の文帝に統一せられ、智者は其の隋朝の優遇を受けたるは、支那佛教史上に名高き事實である。

思・想・宗・教



南京城外霞山千佛嶺

これより智者は、山に在つて寺を建て、修身の道場と爲した。此の宗を以て天臺と名くるは、即ち智者が天臺山に住したるを以て、其の山を天臺と名くるより山に依つて宗に名づけたものである。此の宗は法華を以て基と爲し。智度論を以て指歸と爲し。涅槃經を以て扶翼と爲し。大品經を以て觀法の則と爲し。一心三觀の妙理を立て、法華を釋するには「玄義」を以て教相を判じ「文句」を以て名義を解し、「止觀」を以て觀行を示すものなれば、此の玄義、文句、止觀の三大部は、天臺學者の缺くべからざるものである。されど智者以後の學人も、次第に其の宗意を筆受して、考究に資したれば、天臺一宗の典籍は、極めて多數に上つて居る。

佛教の渡來と其の普及

智者大師は、其の後果して天下を統一せる、隋の文帝の尊敬を承け、各所に寺を造ること三十六就中棲霞、靈巖、天臺、玉泉の四所は、天下の四絶として、特に有名である。故に其の化の盛んなりしことも想察せらるゝが、文帝の開皇十一年には、晋王楊弘（後の煬帝）が、揚州の總監と爲り使を遣はして師を迎へ、菩薩戒を受けたる時、太子晋王は「大師は佛の法統を傳ゆる者なれば、宜しく智者と稱すべし」とて、大師を呼ぶに智者を以てするに至つた。故に後世は智顛と云ふものなく、智者を以て呼ぶこととなつた。大師は隋主並に王臣の歸敬を受くること最も篤く、大建十七年十一月二十一日、遺書を手書して示寂した。時に六十歳であつた。其の傳法の門人は三十二人、自ら度したる僧は一萬四千人の多數に上り、國家の統一せらるゝと同時に、智者の法燈は全く天下を照破するの概があつた。

文帝の護法

隋の開皇十年は、文帝が陳の後主より禪を受けて、天下を統一したるに依り、群臣に詔りして隨意に出家することを許したれば、本年に於ける度僧の數は、五十萬人に達した。其の翌十一年晋王は、智顛を迎へて菩薩戒を受け、號を智者大師と賜ひし事は、前に述べた通りである。十三年に

は、達摩の衣鉢を繼ぎたる慧可大師の示寂を見たるも、僧燦は、其の遺法を傳へて、禪宗の第三祖となつた。同十七年には、翻經學士費長房は開皇三寶記を奉つた。此れは曩に周の武帝が排佛の令を下したる時、免れて還俗したるものが、隋の興るに及んで、又佛經翻譯の業に參與することとなつた結果である。二十年佛像を毀損するものは、大逆無道を以て論ぜらるゝこととなつた。仁壽元年帝は天下の統一せられたるは、佛力に依るものとし、諸州に詔して靈塔を建て、舍利塔を建創せられた。凡そ帝の在位中に寫されたる佛經は、十三萬卷（四十六藏）に及び、佛像を造ること六十餘萬軀。寺塔を營造すること五千餘ヶ所。翻譯に従事するもの二十四人。翻譯せられたる經論は、五千餘卷に及んだ。故に支那に於ける佛教は、文帝の統一に及んで、實に空前の盛況を呈したるは、全く帝の護法の力に依るものである。

文中子の三教合一論

文中子は、隋朝に於ける唯一の大儒として、令名を馳せたる人なるが、姓は王、名は通、文中子は其の號である。其門下には、唐の太宗を輔けて、天下の太平を致したる、名宰相房玄齡、杜如晦等の名流も出て居るが、通は嘗て中説を造り、其の中には「詩書盛んにして、秦の世亡びたるも、

佛教の渡來と其の普及

大支那大系

孔子の罪ではなく、玄虚長じて、晋室亂れたるも、老莊の罪ではない。齋戒を修めて、梁國亡びたるも、釋迦の罪ではない。易に謂はずや、苟しくも其人に非ざれば、道空しく行はれず。と云ふて居るではないか。」と云ふ意味を述べて居る。其著文中子の全篇を通じて儒、釋、道の三者に對しては、努めて公平なる態度を執り、苟くも其の人を得ざれば、其道は行はれるものではないと云ふ意味を述べて居る。而して其の主體は孔子の倫常に置いて、禮義を重んじ、正道を行はしめんとするのが其の主張であつた。故に門人を教育するに當つても、皆人格本位の教育を施し、隋亡びて唐の興るに及んでも、其の餘澤は亡びずして、唐初の治世に貢獻する所鮮少ではなかつた。

文帝に繼いで立ちたる煬帝は、大業三年天下を詔して、質實に道を行はしめ、又千僧を度し、御製の願文を製して、菩薩戒の弟子と稱し、五年には又天下の僧徒に詔して篤行なきものは、皆還俗せしめ、過剰なる寺院は、皆之れを毀折せしめんとしたるに、廬山の僧太志は素服して、佛前に哭すること三日、誓つて身を抛つて法を救はんと欲し、帝都に至り上表して曰く「陛下願くは、三法を興隆せよ。貪道は身を燃して、將に國恩を報ずべし」と、帝之れを允したるも、彼は遂に油服を身に纏ひ、大板の上に端坐して焚死した。之れが爲め帝は前詔の施行を中止せられた。又僧神琬と云ふ者あり、藏經の湮滅せんことを懼れ、此れを石に刻して、不朽に傳へんと欲し、遂に房山縣

思想・宗教

の西天山に於て、岩壁を削つて涅槃經を刻したるが、其後僧徒相次いで此の業を繼續し、唐、梁、金、宋の世（六百五十餘年）を経て、大藏經の完刻を見た。此れに依つて、山を石經山と稱せらるゝことゝなつた。此の石經山は北平の西二百餘支里の地點にありて、今も尙其の石經は現存せられて居る。

而して煬帝の大業年間、我國の聖德太子が使節を隋に派遣せられ、隋よりも亦報聘使の來朝せしめた時代であつた。されど煬帝は失徳多くして、遂に在位十二年の後國は滅びて、唐の高祖に取つて代はられた。斯くして、盛唐の世となりては、文物制度は一新せられ佛敎は勿論、祇教、回教、摩尼教、景教等の外來宗教は、殘らず此れを包含し、唐朝に於ける宗教界は、恰も世界宗教の競進會とも云ふべき觀を呈した。故に予は章を改めて、外來宗教の傳播したる状態を述べることにした

第八章 道教の大成と外來宗教

第一節 佛教の影響を受けたる道教

1 道教の宇宙論

佛教に於ける宇宙觀は成、住、壞、空の四者を以て、大宇宙の廻轉する順序を説明し、其の成劫と云ふ時代には、大宇宙のあらゆる萬有が發生する時代であるが、其の宇宙として包含する範圍は三千大千世界と稱して居る。其の三千大千世界と云ふのは、千箇の世界を千箇集めたるものを小千世界と云ひ。千箇の小千世界を、千箇集めたるものを中千世界と云ひ。千箇の中千世界を千箇集めたるものを大千世界と云ひ。千箇の大千世界を千箇集めたるものを、三千大千世界と稱し。其の一世界には、各の日月星辰は勿論、萬有悉く備つて居ると云ふ如き方法を以て、無限大の宇宙を説明して居る。故に佛教では、百億の世界と云ふが如きは、尋常の茶飯事であつて、其の最大限を現はすには、不可數、不可說、不可思議、不可稱量と云ふて居る。

而して此の無限大の宇宙が、完全なる形體を具へて、吾人人類が生存し得る迄には、如何なる年月を要したかと云ふには、此れ又無限大の時間を要したるものとして居る。しかし其の無限大の時間の中にも、自ら一の劃期的時代を置いて、無限大の時間の一廻轉期を示す方法を取つて居る。而して其の廻轉期を稱して一劫と云ふのである。

然らば、其の一劫とは、何なる時間を指すものであるかと云ふに、此れ又到底言説思慮を以ては説明し得べからざる時間を形容する爲めに、印度に於ける言葉を以てすれば、四十由旬（約一里とす）の大石を一年毎に一回宛天人が降り來りて、羽衣を以て之れを拂ひ、其の羽衣の力を以て、此の大石を磨擦し盡したる時を以て一劫とすると云ふ説と。今一つは同じく四十由旬の大倉庫の中に、千年に一粒宛の芥子粒を落し、此の芥子粒が倉庫に充滿する時を以て、一劫とすると云ふ説明であるから、到底時間的に説明し能はざる空間的の生命を有するものを、石又は芥子粒を以て説明せんとするものである。

然らば、斯くの如き無限大の時間を要して、現在吾人の生息せる器世界と云ふ宇宙が出来上つたと云ふ説明である。然らば此の宇宙は絶對無限の生命を有するものであるかと云ふに、或る期間を経過すれば、必ず壞滅するものであると稱へ、夫れに要する時間は幾許であるかと云ふに、釋尊が

大支那大系

此の娑婆世界の教主として出世せらるゝまでには、過去の世界に於て千佛が出世したるが如く、現在の世界に於いては、釋尊は其の第八世の佛として出世せられたものなれば、其の釋尊の遺法は、第九世の彌勒佛に依りて繼承せらるゝものである。而して夫れは五十六億七千萬年の後であると云ふことであるから、此の彌勒以後の九百九十一佛が出世して、各五十六億七千萬年を経過する間が即ち住劫としてある。

此の住劫の終つた後の世界は又成、住二劫と同一の時間を要して、完全に壞滅し盡したる眞空の世界となり、其の眞空の時間も亦前者の三劫と同一なる時間を経て、始めて成劫の世となり。其の成劫には又未來の千佛が出世すると云ふ説明方法を以て、成、住、壞、空の四劫が循環すること、恰も四季の循環するが性きものとして居る。

しかし此の成、住、壞、空の四劫説は、佛敎が創設したるものには非ずして、印度の思想の産みたる無限大の宇宙觀を説明する言葉を、其儘取り入れて佛敎の宇宙觀を説明するの用に供したのである。然らば斯る思想を有せる佛敎の傳來は、支那の宇宙觀たる太極兩儀を生じ、兩儀四象を生じ、四象八卦を生ずと云ふが如き方法を以て、宇宙の進化せる理法を説明せる民族の上に、如何なる影響を興へたかと云ふに、道敎は此れを左の如く取入れて居るいは、頗る興味を覺へるものなるを以

思想・宗教

て、予は道敎が佛敎傳來以後の數百年間を経て、逐次に此等の思想を取り入れると同時に、佛敎も亦其の影響を受けて、印度の佛敎としてよりも、寧ろ支那の佛敎として發達したるものなる。隋朝に至れば、道敎の思想も亦頗る雄大なるものとなりて、其の形體を備へたるは見逃すことの出来ない事實である。

故に予は隋書の經籍志に現はれたる道敎が、原始的の道敎とは大いに其の面目を改めたる點を左に録することとした。

道敎は、元始天尊あつて、太元の始めに生れたるも、自然の氣を稟け、冲虚凝遠にして、其の極を知ること莫く、説く所の天地の淪壞、劫數の終盡も、略ほ佛經と同じく、天尊の體は常存不滅にして、常に天地の初めて開ける毎に、或は玉京の上に残り、或は窮桑の野に在りて、授くるに秘道を以てするを、開劫度人と謂ふ。然れども其の開劫は一度に非ず。故に延康、赤明、龍漢開皇は、是れ其の年號なるも、其の間相去ること四十一億萬載を経て、度する所は皆諸の天仙上品、太上老君、太上丈人、天真皇人、五方天帝及び諸僊官は、轉じて共に承受するも、世人は之れに預ること無く、所説の經も亦元の氣を稟けたるものにして、自然に造爲する所のものに非ず。天尊は常在して滅せざるも、天地將に壞れんとすれば、則ち蘊て傳ふる所なく、劫運若し

開くれば、其文自ら見はる。凡そ八字は盡く道體の奥なれば、之れを天書と謂ふ。字の方一丈にして、八角の芒を垂れ、光輝照耀、心を驚かし目を眩せしめて、諸の天仙と雖も、省視すること能はざるは、天尊の開劫である。則ち天真皇人に命じて、天音を改轉して之れを辯析せしめ。天真より以下、諸仙に至るまで、展轉級を節し、次を以て相授け、諸仙は之れを得て、始めて世人に授くるものなるも、然も天尊は年載を経歴して、始めて一度劫を開くものなるを以て、受法の人には實秘すること又年限あつて、方に始めて傳授することを得るものなれば、上品は則ち年久しく、下品は則ち年近し、故に今道を受くる者は、四十九年を経て、始めて人に授くることを得るのである。

其の大旨を推せば、蓋し又仁愛清淨に歸するものにして、修習を積んで漸く長生を致し、自然に神化して、或は白日登仙して道と合體するものなるが、其の道を受くる方法は、始め五千の文籙を受け、次に三洞の籙を受け、次に洞玄の籙を受け、次に上清の籙を受くのであるが、籙は皆素書にして、諸れを天曹に歸せしめ。多少の官屬佐吏の名がある。又其の間に諸符を錯在し、文章は詭怪にして世の知らざる所なれば、受くる者は必ず先づ潔齋して後、一の金環並に諸の贄幣を齋して師に見へ、師は其の贄を受けて、籙を以て之れを授け、仍ほ金環を割いて各其の半を

持し、茲を以て其の約と爲し、子弟は籙を受くれば、緘して之れを帯ぶるのである。と云へるを見ても、如何に佛教思想の影響を受けて、其の時間を擴大し、又開劫云々の説を述べて、其間に種々の年號と種々の名目を立て、甲より乙に至る一代を四十一億萬載と稱へるが如きは最も顯著なる影響を示したものである。

口 潔齋の方法

佛教に戒を説くが如く、道家も亦齋戒を説くものなるが、其の齋には黄籙、玉籙、金籙、塗炭等の齋があつて壇三成を造り、每齋皆綿絶(進退を誌したる標木)を置いて以て限域と爲し、傍に各門を開ひて皆法象を有し、齋者にも亦人數に限りありて、次を以て綿絶の内に入り、魚貫面縛して愆咎を陳説(諸惡を懺悔す)し、神祇に告白して、晝夜止まるもの、或は一二七日にして止まらざるのなるも、齋數外の人は綿絶の外にあるものとし、之れを齋客と云ふて、惟だ拜謝せしむるのみにて面縛せしめず。此の外諸の消灾度厄の法あり。陰陽五行の數術に依つて、人の年命を(此れは人の生年月日時を記して、此れを五行に當て符めて其の運命を判斷するものとす)推し、之れを書して、表章(上奏の文形式)の儀の如くにし。並に百幣を具へ香を焼いて陳讀し。天曹(天官)に奏上

して、厄を除くものを稱して上章と云ふ。

又、夜中星辰の下に於いて、酒舗、餅餌、幣物を陳設して、天皇、太一を歴祀し。五星、列宿を祀り。書を作つて上章の儀の如くにして奏するを名けて醮を成すと云ふ。

又、木を以て印を爲くり、其の上に星辰、日月を刻し、氣を吸ふて之れを執へ、以て疾病者に印すれば、癒ゆる者多し。

又、能く刀に登り、火に入り、焚いて之れを勅(咒)せば、刀も割く能はず。火も熱する能はざるものもある。

又、諸の餅を餌し、穀を辟け、金丹、玉章、雲英等の滓穢を鐫除するの法もあるも、禪く記さず。

以上は道家の修齋の方法、及び道士の教義を執行する方法を概説せるものなるが、其の間に、「香を焚き又火に入る」と云ふが如きは、印度思想より來れる密教の影響を受けたものとも思はれる。而して其の密教は印度の事火波羅門の風習を取り入れたものである。

ハ 黄帝の登場

右の如き結構を以て、道教は其の思想を大成するに當つて、老子以上のより神聖なる人物を配列するの必要を生じたことは既に述べた所であるが、其の神聖なる人物として、黄帝を引き來るには如何なる方法を以てしたかと云ふに「上古より黄帝、帝嚳、夏禹の儔ありて、咸く神人に遇ふて道籙を受けしに、年代既に遠くして、經史に聞ゆること無きも、其の事跡を推尋すれば、漢時既に諸子道書の流は三十七家ありて、大旨皆雋美を去りて、冲虚に處するのみにて、無上天官、符籙の事は、黄帝の四篇、老子の二篇が最も深旨を得て居る。故に陶弘景は句容に隠れて、陰陽、五行、風角、星算を好み、辟穀、導引の法を修めて道教の符籙を受けた云々」と云ふて、道家の起源は、黄帝に始るものにして、之れを老子以上に卓越せしめ。其の後のあらゆる道家の諸流は、何れも符籙、五行、辟穀、導引を、皆黄帝に結び付ける事となつた。其の後陶弘景は、圖讖の文を以て、景梁の字を合成して、之れを武帝に献じ、依つて以て恩遇を受くること甚だ篤く、又「登真陰訣」を撰して、古より神仙あることを證し。又神丹の成るべき事を云ふて、之れを服すれば能く長生して、天地と永く終ると云ふたれば、帝は弘景をして試みに神丹を合せしめたるも、遂に成ること能はざれば、弘景は中原隔絶して藥物精ならざるが爲めなりと云ひたれば、帝は以て然りと爲して、之れを敬すること最も甚しかつたと云ふて居る。

右の如き有様なるを以て、帝は即位以後も、尙ほ道教に依りて自ら天帝に上奏したるを以て、在朝の士が道を受くる者多く、三吳（江蘇、浙江）及び海邊のもの之れを信すること最も甚だしかつた。後魏の世に至つては嵩山の道士冠謙之は、自ら真人成公興に會ひ後に又太上老君に會ふて、謙之は天師の號を授けられたと云ひ。又彼は雲中より音を賜ふて『科戒二十卷』を誦出し、又玉女をして其れに服氣、導引の法を授けしめたので、彼は遂に穀を辟くことを得て、氣は盛んとなり顔色は鮮麗なりしが、弟子十餘人も皆其の術を得た。

二 李譜と冠謙之

其の後冠謙之は、又真人李譜（老子の玄孫）に遭ひたるに、李譜は彼に『圖錄真經』を授けて曰く『此の書、開闢以來、世に傳はらざりしも、今は運數將に出すべき時なれば、汝は宜しく之れを修め、國を佐け命を扶けて、衆生を化せよ』と、最後に太上（老子）又降りて『新科符籙』六十餘卷及び『銷練、金丹、雲英、八石、玉漿の法を賜ひければ、太武初光の始め其の書を奉じて、之れを献じければ、帝は謁者をして、玉帛、牲牢を奉じ嵩岳を祀り、且彼を迎致せしめ、其餘の弟子には代都の東南に壇を起し、道士百二十餘人を給して、其の法を天下に宣揚せしめ、太武も亦親しく法

駕を具へて符籙を受け、道業大に行はるゝことゝなつた。爾來帝の即位する毎に、符籙を受くることを故事と爲し、天孫及び諸仙の像を刻して供養した。洛陽に移つてより後は、南郊の傍ら二百歩の所に道場を置き、正月及び十月十五日を以て、道士等百六人をして拜祀せしめた。後齊の武帝に及んで之れを止めたるも、文襄の世に至りて、又更に館宇を置き、精至する者を選んで之れに居らしめた。

ホ 隋の文帝と道教

右の如く、黃帝を中心として、之れに老子を配したるは前述の如くなるが、後魏の世に至りても嵩山の冠謙之は、老子又は老子の玄孫より天師の稱號を賜はり、又雲中の音を賜ふて『科戒』二十卷を述べたと云ふが如き説を爲し。大いに其の術を歷代の皇帝に賣りたるが、其の後、後周に至つても皇帝は尙ほ魏の舊に依つて符籙を受け、武帝の世に至つて佛法と共に之れを滅したるも、隋の文帝が天下を統一するに及んで復た之れを復興した。しかし文帝は佛法を尊信したるを以て、道士に對しては之れを重んじなかつた。然るに大業の世に至り、道士術を以て進む者甚だ多く、其の講論する所の經は皆老子を以て本

大支那大系

と爲し、次に莊子を講じ、更に靈寶、升玄等の經を講じ、其餘の衆經は或は之れを真人に傳ふると云ふて編卷一ならず、其の術業の尤なるものは、符禁(まじなひ)を行ふて、神驗を顯はしたるが、金丹、王液、養生術の爲めには、歴代の帝王は費を靡すること擧げて數ふ可らざるも、遂に其の効果を見なかつた。

以上 隋書の經籍志に依りて、其の概要を節録して、道教の初期より、隋朝に至る迄の概要を示したるものである。故に道教は思想的には何等の根據なく、只支那民族の風俗習性を本としたるものが、黄莊より超世的の感念を取り入れ、佛教より其の組織と作法等を取り入ると共に、思想的にも亦生死解脱の感念を取り入れて、茲に始めて完全なる宗教としての内容、及び外形を具へたるものにして、之れに要したる歲月は、實に六百五十年(後漢永平十年より隋の大業十二年に至る)に亘る長年月の努力であつた。故に道教は之れを詳密に研究すれば、支那の民族心理學の發達史としては、誠に此の上もなき好題目たるを失はぬものである。

第二節 唐朝の勃興と外來宗教

1 唐以前の回顧

一 許慎の説文

神武紀元八八〇年(西曆二二〇年)は漢の滅亡と共に、曹操が國を建てて魏と稱し、黃初と改元した。其翌年は漢の後裔と稱する劉備が國を建て、蜀に據り武元と改元し。其翌年は又孫權が、國を建て、吳と稱し光武と改元したる爲め、支那の天下は遂に三分せられ。それより東西の兩晋に分れ。次いで又五胡、十六國の大亂を経て、南北の二朝に分れ。其の起伏は應接に遑なく、漸くにして隋の文帝の開皇十年以來統一を見たるも、其の統一は極めて短かく、神武紀元一二八〇年(西曆六二〇年)には、唐の高祖が取つて代つた以後に於て眞の統一を見たるものなれば、此の四百餘年間、殆んど佛教も、儒教も、或は道教も、全く地方的又は部分的に起伏しつゝ、只時の廻轉に依りて、自然の發達を遂げたのであつた。

思想・宗教

されど吾人は其間に見逃す可らざるは、後漢和帝(西曆八六年より一〇一年に至る)の世に、汝南の人許慎が『説文』を編纂して、三代より此の方、行はれ來れる文字を分類し整理して、九千三百五十三字と爲し、之れを『指事』『象形』『形聲』『會意』『轉注』『假借』の六義に依りて解説を附したる事である。これは獨り文字の方面より見て、其の功の大なるを頌すべきものに非ずして、文

道教の大成と外來宗教

化の發達に伴ふ思想の發達を見る上にも、絶大の貢獻を爲したるものであるが、更に之れを文化普及の上より見る時は、支那の文化並に思想は、許慎が難解にして符合にも等しき、繪畫的の文字が徐々に變じて、周に至りて大小の二象となり、秦に至りて隸書となりたるも、要するに時人には難解なる古文なりしを、許慎は、之れを右の如き六義に依りて、文字の本質を解説せしのみならず、更に之れを難解なる古文より今文に改めて、衆人の解し易きものと爲したる結果、秦隸は變じて漢隸となり。漢隸は進んで楷書となり。楷書は變じて行草となつて、終に今日の如き普通の文字と爲つたのである。勿論其の間には或は八分とか、飛白とかと云ふが如き、所謂番外のものも顯はれたが、此の『説文』の撰述は實に偉なる功績にして、支那に於ける文字研究の一科を開かれた上に、此の『説文』の撰述と共に、其の文字が今文に改つたと云ふことは、新たに傳來せる佛敎の翻譯にも儒敎及び道教の發達にも、多大なる便宜を供給せられたのである。

二 修史の事業と文學復興

支那には未だ完全なる歴史の編纂を見ずして、『春秋』の如きも一の編年體の歴史に過ぎず、漢の世(武帝元狩年間)に至つて、司馬遷は『史記』を作り、後漢の班固は漢書(章帝建初五年)を作りてよ

り、初めて後世に於ける史學の基が啓かれ。又王莽の世に至りて『春秋』を註釋せる公羊傳、穀梁傳、左氏傳等の三傳が世に現はれて、支那に於ける史學は其の基礎を築かれ、後世に至るも尙ほ春秋を師法とし、史記、漢書の體例を脱すること能はざりしが、民國以來は研究の自由と、批評的態度を取ることとなり、支那の史學にも一の新生面を開れんとするも、未だ其の大成を見るに至らざれば、大體に於て右の三傳二史が史學の師法となり、且つ思想統一の教科書となつて居る。此の外、易經、尙書、詩經、禮記等の諸書も、それぞれの研究を遂げられ、易にありては、田寛、田王孫、施讐、孟喜、梁丘賀、京房、費直等の諸家を出したる中にも、京房、費直に至つては、五行説を混入して、後世に於ける讖緯學の濫觴となり、尙書では、福勝、張生二子より、歐陽生、夏侯都尉に分れ、歐陽生の下には、兒寬、夏侯都尉の下には、始昌、勝建等の大小夏侯氏が現はれた。詩經は、申公培(魯)轅固生(齊)韓嬰(韓)毛亨(毛)等が現はれ、禮記には、高堂生、后蒼、慶普(慶氏)載德(大載氏)載聖(小載)等が現はれたと云ふが如き有様であるから、許慎の今文鼓吹と相俟つて、前、後漢の二朝は、支那に於ける現代文學の基礎を築かれたる而已ならず、武帝以後は西域との交通頻繁を加ふると同時に、西域の商人も亦長安に在留する者甚だ多く、明帝以後は歸化人の數も増加し、支那は主として絹織物を輸出し、外國よりは寶石、藥材、香料等を輸入し。南は

道教の大成と外來宗教

交趾支那、印度方面と交通し。桓帝以後は大秦（即ち羅馬）の安敦（即ちマクス、アオリユウス、アントニウス）帝より使を遣して象牙、鼈甲等を齎し來り、後漢の世に至つては羅馬が、シリア（細利亞）以西を領有したる關係より、安息（バルタシユ）にては共に亞細亞の地を争ひ。支那に在つては、羅馬の東方領土を指して大秦と稱した。爾後和帝の時には、西域の都護班超は、部下を遣はしてシリアに到らしめたと云ふが如き狀況であつた。故に前漢の武帝より後漢の世を通じて、支那は世界的に優勢なる地歩を占めて居つた。

漢代の美術及び工藝

叔孫通が高祖の世に於いて禮樂を定めたるも、之れは主として秦代の舊に依りたるものなるが、武帝の世に至つては、大いに音樂を獎勵し、音譜を建て、李延年を協律都尉に任じ、司馬相如を擧げて、詩譜を作らしめ、其の律侶を八音の調に合せしめたるが、偶張翥等が西域より歸るに及んで胡樂二曲を傳へたれば、李延年は古曲に依つて、新聲二十八解を造つた。然るに魏、晋の世に至りては、其の大半を亡佚して、今は僅かに出關、入關、出塞等の曲を存して居る。後漢の明帝が制作したるものは、太子樂、周頌雅樂、黃門鼓吹樂、短簫饒歌樂等にて、舞臺の方面でも一大生面を

啓かれた。

次に書道の方面にありては、周時 大篆、小篆を、秦に至りて程邈が隸書と爲し、王次仲が八分を作りしに、前後兩漢の世に至りては、楷書及び飛白の各體を出して、漸く現代の書體と接近するの機運に向ひたるも、未だ書の巧拙を論するまでには至らざりしが、漢魏の世に至りて、杜度、崔瓊、張伯英、羅叔景、趙元嗣、鐘繇等の書家を出し。茲に於て始めて「書は以て姓名を記するに足る」と云ふ風習が一變して、其の良否を鑑別して之れを愛玩することゝなつたのは、即ち支那に於ける美術趣味の發芽と云はねばならぬ。

思想・宗教

然らば斯る風尚は如何にして起りたるかと云ふに、後漢の蔡邕が靈帝の時に當りて、工人が箒を以て鴻都門を修飾する爲め、字を爲くるを見て、飛白の體を創起したるに起因して、徐々（じょじょ）に書に對する趣好を喚起したものであつて、當時は尙ほ始皇の時に蒙恬が筆を造りたるのみにて、紙の使用は後漢の和帝の時に至りて、蔡倫が樹皮、麻頭、敝布、魚網の類を煮溶して、之れを創製したるに始り、墨は魏晉の時に至つて漆煙、松煙等を用ひて、墨丸及び膠墨を造つたのが初まりである。繪畫は漢の宣帝の時、功臣像十一人を麒麟閣に描き、後漢の光武帝も亦功臣の像二十八人を凌煙閣に描かしめたるが、毛延壽、陳敞、劉白、龔寬、陽望、樊育等は、皆元帝の時に雅名を有せし

道教の大成と外來宗教

を見れば、繪事の盛なりしは明かなるも、其の畫法の如何は之れを知るに由なく、武陵の石室、及び孝堂山の石室の圖畫を見れば、當時の繪は尙ほ素朴を極めたるものゝ如く、彫刻は繪畫に比すれば多少の進歩を示し、之れを宮殿樓閣に用ひたる外に、秦の始皇が石を泰山に刻したとか、靈帝が蔡邕に命じて、五經を古文、篆、隸の三體にて書せしめ、之れを石に刻して大學門外に立てたとか、現存漢碑其の古印等を見れば、相當の發達を成しつゝありしは明かである。

されど繪畫、彫刻が眞に發達したるは、佛敎の隆盛以後の事であつて、畫像及び彫刻の方面では遂に後人の企及すべからざるものを殘した。現に大同、龍門等の石窟の大作品は、古今に卓絶したる藝術である。建築の方面では、秦の始皇が阿房宮を造り、漢の武帝が柏梁臺を造りたるが如き事あるも、要するに之れは一宮、一臺の局部的の問題であつて、後世に至りて、隨處に大なる寺塔を建築して、輪奐の美を盡したものと比することは出來ないのである。

ハ 本節の概評

以上は前漢初年より唐の高祖元年に至る八百二十三年間に亘る、支那の文化並に藝術の發達を見て、其の思想的傾向を辿らん爲めの記述であるが、吾人の列記したる事實は、何れも皆特殊の階級

の產出したるものであつて、文學も、思想も、美術も、建築も、工藝も、殆んど一般の民衆とは交渉なりしが、道教又は佛敎の發達と共に、特殊階級以外の庶民階級にも、文學及び美術等の趣味と理解とも與ふるの機會を造つたのである。故に支那に於ける道、佛二敎の發達は、許慎の説文に依りて文字を解釋し、又書體の改造をして、一般の普及に便したるものなれば輕々に之れを看過し得ざる事件であつた。

何となれば、之れを思想上より見ても、前後漢より三國、南北朝、五胡、十六國を経て、六朝に至る悠々たる八百餘年間は、前漢の世に於て古學を整頓して、先秦の遺緒を繋ぎ止めたるのみにて殆んど何等の思想を產出せず、後漢以後の學界及び思想界は、全く道、佛二者の活歩する天地であつて、道佛の二敎は、各専門的の哲學的體系を形成し、儒敎は僅に其の間に足を托して、餘喘を保ちつゝあつたと云ふの外はなかつた。故に心あるものは、皆緇流羽客と物外の交を訂して、自らを高尙にするのみならず、二三の例外を除くの外は、歴代の帝王宰相も皆佛、又は道に歸したるは、史實の示す通りである。されど此の道、佛の二敎は、決して特殊階級のみを對照としたるものに非ずして、庶民を對照として法を説きたればこそ、朝にして夕を計られざる鼎革の世に處しても、泰然として其の存立を保ちたるものが、即ち其の證據である。故に之を換言すれば、支那の思想界を

大觀せんと欲せば、漢以後宋に至るまでは、佛、道二教の消長を知ることが、即ち其の總てである
と云ひ得るものである。

第三節 外來宗教の傳來

1 祆教の傳來

祆教はペルシヤ地方に行はれたる、ゾロアスタ教(Zoroaster)と稱するものであるが、此の宗教は火を崇拜したる爲め、拜火教とも名け、又天日を拜したるが爲め、支那では此れを祆教と名けた。此の教は西曆紀元前一千年の時代にバクトリア(巴克托利亞)人の、ゾロアストが創始したるものなるを以て、教祖の名に依つて其の教に名けたのである。其の經典は『ゼンド、アヴスタ』(Zend Avesta)と名づけ、即ち薩贊朝の初期に結集したものである。其の教に依れば『世界に善惡の二神あり。善神はアフラマズダ(Ahuranazda)と名づけ、惡神はアリマン(Ahriman)と云ふものなるが、アリマンは絶へず、アフラマズダの建設せるものを破壊して、不潔のものを造りて人心を腐敗せしむるものである。故に太古よりこの方、此の二神は相軌轢して、斷へず勝敗ありと雖も、吾

人は其の結果を知る事を得ざるも、將來は必ず善人が勝利を占めて、善のみが存在して、惡は消亡するものである。故に人類の義務としては、惡神アルマンの造れる諸物を毀除して、善神アフラマズダの事業を讃襄するが爲めには、先づ自己の胸中に存在せる、一切の惡を除き、荒蕪せる原野を開拓して、良田とならしめねばならぬ』と云ふものであつて、火を崇拜するのは、火は即ち最高の神の徵象であつて、最も神聖なるものであるからである。

此の教は、古來よりペルシヤ、及び中央亞細亞一帯に行はれたるも、ゼルカス朝及びアンソク朝の世に及んでは、ペルシヤ人は、其の自由を失ふと同時に、其信仰を失ひたるが、サクサン朝祖のアルタコシエル(Artakshir)が崛起して、ペルシヤ人が新ペルシヤ帝國を建設するに及んで、之れを復興せしめ、經典の結集をも行はれたるが、此の時は既に純粹なるサコアルシヨトル教は變じて、所謂ペルシヤ教となつたのである。此の教が支那に流通したるは、北齊、北周の際に當りて、北部に流行したるも、其の傳布は廣からざりしが、其の後アラビア人が勃興して、ペルシヤ人を壓迫するに及んで、ペルシヤ人の支那に逃れ來る者甚だ多くして、其の教も遂に支那に流通することとなつたのである。此れは唐の高祖の時代であつて、長安には既に其の祆神を祭る祠を建設せられた。其の後、ペルシヤ人何碌なるもの、長安に來りて布教に従事し、祆寺を長安に建て祆正、祆祝

等の教職を置くことを許されたのは。太宗の貞觀五年であつた。然るに玄宗の世に一度び排斥せられ、後幾許もなくして恢復せしも、武宗の時又抑壓を受けてよりは漸く衰へ、唐の世と共に滅びたのである。

口 摩尼教の傳來

摩尼教は、第三世紀の中葉、ペルシア人摩尼(Mani)の開きたるものなるを以て、教祖の名を用ひて摩尼教と名けたのである。摩尼は西曆二一五年エクバタナ(Ecbatana)に生れ、其の父フタク(福他克)に従つて、クタスフォン(Ctesiphon)に留學せしが、其父は元來基督教信者たりし關係より、彼も幼より基督教に親みしが、學成るに従ふて祇教、基督教、佛教等を參酌して、自ら一派の教を開きしも彼は祇教の二元論を以て基礎と爲し、ノア(Noah)アブラハム(Abraham)ソラアストル、佛陀、基督を以て、靈光世界に降生せる豫言者と爲し。摩尼自身は即ち思へらく、吾れは基督の業を完成すべく生れ來れる最後の豫言者であると。

摩尼は斯くの如くにして、ペルシア王セプル一世の宮廷に入つて、其の尊信を受け、後出で、四方に布教し、西曆紀元二七〇年に至つて、再び宮廷に復歸したるも、幾許もなくペルシア教徒の爲めに追はれ、遂に逃れ去りたるが、其の後ホルモズ一世の立つに及んで、摩尼を保護したるも、ポラン一世に至つて、又其の保護を解きたる爲め、摩尼は遂にペルシア教徒に捕へられて焼殺せられた。しかし其の教は、漸次ベルシア、小亞細亞方面に弘布せられ、更に羅馬に入り、又亞佛利加の北部に傳はり、流れて支那に入りたるは、唐の則天武后の時代であつた。之れを傳へた人はペルシア人の拂多誕なる者が、延載元年(西紀六九四年)來りたる爲めであつた。其の流行せる範圍は僅に西北邊疆及び回紇人の間に止まり、一度は摩尼寺の設立を見たるも、旺盛を見ずして止んだ。

ハ 景教の傳來

景教は基督教の一派ネストリアン宗の開祖が、ネストリアンと名けたるを以て、其の宗に名づけたものである。彼は西紀四二八年より同四三一年に至るまで、東羅馬帝國の首府コンスタンチノールの東方教會の總營長となりたるが、之れより先き基督教會の正統派は、西紀三二五年ニカヤの統一會議席上に於いて、基督に就いて四大原則を決議して(一、基督は眞神となす。二、基督は眞人となす。三、基督は神人合一せる一人格者となす。四、完全圓滿にして調和結合せる一人格者は基督であつて、其の神人の兩性は依然として存在し、何等の喪失なし)となしたるが、之れが爲め

議論を發生して終に分裂を來し、或人は基督を偏重して神性を以て説を立て、或人は其の神性を偏重して説を立て、又二人格的の説を立てる者もあつた。要するに四世紀より、六世紀に至る二百年間は、異説百出した時代であつた。ネストリアンは當時正統派の論客を以て活動し、基督教會の弊風に反對して、處女マリアを神母とするの説に反對し「神には母なきものなれば、マリアは則ち人たる基督の母であつて、神の母では無い」と云ふ宣言を發表して、大いに物議を醸した。然るに神母説を否認したる彼は又マリアは只神と一體なる人の母であると爲し、基督は神人合一の人格者であると云ふの説を承認したる爲め、反對黨に乗ぜられ、激論より暴論に至り、其の極は基督は二人格を有するものなりとの主張を爲すに至り、正統派の金科玉條たる基督は神人合一の一人格であるとの説を否認する事となつたので、彼は西曆四三一年アイフシヨンの統一會議より異端として追はれ、ネストリアンの僧職は褫奪せられ、其徒十七人と共に小亞細亞に逃れて、其の教を弘通せんとしたるも、却つて東羅馬帝の爲めに迫害せられ四方に行き、其の終る所を知らざるも、其の教はペルシアに入つて、ペルシア王ボロズの保護を受け、更に進んで印度より中央亞細亞に至りて教務日に隆盛となり、其の教主がクタスホンに居住せしを以て、西紀四九八年に本流の基督教と分離して、コロデア教會、或はエシリア教會と稱し、羅馬の勃興するに及んで、ペルシアを合併し、ネストリアン教の教主はカラファアの信任を得て、即ち本山をパジダに移して隆盛を極め、六世紀の末に支那に入りて景教と稱へ、盛んに之れを弘通した。

其の教を齎して長安に至りたるものは、ペルシア人オレベン(阿羅本)であつて、太宗の貞觀九年(西曆六三八年)には、有司に命じて長安にペルシア寺を造り、僧二十一人を度せしめ、又高宗の世に至りては、諸州に景寺を置き、オレベンを鎮國大法主と爲し、益隆興を極めたるが、玄宗は甚しく之れを尊崇し、ペルシア寺に臨んで壇場を建立し、繼いで又景僧倍和等十八人を召して宮中に於いて功德を修し、又ペルシア寺を改めて、大秦寺と名づけた。此れは景教がペルシアより發したものに非ずして、大秦即ち羅馬より發したが爲めである。其の後、代宗、徳宗等も之れを崇敬し、郭子義の如きも亦之れに歸依し、徳宗の建中二年には、大秦寺僧景淨等と相謀つて、大秦景教流行中國碑を建て、其の隆盛を高標したるも、武宗の世に至つて道教を尊信したる爲め、景寺は佛寺と共に廢せられ、僧は還俗し、教は廢頓し、碑も亦地中に埋没し、宣宗の時に至つて其の禁を解きたるも、又振はずして廢絶に歸した。然るに其の後七百八十餘年にして(明の天啓五年、西曆一六二五年)長安の地中より景教の碑を

大支那大系

發掘して東西の學界を衝動し、景教碑文の考證は、多種あると共に、阿羅本は大法主と稱せられ、宣教師は僧と云ひ、帝室よりは榮典として紫袈裟を賜ひ、其の碑文は道教及び佛敎的口吻を用ひ三位一體及び十字の徳を左の如く述べて居る。故に其の冒頭の數句を左に録することゝした。

奥若、常然眞寂、先而无レ元、宵然、靈虛、後後、而妙有、惣ニ玄樞ニ而造化、妙ニ衆聖ニ以元尊者、其唯我三ニ妙身、无元眞主阿羅訶敷。判ニ十字ニ以定ニ四方、鼓ニ元風ニ而生ニ一氣、暗空易而天地開、日月運晝夜作、匠成ニ萬物、然立ニ初人、別賜ニ良和、令レ鎮ニ化海、下略

又以て景教が如何に支那の思想及び文學に同化せんとしたるかを知るに足るものである。

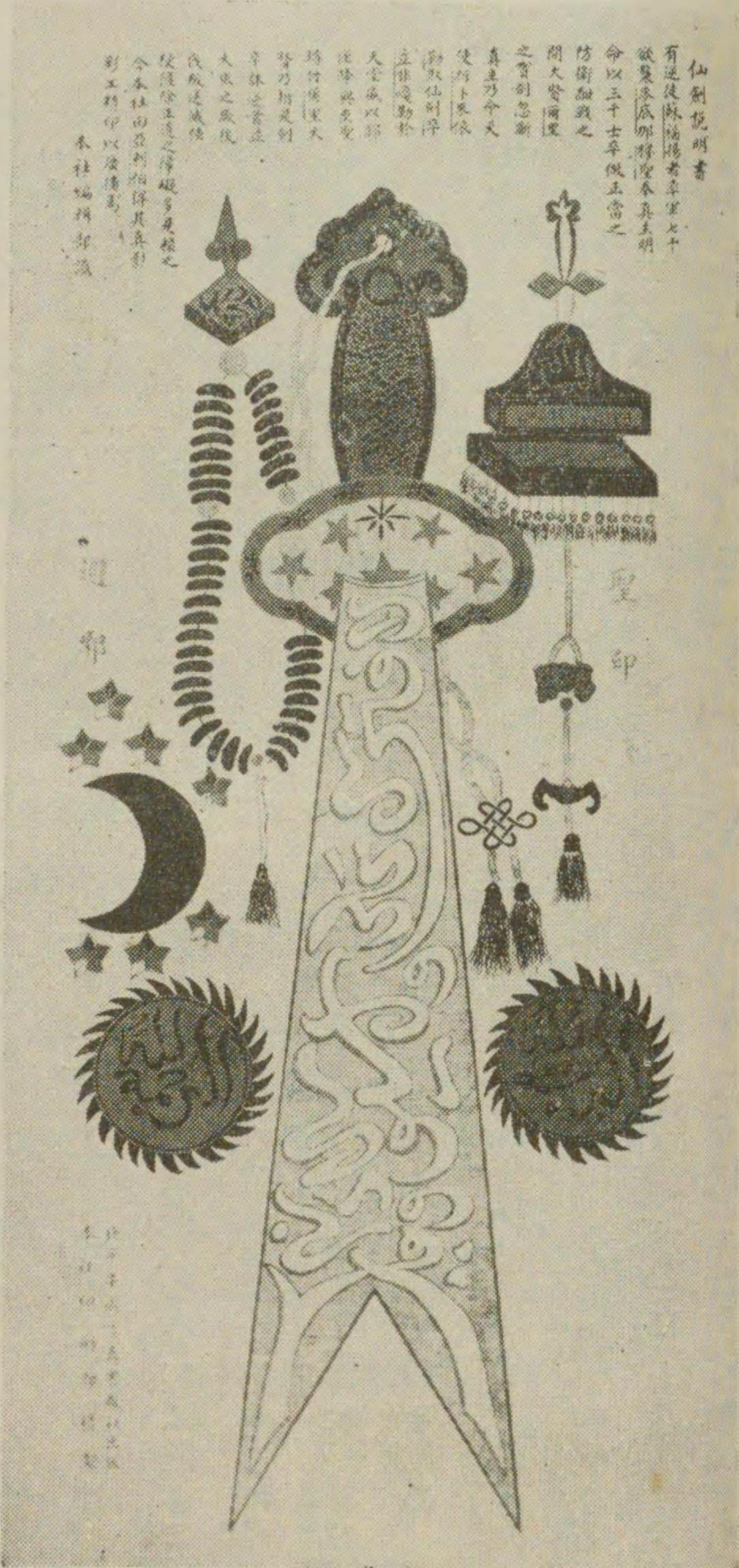
二 回教の傳來

回教はアラビア人マホメツトの開く所であつて、イスラム教と名けたるも、教祖の名がマホメツトなるを以て、一名マホメツト教とも云ふて居る。後世に至つて、回紇人の崇奉する所となつてよりこの方、支那では又之れを回教と稱へる事となつた。其の教義は嚴肅なる一神敎であつて、ユダヤ及び基督の二敎に基く所甚だ多く、其の經典たるコーランは、之れを朗誦するの意味から、コーランと呼ばれて居るのである。其の經中に記載せる各條は、千載不變のものとして尊奉せられて

思想・宗教

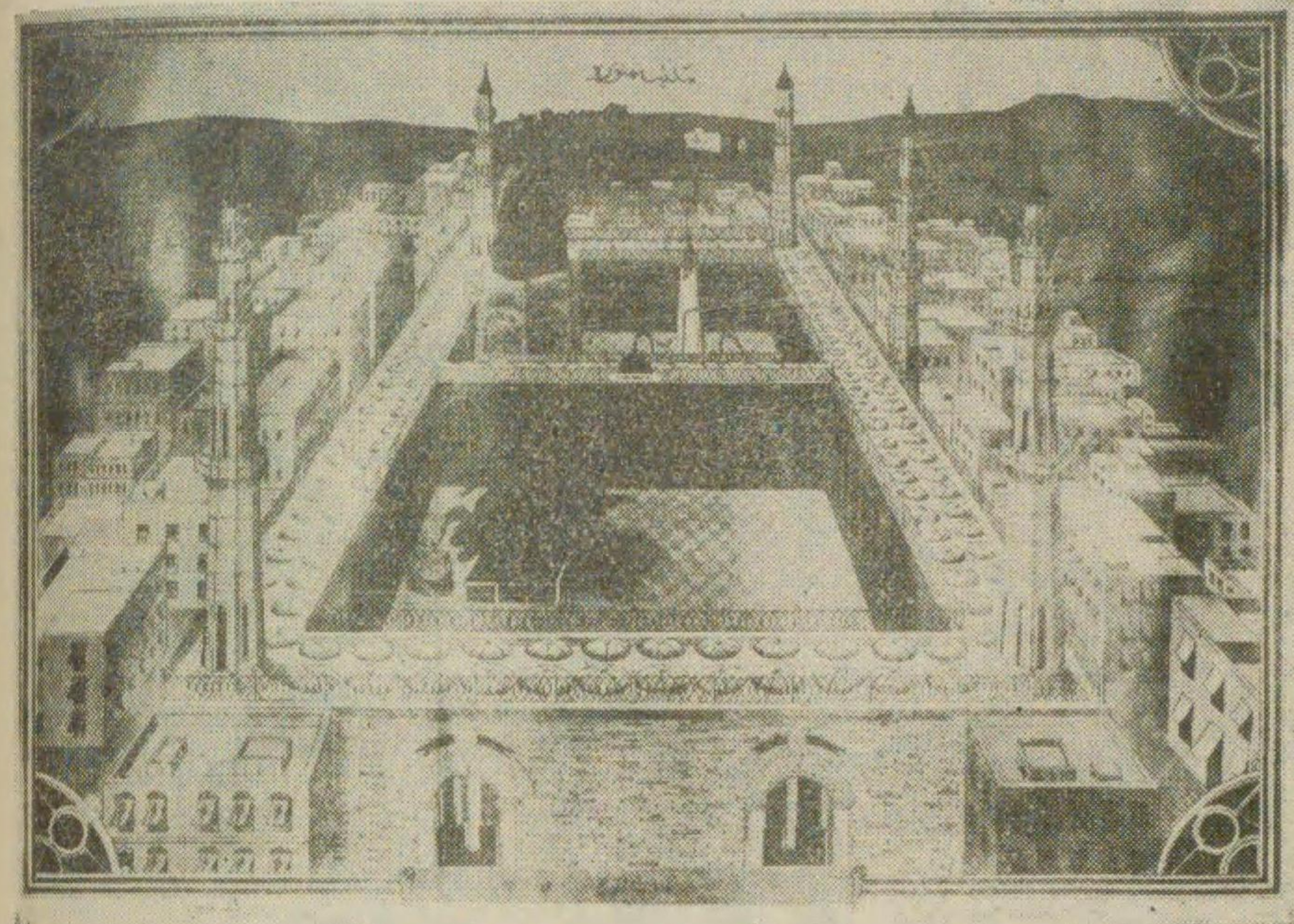
居る。此の教は武力を以て教義を擴張するのは即ち其の特色である。マホメツトは陳の宣圓大建二年（即ち西曆五七〇年）メツカの城中に産れ、貿易を業とせしが、年六十にして上帝の默示を受け、舊業を改めて傳教に着手し、アラビア人の崇拜せる偶像を排斥し、又アラビア民族の最も尊崇せる聖石（黒石）までも、併せて之れを斥けたるが、愈々回教としての創立を遂げたるは、西曆六二二

道教の大成と外來宗教



回教正義主張の剣

仙劍說明書
有是後陳隋唐宋元明
歐陽修撰歐陽修撰
命以五十年保正當之
防衛加護之
開天啓運
之寶劍也
真主乃今天
使阿卜拉
罕及穆罕
默德之
大業之成
後陳隋唐宋元明
歐陽修撰歐陽修撰
命以五十年保正當之
防衛加護之
開天啓運
之寶劍也
真主乃今天
使阿卜拉
罕及穆罕
默德之
大業之成



圖の殿聖カツメるぐ掲に庭家の徒教回

二年、即ち唐の高祖武徳九年であつた。其の後、羅馬のサラセン帝國隆盛の時代に於いて、中央亞細亞より天山南路に入り、唐末に至つて其の地の佛教に代つて流行し、支那に入りたるは安祿山の亂後に於て、回紇人より傳へられて北方に入り、又南方支那には、羅馬より海路を経て廣東に來り、朝廷に請ふて清真寺を建てたるも、武宗が道教を信するに及び、回教も亦衰微した。元の崛起と共に、再び隆盛となり、今日では伊犁、新疆方面を始め、河南、河北、雲南等の各地に傳播して、蔚然たる一大勢力を占めて居る。されど彼等の唱へる所に據れば、『唐の太宗貞觀二年三月十八日夜、太宗が妖怪が宮中に入らんとしたるを、一纏頭者が之れ

<p>天方聖曆一千二百一十年十一月十八日</p> <p>大正九年十一月十八日</p> <p>中華民國十九年十一月十八日</p>	<p>天方聖曆一千二百一十年十一月十八日</p> <p>大正九年十一月十八日</p> <p>中華民國十九年十一月十八日</p>
---	---

曆台漢回るとしと心中を曆教回

たるを示すものなれば、陛下は速かに之れを迎へられ度し云々と奏したと稱して、太宗が使を遣

道教の大成と外來宗教

を追ひ退ぞけたと夢みて、大いに驚き、其の翌朝、文武官が入朝するに當り、欽天監は『臣昨夜乾象(天文)を見るに妖氣ありて、紫微に潛入せんとするを見たり。此れ精怪が我が主の天下を攪亂せんとするものなるが、又西方に祥光萬道、瑞氣千丈なるを見れば、即ち西方に聖人の出世し

ものであつたので、我國は支那文化其物を吸収する以外に、當時に於ける世界的の影響を受くることを得たのは、全く支那と云ふ大舞臺を通じて、自然に其の機會を與へられたのである。

然らば支那は如何にして、あらゆる宗教をも認容したかと云ふに、此れは其の民族其の物が、有史以來汎有神教的の信仰及び思想を以て、其の社會を組織し來りたるものなれば、天地神祇は勿論人類にても民生に功業を有したる先哲は、之れを聖人として崇拜する外に、苟くも其の社會生活に交渉あるものは、無形なる天候の變化を始め、國土、水草に至るまでも、崇拜するの風俗を有したるものなれば、如何なる宗教に對しても、何等精神的の偏見、又は疑懼心を有せずして、惟だ其の長を採ると云ふ態度の然らしめたるものである。されば茲にも亦支那民族の調和性に富める半面と、社會的の生活に對して充分なる試練を経て、物に驚かざる特質を示すものにして、各宗教が自由發達する事を得たのは當然の事であつた。

第九章 道、佛、儒三教の消長

第一節 唐朝初期の佛教

1 唐朝初期の佛教

唐の高祖が煬帝の秕政を糾弾して起ち、一舉にして隋の社稷を覆へし、取つて之れに代り國を唐と號し、武徳と改元したのは、神武紀元二二七八年(西曆六一八年)であつた。而して其の當時既に佛教は支那に傳來してより、數百年の年代を経過し、大小二乗の經律論は勿論、あらゆる經典が印度より輸入せられ、宗派としては已に涅槃宗、地論宗、攝論宗、成實宗、俱舍宗、律宗、三論宗、禪宗、天台宗、法相宗、等の多數となり。此等の宗派は各所依の經典を主として、之れに専門的研究を加へて、一家の學説を樹立し、其の専門的學説に依つて、各解脱の道を得んとするものである。故に唐朝の初期には、佛教主義に依つて解脱の道を得んとする學派は、十派を算したるものなれば、支那の佛教學は、唐を以て其の最高潮の時代とすることが出来るのである。

然れども此れ等の中でも、涅槃宗、攝論宗、成實宗、俱舍宗の如きは、天台、華嚴等の宗派が旺盛となるに伴ひ、自然に此等の宗派に歸屬せられた。故に唐朝の末期まで存在し、又は創立せられたる宗派は、律宗、三論宗、淨土宗、禪宗、天台宗、華嚴宗、法相宗、眞言宗の八宗であつた。而して此等の八宗は、孰れも皆人に依りて日本に傳へられたるに、獨り淨土宗のみは、人に依らずして思想のみを傳へて、其の學說を祖述し繼承して、日本の淨土宗を創立したるは法然上人である。禪宗は宗末に至りて、榮西、道元等の諸師が、日本に傳來したるを以て天台、眞言其の他の諸宗に比すれば、日本に傳來したる年月は遅れたるも、日本佛教各宗は孰れも皆唐朝佛教を母體として、今日の發達を遂げつゝあるものなれば、唐朝の佛教は、獨り支那の佛教史上に於て、特殊の光輝を放つのみならず、日本の佛教は、實に其の流を汲むものなれば、日本は一千餘年間に亘りて、其の思想を繼承して失はざるは文化史上の偉觀である。

佛經の翻譯に就いて

佛教の翻譯事業は、前述の如く後漢の許慎に依りて、古文は今文と改められ、篆書は隸書となり隸書は楷書ならんとする時代に、傳來せしものなれば、翻譯に依りて宣布せらるゝ佛教は、實に絶好の機會に逢着したものと云はねばならぬ。故に予は佛教が支那に傳來してより、唐の玄宗開元十八年に編纂せられたる、開元釋經目錄に依りて、其の譯經事業の成績を、各時代別に分類して、之れを概観することゝした。

開元釋經目錄表に據れば、後漢明帝永平十年より、唐玄宗開元十八年に至る六百六十三年間に、釋譯せられたる經律論の總數は、二千二百七十八部に於て、其の卷數は七千〇四十六卷に達し、其の翻譯に従事したる人員は、百七十六人に及んで居る。

されど茲に一ツの注意すべき現象は、此の六百六十餘年間は、支那に於ける最も混亂せる時代であつて、統一時代は唐を入れても、三百十八年に過ぎざるに、分裂時代は三百四十六年の永きに亘つて居るにも拘らず、譯經の成績は、却つて統一時代よりも、分裂時代の方が、良好であると云ふ極めて不思議なる數字を示して居ることは、左表の如きものである。

時代	年數	譯經人數	譯經部數	譯經卷數
後漢	自永平十年 至末	一二人	二九二部	三九五卷
西晉	自太康二年 至東遷	一二人	三三三部	五九〇卷

道、佛、儒三教の消長

大支那大系

時代	年數	譯經人數	譯經部數	譯經卷數
隋	自隋開皇十年 至唐開元六年	九人	六四部	三〇一卷
唐	計	三七人	三〇一部	二一七〇卷
計	三一八年	七〇人	九九〇部	三四五六卷
曹魏	自魏黃初二年 至吳六年	五人	一二部	一八卷
孫吳	凡六〇年	五人	一八九部	四一七卷
東晉	計	一六人	一六八部	四六八卷
前秦	計	六人	一五部	一九七卷
後秦	計	五人	九四部	六二四卷
西秦	計	一人	五六部	一一〇卷
前涼	計	一人	四部	六卷
北涼	計	九人	八二部	三一一卷

思想・宗教

自晉東遷凡二八六年
陳滅亡

宗	齊	梁	後魏	北齊	北周	陳	計
二二人	七人	八人	二二人	二人	四人	三人	一〇六人
四六五部	一二部	四六部	八三部	八部	一四部	四〇部	一二八八部
七一七卷	三三三卷	二〇一卷	二七四卷	五二卷	二九卷	一三三卷	三五九〇卷

之に依りて之を見れば、支那の思想及び文化は、統一と分裂とは、殆んど何等の影響を與へざるのみならず、寧ろ統一時代よりも、分裂時代の方が、却つて精神界には一般の活氣を呈せしことが明かである。而して之れは獨り佛教のみに限らず、支那に於ける精神界に於ける活躍期は、春秋時代より戰國時代を第一期とし、三國時代より（五胡、十六國、南北及び六朝を含む）隋の統一までの時代を以て第二期と爲すことを得るものにして、此の混亂時代に當りては、混亂其の物を背景として發達したる佛教及び道教は、戰國時代の諸子百家にも比すべきものである。

道、佛、儒三教の消長

殊に道教は佛教の刺戟を受けて其の發達を遂げたる事實を見れば、支那の文化は統一時代よりも分裂時代の方が其の發達を遂げるに便なるものがあると言ふ事實は、思想界を觀察する者に取りては、見逃すべからざる事件である。故に予は過去の歴史の示す所に依つて、現代に於ける支那の混亂は、將に將來の支那の文化及び思想の發達を促す、絶大なる動力であらねばならぬとの感を深くするものである。

ハ 佛教の影響を受けたる道教

佛教は前述の如き多數の經典を翻譯し、又其の經典に依つて各種の學派を創立して、各其の化を一方に張るのを見たる道教は、如何なる態度を取つたかと云ふに、衝突は一時的の現象であつて、彼等は如何にして其の組織の内面に、佛教を取り入れるかと云ふ問題に逢着したのである。例せば佛教にては、經律論の三藏を總稱して大藏と稱する大叢書の出現せるを見て、彼等も亦あらゆる機會に、佛教の大藏に拮抗すべき道家の大藏を編纂し、又道教を擴張せんとするの欲求を有し、其の機に到るを待ちつゝありしが、偶唐の高祖が李姓たりし關係より、道士等は之れを機會に老子が李姓なりしを以て、此れを唐室に結び付くべく努力した。然るに高祖は一の好々爺であつて、煬

帝に對しても反旗を翻さんとするが如き意思なく、彼の愛子李世民が資性豪邁にして、早くも四方の志を抱き、隋末の群盜の蜂起を見て、立つて之れを統一せんと欲し、其の父を説き強ひて此の計に同意せしめたるものなれば、高祖の大業は事實李世民の大業であつた。故に高祖は在位九年にして、其の位を太子李世民に譲つた。此れが太宗文武皇帝世民である。されば太宗は事實上の唐室建造者であつた。此の太宗は即位と同時に、府を置き館を開いて、天下の文學者十八名を招き、之れに儒教を中心とする文學の復興を謀らしめ、其の他面には有名なる玄奘三藏が印度より、十八年の留學を終りて歸朝せるを迎へて、盛んに經論を翻譯せしめると云ふ有様であつた。

故に道教は直ちに起つて、李姓たる帝室と特殊の關係を結びつゝも、猶眞に其の豫期の如き活躍時代は到來しなかつた。太宗に繼いで立ちたる高宗は、太宗の隆治二十餘年の後を承け、天下は極めて太平なる時代なれば、動もすれば歴代の帝王が行ひ來れる封禪の禮を行ひ。又神仙説に耳を傾けんとする聲に做ふて、即位十八年後の乾封元年には、泰山を封ぜんとするの途上、老子の故郷たる亳州を過ぎり、老子を尊んで『太上元皇帝』と諡することとなつた。故に孔子に對してすら『至聖先師文宣王』と云ふ王號を諡したるのみなるに、老子に對しては一躍して、皇帝の尊號を

謚られたと云ふことは、唐室が會李姓であつたと云ふ關係より、道士が巧みに活躍して、之れに喰ひ入つた事が想像せらるゝのである。

第二節 道藏の編纂

1 則天武后の道經整理

佛家の大藏は既に隋朝に於て澎然たる大冊となり、開皇三實記に依るも其の卷數二千八百二十餘卷に達し、然も其の大藏は帝室の力を以て書寫せられ、天下の大寺院に配布せらるゝ事となり。又之れを不朽に傳へる爲めには、僧靜琬は其の石刻さへも開始した。然るに道家の書は、漢書の藝文志に現はれたるものは、僅に三十四部に過ぎず。其の後晋魏の諸朝を経て逐次増加せるも、隋の經籍志に依れば、尙三百七十七部、一千二百十六卷に過ぎなかつた。

茲に於てか、道士は則天武后に請ふて、其の大成を企てたるに、后は上柱國河内郡開國公吏崇。昭文館學士上柱國平安縣開國子崔湜。昭文館學士上柱國吳興縣開國男沈佺期等に勅して、現存せる道經を集めて、其の本末を稽へ、其の音義を撰せしめたるも、年代曠遠なりし爲め殘缺甚しく、

其の部門も亂雜して、百に對する一を存せざる有様なれば、京師にある道經二千餘卷に就いて音訓を爲し、名けて『一切道經音義』と云ひ。並に『妙文由起』六篇を撰し、大清觀主史崇此れが序を作つて、佛家の一切經音義に對抗した。されど則天武后の世に於いて道藏を編纂せられたる時代は高宗は虚器を擁して武后の統制に一任したる時代なれば、老子に對する玄元皇帝の榮典は、之れを行ふに由なくして、此れは高宗親政以後のことであつた。

口 道藏編纂と其大成

道經は既に其の意義を編纂し、『妙文由起』に依りて道教の由來を説明したるも、未だ藏經と云ふ名目是用ひられざりしに、『開元釋經目錄』が世に出るに至りて、道書を冊定し、之れを名づけて藏經となし、茲に始めて藏經の大成を見たるが、此の藏經は佛教の大藏が、經、律、論の三者を合して、大藏と名くるに對し。道家は之れを三洞に分ち、其の總數は三千七百四十四卷となした。其の後中原の亂雜に依りて、或は散佚し、或は缺本となる尠なからざりしが、其の後宗朝に至つて、再び之れを整理する爲め、七千餘卷を集めて、重複せるものを去りて、三千七百三十七卷を以て道藏とした。

大支那大系

故に予は便宜上、宗朝に於て編輯せられたる大藏が、大綱を三洞、四輔、十三類に分たれたるを以て、之れを左に列記することゝした。

一、三洞

- 一、洞眞部は、原始天尊の流演せるものとして、大乘の上法として居る。
- 二、洞玄部は、太上老君の流演する所にして中條中法として居る。
- 三、洞神部は、同じく太上老君より出でたるも、小乗初法として居る。

二、四輔

- 一、太玄部は、洞眞部の輔を爲すものである。
 - 二、太平部は、洞玄部の輔を爲すものである。
 - 三、太清部は、洞神部の輔を爲すものである。
 - 四、正一部は、三洞三輔を會歸したるものである。
- 以上の各部を合したるものを全藏と名づけ、其の各部は、各左の如き十二類の子目に分たれて居る。

- 一、本文。
- 二、神符。
- 三、玉訣。
- 四、靈圖。
- 五、譜錄。
- 六、戒律。
- 七、威儀。

- 八、方法。
- 九、衆術。
- 十、紀傳。
- 十一、頌讚。
- 十二、表奏。

此の分類は全く佛教の三乘(大、中、小)に倣ふて三洞と爲し、十二分教(一、契經。二、重頌。三、偈頌。四、因緣。五、本事。六、本生。七、未曾有。八、譬諭。九、論議。十、自說。十一、方廣。十二、授記)に倣ふて十二類に分ち、又台家の四教(藏、通、別、圓)に倣ふて四輔と爲したことは明である。

爾後又眞宗は、大中祥符の初年に秘閣の道書を本とし、樞密直學士戚綸、漕運使今翰林學士陳堯佐、選道士冲素大師、朱益謙、馮德之等に命じて修較せしめ、司徒王欽若は命を奉じて之を總理し藏成るの後之れを進め、其の綱目は舊に依りたるも、洞眞部は六百二十卷、洞玄部は一千十三卷、洞神部は百七十一卷、太玄部は一千四百七卷、太平部は百九十二卷、太清部は五百七十六卷、正一部は三百七十卷、合計四千三百五十九卷に増補せられ、之れに篇目を附けたれば、帝は名を『寶文洞錄』と賜ふた。

思想・宗教

然るに其の後、その分類の明瞭ならざると、科條の混雜せるとに依つて、戚綸等は上奏して、張雲房を薦めて其の事を掌らしめ、更に天下各地の舊本を集めて綱目を詳定し、異同を商較して、凡て四千五百六十五卷と爲し、千字文を以て帙に名付け、天字より初めて宮字に至つて終る、總計

大支那大系

四百六十六帙と爲し、之れに『太宋天宮寶藏』と題し、天禧三年七藏を寫して進め、張雲房は其の精要を取つて『雲笈七籤』百二十二卷を作つた。崇觀年間に至りて大藏は、更に五千三百八十七卷に増加した。其の後鄧自和は大藏の書目を編し、大乘洞真部は八十一帙、靈寶洞玄部は九十帙、太洞神部三十帙、太玄部九十六帙、太平部十六帙、正一部は六十帙、六部、總計三百一十一帙と爲した。

其の後元の坡雲士は、始めて道藏七千八百餘卷を平陽府に刻し、明の正統萬曆間には又相繼いで藏經を纂集し、天字より群字に至る舊藏に加ふるに、英字より將字に至る新續の書目を以てし、合計五百十二帙五千四百八十五卷とした。此の二種が支那に於ける道家大藏刻本の始りである。此の外明の天啓年間には袖珍本を新刻し、各藏書家の秘籍及び古代の子書を加へた。清の乾隆、嘉慶年間には俗本を考訂して、毎行十七字となし、一葉に十行の折本となし、之れを北京の白雲觀に藏したるも、道光年間には既に殘缺したるを以て、王廷弼は之れが修補を初め、同治年間に至りて告終せしものを、上海白雲觀に藏せられた。前大總統徐世昌は之れを石印に附して豫約頒布を企て、前教育總長傳統叔之れを總理して、天下の學道者を嘉惠した。

以上は漢末以來現在に至るまでの、道家の大藏の編纂、及び刻經の大要を叙したるに過ぎざるも

又以て道教の消長を知るの一助たるべしと信する次第である。

ハ 道教の分派

道教は張道陵に依りて設立せられたる以來、宋の世に至るまでは宗派の分裂は見なかつた。宋に至りて南北の二宗に分れたるは、佛教中の禪宗が、唐時代に南頓北漸の二者に分れたる例に仿ひ南宗は性を先きとし、北宗は命を先きとせしが、金の世に至りては、更に又『全真』と稱する一派が現はれて、服食と稱して、種々の藥餌を用ひて、永年益壽を計るものと、又鍊養と稱して、單に呼吸又は靜坐等に依りて、氣を鍊るものと、此の二者を兼ね用ひるものとを生じた。然るに宋に南渡したるより後の道教は、純陽の呂祖を以て初祖と爲し、呂祖は之れを鐘祖に得、鐘祖は之れを東華少陽君より得たるものとして居る。

思想・宗教

而して呂祖は、之れを劉海蟾操に授け、操は之れを張紫陽伯端に授け、端は之れを石翠玄泰に授け、泰は之れを薛紫賢九に授け、光は之れを陳泥丸楠に授け、楠は之れを白海瓊玉蟾に授け、蟾は之れを彭鶴林耜に授けた。之れが即ち南宗である。北宗も亦呂祖を以て始祖と爲し、呂祖は之れを王重陽哲に授け、哲は馬丹陽鈺、及び其の妻孫不二に授け、鈺は之れを譚長眞處端、劉長生處玄

道、佛、儒三教の消長

邱長春處機に授けた。之れが所謂北宗である。

北宗の二祖王重陽は、全眞の名を始めたるも、邱處機に至つて遂に其の傳を絶ち、却つて北京三祖の張紫陽の撰述が多く世に行はれたる爲め、或は此の張紫陽を以て全眞の教祖と爲す者もあるも其の説は頗る禪に類するものにして、稍々粗なるも、道士が動もすれば金石を服し、又鉛汞(藥餌)又は符籙を事として、屢々人を誤る事を指斥した。故に張紫陽は恰も禪宗の六祖が、佛心宗を傳へて、禪門南宗の祖と爲りたるが如きものである。此の外冠謙之、陶弘景の創めたる譜録は、唐に至つては崇儼、葉法善、翟乾裕、五代では譚紫霍、宋では薩守堅、王文卿等に依つて明かとなり、林靈素に至つて最も現はれた。

科醮の説は、杜光庭に始り、宋の世に至りて最も重んぜられ、上は朝廷より王公の間に盛んに行はれ、白玉蟾は、人の爲めに奏書を作りたるも、杜白の二者は現はれずして、獨り龍虎山の張眞人のみが之れを世襲し、漢の張道陵を以て玄教の宗祖とした。其の後譜録を傳へて五代に至るも、尙ほ盛んに行はれた。五代以後も亦員靜虛、白葆眞等に依つて、玄教日に盛んとなり、宋を経て元に至り、沖和眞人の號を賜ひ、傳へて四十二代の天師となつたのは張正帝であつた。故に道教は或は全眞、或は「正一」等の名目の付いたのは全く宋以後の事であつた。

第三節 儒教の隆盛

1 太宗の文學尊重

太宗は十八にして義兵を擧げ、二年にして天下を統一し、九年間は父高祖を輔けて天下の政を見たるが、高祖の禪を受けて即位するや、直ちに府を開き、屬を置き館を開いて文學の士を引き、之れを三班に分ちて、日毎に宿直せしめ、萬機の暇には晝夜を分たず、文學を討論した。之れに興りたる者は、杜如晦、房玄齡、虞世南、褚遂良、姚志廉、李玄道、蔡允恭、薛元敬、顏相時、蘇勗、于志寧、蘇世長、薛收、李守素、陸德明、孔穎達、蓋文達、許敬宗の十八人なりしが、時人は之れを榮とし十八學士と號した。帝は又弘文館を開きて、四部の書二十餘萬卷を集め、天下文學の士を撰び、虞世南等は本官を以て學士と兼ね、朝政に參與したる餘暇は、文學を講論すると云ふ有様であつた。

教宗・想思

故に唐朝の文學を蔚然として興起したるも、尙ほ六朝の舊臭を帯びて、駢儷と稱する對句法を尊び、思想は纖弱たるを免れざりしが、則天武后の世に至りて、陳子昂は素朴の文を作つて、頽風を

挽回せんとした。玄宗の世に至つて、元結、亦駢儷體を棄て、古文を提唱したるも其の意を果さず、却つて詩の方面に於て特殊の發達を遂げた。徳宗の世に至つては、韓愈の崛起に依りて精嚴雄渾の筆を以て古文を提唱せられ、又柳宗元は同時に沈痛雄健の筆を以て、古文の復活を圖りたる爲め、遂に東晋以後八代の衰を興して、支那の文章界に一大革新期を劃すると共に、韓退之の如きは古文の提唱と同時に、國粹主義を高潮して、佛老の二教に排撃を加へたるは、新味思想界を一變せしむる動機となつた。何となれば、當時の支那思想界は、外來の佛敎に壓せられ、支那の國粹たる儒敎の甚だ振はざるを奮慨したる結果であつた。

然れども韓退之は、其の在世中には文章革命の方面に成效したるのみにて、其の志を行ふこと能はざりしも、其の後數百年を経たる宋の世に至りて、儒學の復興を見ることがなつたのは、韓退之の主張したる國粹論の刺戟に依るものである。故に之を換言すれば、唐朝一代の思想界は、特に見るべきものなきも、宋に至つて儒學を復興せしむるの端は、唐時に於て啓かれたるものと云ふことが出来る。況や南北朝以來歷年の動亂に依りて、書籍の散逸したる後を受けて、經史子集四部の書、二十餘萬卷を集めて、之れを整理したるは、唐の太宗及び其の儒臣の絶大なる功績であつた。

口 唐朝に於ける詩學の大成

詩は志なりと云ふて、古代より極めて眞摯なる純情を發露するには、之れを詩に托して歌はれたるものであつた。故に周代に於いて、孔子は詩經を刪定して、詩三百思邪無しと云ふて、經書の中に詩經が置かれた程であつた。此の詩も漢の世までは、尙ほ未だ其の發達を示さず、六朝に至りて徐々に擡頭し來りたるも、美麗にして纖弱なる駢儷體の文章と共に、雕琢を事としたる詩風が行はれたる中に、晋の陶淵明が斧鑿の痕を留めざる天來の妙音を發揮したる、大作を残したるのみにして、初唐までは、尙ほ六朝の餘風を承けて、極めて纖弱なる美辭を列ねるに過ぎざりしが、則ち天武後の時代には、沈佺期、宋之問等は益文字を雕琢したる律詩を作りて、之れを今體と號して得たりしに、陳子昂の出づるに及んで時習を一掃し、直ちに古詩に仿ふて詩經、又は離騷の壘を摩せんとした。しかし未だ其の功を收むることを得ずして終つた。

然るに玄宗の世に至りて、李白、杜甫の二大詩人の出現に依りて詩風は一變せられ、終に盛唐の絶唱を貽すことゝなつた。故に杜甫、李白の二大詩人は、支那に於ける詩聖として、空前絶後の地位を占めたのである。李白は、資性豪放にして酒を嗜み、終日酒徒と共に伍となるも、其の詩は好

道、佛、儒三敎の消長

妙絶倫にして、全く神仙飄逸の氣を帯び、殊に絶句を長として居る。杜甫は、安祿山、史思明の亂に遭ふて、流離困頓、時艱を感復するの餘り、發して歌詠となりたるものなれば、其の詩は悲悽沈鬱、見る者をして涙無き能はざらしめるものがあつた。

故に詩界に於ける李白、杜甫の西者は、恰も文壇に於ける韓、柳の二家と等しく、後人の追隨を許さざるものがある。此の外王維、孟浩然、韋應物、岑參、昂適等を始め、多數の詩人が現はれたるが、初唐の詩は暫らく之れを措き、盛唐以後の詩風は一變せられ、中唐を経て晩唐に至るも、尙ほ杜牧、李商隱、韓偓等の詩人が輩出して、唐の一代は詩人の全盛時代であつた。

ハ 史學の發達

唐の太宗の隆治は歴史に其の比を見ざる、所謂貞觀の治を致したるものなれば、あらゆる事物の發達を促さざれば止まざる勢であつた。故に帝は六朝以來の歴史の編纂に意を用ひ、姚思廉に梁書五十八卷、陳書三十六卷を、李百藥に北齊書五十卷、令狐德棻、岑文本、崔仁師、陳叔達等に周書五十卷を、魏德等に隋書八十五卷を、房喬等に晋書百三十卷を撰せしめしめた。就中、隋書は顔師古、孔穎達等の大儒が其の紀傳を撰し、于志寧、李淳風、韋安仁、李延壽、今孤德棻等が諸志を

撰したるを以て、最も完備せるものと稱せられて居る。最も晋書に對しては、實を略して華を獎し、正典を寛にして小説を採つたと云ふ批難があつた。此の外延壽は宋、齊、梁、陳の諸史と、魏、齊、周、隋の諸書が煩蕪なるを厭ふて、南史八十卷、北史百卷を撰して、起伏常なき南北朝時代を通觀し得ることとしたのは、太宗の史學に心を用ひたる結果である。

此の外、中宗、玄宗に歴仕したる劉知幾は、史通二十卷を著して、史家の修史に對する體例と述史に對する源流とを論じ、且つ古人の得失を論ずること甚だ詳にして、其中には嶄新なる説もあり、又獨創的の見解も尠くなかつた。故に唐朝に於ける史學は、他の文學又は詩學、佛敎、道教、その他諸般の學術と共に、發達の跡を示し、終に唐朝歴代の天子の實録も、此れを編纂することとなり、韓愈の如き文豪の手に依つて、順宗の實録が編纂せられたるが如きは即ち夫れである。是れは唐朝のみに止らず、唐以後の歴朝も亦天子の實録を編纂するの風を啓いたのである。

ニ 繪畫の發達

支那に於ては書道の發達と共に、書を以て美術と爲すの風尙を見たるも、繪畫に至つては、未だ美術としての價値を發揮し得ざりしが、太宗の世に至つて閻立本は、巧みに人物を畫き、又は玄宗

の時には、李思訓と云ふ宗室の武人が、遒勁なる筆を以て、好んで金碧の山水を畫き、北宗の祖となつた。然るに其子李昭道も、亦山水に長じたるを以て、小李將軍と稱せられた。是れと同時に吳道玄は、最も巧に佛畫を描き、後世に至るも尙吳道子の名を以て讚へられて居る。此の外王維は詩に巧みなる上に畫を能くし、好んで破墨の山水を描きたるを以て、後世に於ける南畫の祖となつた。故に唐朝に至りて畫も亦美術としての方面に一生涯を啓きて、其の基礎が築かれたのである。

されば此れを繪畫史の上より見ても、禪に南頓、北漸の稱あるが如く、道家にも亦南性、北命の二者を分ちたると等しく、李思訓は好んで、規矩準繩の下に金碧燦然たる山水を描きたるに對し、王維は直ちに胸中の山水を描かんと欲して、何等の規矩準繩の法則に囚へらるゝことなく、又金碧等の着色をも用ひずして、自然の發露たる墨色を以て、雲烟漂渺たる山水を描いて、終に内宗の祖と爲りたるが如きは、孔子の王道主義の現實を高唱するに對して、老莊學派は起つて無爲主義を以て之れを對抗したると等しく、支那の國土と民族には、必ず相反する二者が現はれて、互に社會を經緯して行く處に妙味がある。故に思想界より發達する美術にも、亦此の劃然たる二派を出したるは實に興味ある問題である。

ホ 書道の發達

然らば書道の方面は如何と云ふに、選舉と稱する文官任用令にも等しき、地方より推薦せらるゝ人物が、策問に應じて答案を書するに當り、能書を必要とするの風起りてより、徐々に書道を研究せらるゝこととなり、唐朝に至つては虞世南、諸遂良、歐陽詢、張旭、顏真卿、柳公權の能書家が顯はれたるも、繪畫の勃興以前には、書が即ち唯一の美術であつたと云ふ關係から、書道の發達は六朝までを以て極點とするものなれば、太宗も王羲之、智永等の眞跡に對しては、愛惜措く能はずして、之れを坐右より離さざりしのみならず、死後には之れを遺命して、棺内に收めしむるまでの趣味を有して居つた。

故に虞世南の書に對しては、甚だしく推服したと云ふことである。又張旭の草書の如きは、實に異體縱横にして、極めて神韻に富むを以て、世人之れを草聖と稱した。又顏真卿の筆力、柳公權の筆法の如きは、何れも皆唐代に名高く、諸遂良は楷隸に巧みなるを以て有名であつた。されば唐の一代は、恰も我元祿時代の如く何れの方面より見ても、支那文化の極度に發達したる絶頂にして唐以前には、唐の精美なく、唐以後にも亦唐朝の精美を見ること能はざるも、さるかはり思想的の

方面は、極めて單調なる平々凡々の時代であつた。

第四節 唐代に創立せられたる佛教各宗

1 玄奘三蔵の藏歸朝と法相

唐代は支那文化の成熟期なれば、佛教も亦唐以前に成立せる宗派以外に、新たなる宗派の成立を見るに至つた。玄奘三蔵が貞觀十九年印度より歸朝して、梵本六百五十部を獻じたるを以て、太宗は詔して道宣等と弘福寺に於て翻譯に従事せしめたるは、神武紀元千三百五年（西曆六四五年）であつた。譯出せる經論は總計千三百三十八卷の多數に上り、支那佛教界に多大なる影響を與へた。帝は其の新譯の經論に對して、三蔵聖教の序を製して卷首に掲げられた。高宗の麟徳元年壽六十三歳を以て示寂した。此の時帝は廢朝三日、之れを哭して「朕國寶を失へり」と曰はれた。勅して金棺銀槨を以て斂し、五たび御札を下して、喪事を衰恤せられ、會葬するもの百萬人に及んだと云ふ。

其の徒窺基は、其の緒を繼いで唯識論に依りて法相宗を創立し、其の學は惠沿、智周等に依りて繼承せられたるも、宋に至つて滅びた。我國の道昭は唐に留學して、窺基より其の旨を承けて歸朝し、今に至るも其の學を繼續せられて居る。

口律宗

律宗は其の系統三派に分れしものを、南山の道宣律師に及んで、之れを大成したものである。道宣律師は小乘四分律を根據とせるも、玄奘三蔵に従つて、法相の義を研究したる以來は、四分律を見るにも、大乘的精神を以て「三界唯心、萬法唯識」の理を加味することとなり、大乘四分説を立て、遂に南山律の一派を創立した。律師は嘗て終南山に在りて修行せる當時は、天童左右に給仕して、其の道業を助けたと云ふ程の大徳であつた。其の示寂は高宗の建封二年であつた。

ハ禪宗

禪宗は梁の武帝の大通年間に南天竺より、渡來せる達摩大師に始まるものなるが、其の後二祖慧可、三祖僧璨、四祖道信、五祖弘忍に至るまでは、未だ禪風の天下の鼓動するを見ざりしも、六祖慧能に至つて初めて隆盛となると同時に、五祖下に於て惠能、神秀の二人によりて、南北の二派に分

道、佛、儒三教の消長

大支那大系

れたるも、此等の事情は之れを略すこととし、只茲に一の注意すべき點は、達摩所傳の禪宗と、六祖以後の禪宗とは、其の内面に於いて、大に異なるものがある。其の要點は六祖以前の禪宗は、理智的見地に立ちて修養したる宗風を、六祖は一變して極めて端的に言語、思慮を絶したる、佛心を捉へんとしたるものであつて、恰も孔孟に對する老莊學派の如き一新機軸を出したのである。夫れは六朝以來の學佛者は、教相判釋と稱する、理論的研究に没頭して、何等精神的に自己の胸裏に受用することなき、弊に鑑みて、直觀的の所謂禪味なるものを發揮し、南頓、北漸の差を生じたのである。

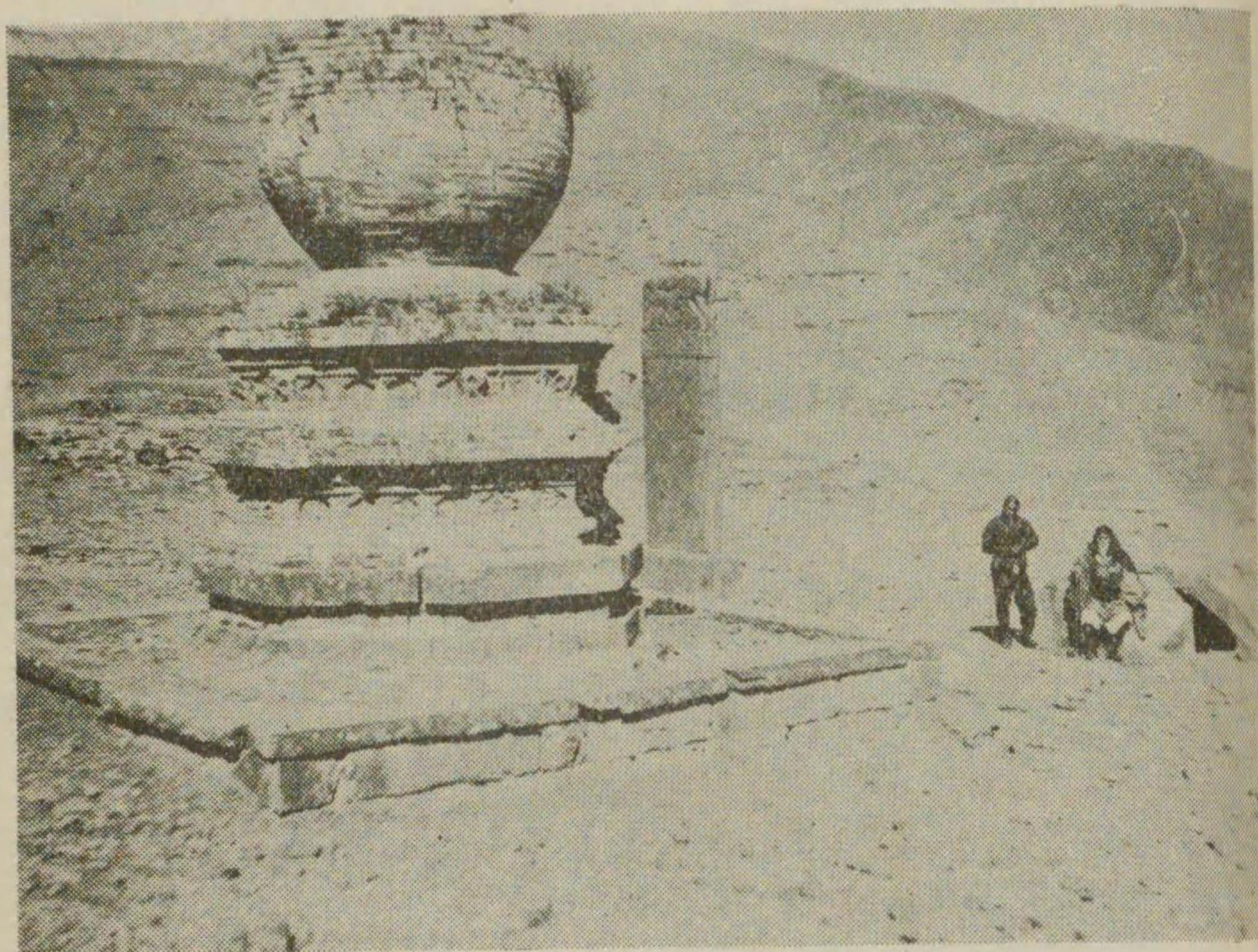
而して此れを明かにすることは、獨り禪宗の發達史としてのみでなく、思想の變遷を見るには、恐らくは禪宗史ほど好適の資料はなかるべきも、本篇の如き小品の能く盡くす能ふ所でない。故に之れを一言にして盡くせば、六祖以前の禪は、如來清淨禪と稱する、理智的、合法的なりしものが六祖以後の禪に至りては、直觀的にして、且超越的のものとなり、終に唐宋二朝の人心を支配し、北宗は神秀以來分派を生ぜざりしも、南宗は臨濟、曹洞、雲門、法眼、沔仰の五派となり、更に黃龍、楊岐の二派を生じ、總じて五家七宗と稱せらるゝことゝなつた。而して臨濟、曹洞の二派は、榮西、道元等の諸師に依りて、日本に傳へられ今に至るも、尙其傳統は儼然として維持せられて居る。

二 淨土宗の建立

善導大師は今を距ること一千二百五十年前、唐の永隆二年三月十四日を以て示寂したるが、大師は龍樹の十住毘婆娑論の易行品と、世親の淨土論と、魏の曇鸞の往生論註と、道綽の安樂集等の思想を大成し、自力を離れて彌陀の本願に依る他力門を唱導し、晋の惠遠法師以來の念佛門に一の大系を作つた。此れが即ち支那に於ける淨土門の建設であつた。

爾後宋の永明、慈雲等の諸師が之れを弘通し明末までは雲棲大師、清初では雍正帝等の提唱に依りて、益々此の宗は發展し來り、現在でも

思想・宗教



山西五台山竹林寺法照禪師墓

大支那大系



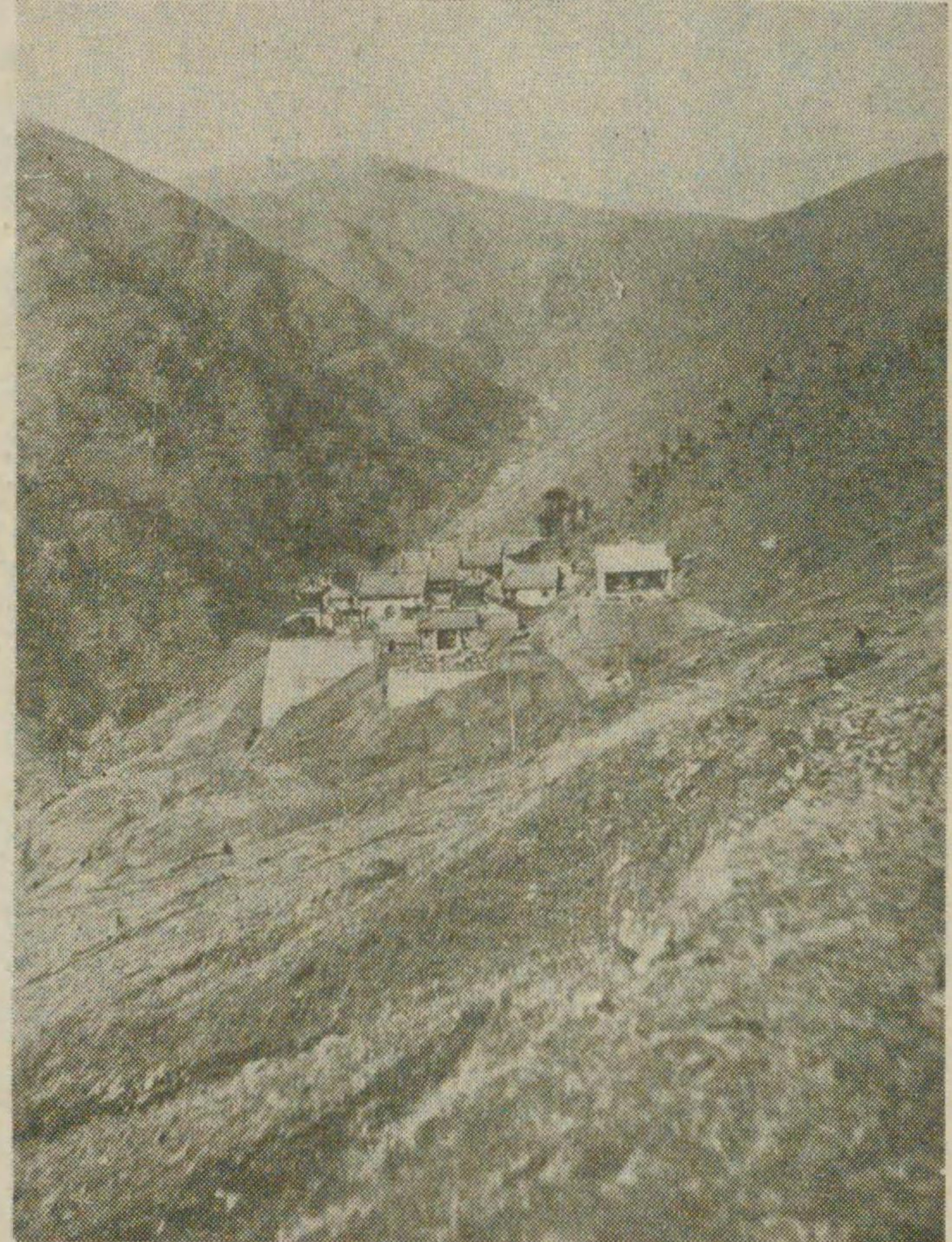
山西五台山善導道綽に調すの遺蹟

支那佛教の中心勢力となつて居る。我國でも鎌倉以後に於て法然上人及び親鸞上人等に依りて、淨土宗又は淨土眞宗が創建せられ、日本佛教界の一大勢力となつて居る。

ホ 華嚴宗の大成

華嚴經は佛陀曼陀羅の舊譯六十華嚴を本として、種々の研究を續けられしが、則天武后の天冊萬歲年間に、義淨が八十華嚴の新譯を完成したるを以て、武后は其譯に參與せる法藏に詔して、其宗旨を開演せしめ、法藏に賢首の號を賜ひたれば、本宗は一名賢首宗とも云はれて居る。されど本宗は、既に舊譯に依りて杜順和尙

鬼想・宗教



五台山華嚴宗の古蹟清凉寺全景

が「華嚴法界觀」「五教止觀」等を述作し、智儼は之れを承けて賢首に授け、賢首は其の旨を受けて六十華嚴の疏を造つて居つた。故に新譯の完成前に、

を受けたるも、宗派としての勢力は、平安遷都と共に衰へ、只學門として今尙ほ天台と共に研究せられて居る。

道、佛、儒三教の消長

へ眞言宗の傳來

眞言宗は、金剛薩埵が大日如來秘密の心殿を開いて、兩部（金剛界、胎藏界）の秘密を開示し、之れを龍樹に傳へ、龍樹は之れを龍智に傳へ、龍智は之れを金剛智三藏に傳へたと云ふ。佛教中に於ける一種特別の系統と、學説を有するものである。

然るに金剛智三藏は、睿宗の先天八年、弟子不空三藏と共に長安に來り、勅を奉じて慈恩寺に住し、龍樹所傳の法に依りて、壇を築きて人を度した。是より先き先天四年には、既に善無畏三藏が來朝して、密教を傳へ、大日如來を教主として、之れを内道場に尊奉せしめたるを以て、善無畏は支那に於ける密教弘通の先驅者であつた。故に時人は此の三人を三大士と稱して尊敬した。而して從來の佛教は主として、解脱の道を説くものなるに、本宗は祈禱、禁咒（まじなひ）等の法を修して精神上の解脱を説く以外に、現世の利益、例せば病氣の平癒とか、祈願成就等の法を修して、大に效驗を顯はしたと云ふことも、本宗を弘通するの力とありたるも、其の修法は、多く印度の婆羅門教の影響を受けて居るものである。

爾後不空三藏は在留二十餘年の後、一度印度に還りて、更に玄宗の天寶五年來華して、七十七部

ト本章の歸結

の經論を翻譯して、支那の密教を大成した。其の弟子惠果は即ち我國弘法大師の本師なれば、我國の眞言宗は不空三藏より三傳したものである。然るに支那では唐朝の滅亡と共に其傳を失したるも我國では尚ほ一千餘年の法燈を傳へて居た。されば前清の末年より今日に至るまで、支那の留學僧は、我國の高野山に留學して、密教の復興を企てつゝある。

ト本章の歸結

以上は唐朝に於いて成立せる、佛教各派の大別である。而して此等の各宗でも、禪と念佛の二者は今尚ほ其の法統を失はざるも、華嚴は天台と共に、教理の方面では之れを研究せられつゝあるも宗派としては天台の盛なるに及ばず。法相は其の教義頗る精微にして、常人の耳に入り難きを以て一時其の學を絶ちたるも、最近歐洲の哲學思想が輸入せらるゝと共に、法相の學理は唯心哲學に比すれば、更に奥妙なるものあるに依り、學界の注意を引くこととなり、日本に現存せる法相の古書は勿論、今日に至るまで日本に於て研究せられたる著書の大半は、法隆寺佐伯貫主の手に依りて、支那に輸入せられ、復興の機運を招來し、又密教と共に再び興隆を見んとして居る。

故に此れ等の狀況を考ふれば、日支の精神的交通は、唐朝を以て最高潮期をするものであるが

道、佛、儒三教の消長

一千餘年を経過したる今日より、之れを回想すれば、我國の求法者はあらゆる方面に於いて、一器に注ぐが如く、如何に精微奥妙なる學說も、完全に之れを傳へて餘す所なく、而も尙ほ之れを刊び其の本土に移殖せられんとする現實に直面すれば、思想及び文化の上には、地理と時間とを超越して、千年の歲月も昨尙ほ今の如くなるを見れば、人類の生命は獨り文化に依りてのみ、之れを永遠に傳へ得るものであると云ふことを、史實によりて證明せらるゝものなれば、吾人は獨り佛教方面のみならず、大化の革新以來唐朝の文物が、如何に吾人の精神、及び思想を司配したるを回想すると同時に、今又此れの文物の逆輸入せらるゝを見れば、轉た快心の至りに堪へないものがある。

第十章 宋代に勃興せる儒教の理學

第一節 太祖の崛起

1 五代の紛亂

唐の社稷は高祖の武徳元年、即ち神武紀元一二七八年（西曆六一八年）より、唐の昭宗天祐十六年（神武紀元一五七九年、西曆九一九年）に至る、三百年であつた。其の唐の末年には朱全注の後梁、契丹の割據、後唐及び晋、漢、周等の出現によりて、四十年の混亂期を現出した。然るに趙匡胤は、周の恭帝（七歳の幼主より）禪を受けて即位し、乾徳と改し、國を宋と名づけた。即位の後には屢々徵行して、民間事情を視察したる爲め、群臣之れを諫むれば、帝は「帝王の興るは、自ら天命あり、周の世宗は、諸將の方面にして、大耳なるものは、皆之れを殺したるに、吾れは終日其の側に仕へたるも、害すること能はざりし」と云ふて、徵行すること愈々甚だしく、且つ「天命を有するものは、之れを爲すに住じ、汝等を禁ぜざるなり」と云ふて、自ら取つて代るだけのものがあ

宋代に勃興せる儒教の理學

れば、我は其の取るに任かす」と云ふ意を漏したる爲め、中外は之れを聞いて警服した。帝は、樞密直學士趙晋を召して「吾れ天下の兵を止めて、國家長久の計を爲さんと欲す。其の途如何」と問ひたれば普は「唐より以來、帝王の屢々易るは、節鎮甚だ重くして、君弱く臣強きが爲である。故に今若し其の權を奪ひ、其の錢穀を征し、其の精兵を收むれば、天下自ら安からん、殿前の帥石守信等は、皆統御の材に非ず。宜しく他の材を授くべし」と答へたれば、帝は之れを悟つた。

一日帝は守信等を召し宴酬にして、左右を退けて、吾は汝等が力に非ずんば茲に至らず、然れども終夕未だ曾て枕を安ぜず、此の位(帝位)は誰か之れを爲さん事を欲せざる者あらんや」と云ひたれば、守信等は、頓首して「陛下何ぞ此の言を出すことを爲す、天命既に定まされり。誰か敢て異心を抱く者あらんや」と答へたるに、帝は又「汝等は異心無じと雖も、麾下の人の言貴を欲するを如何せん、一旦黄帽を以て汝が身に加ふれば、之れを欲せずと雖も、夫れ得べけんや」と曰ひたれば、皆頓首し泣いて曰く「臣等愚にして、此れに及ばず、惟だ陛下、臣等を して、臣等の生くべきの道を指示せられよ」と云ひたれば、帝曰く「人生は、駒の隙を過ぐるが如くなるに、富貴を好む者の多きは、金錢を積んで厚く自ら娛樂し、子孫をして貧乏ならざらしめんと欲するのみ、汝

等何ぞ兵權を解き去り、出で、大藩を守り、便好の田宅を撰んで、子孫の計を爲し、多く歌童、舞女を置きて、日に酒を飲んで相安ぜんことは、豈に又善ならずや」と、皆拜謝して曰く「陛下臣等を思ふこと茲に至る。所謂死者を生かし、骨に肉を付くるものなり」とて、明日皆病と稱して止めんことを請ふた。此れは太祖が即位の初めに於て、五代の弊に鑑み、武將の兵權を解かしめた一齣の劇である。

而して其の問答には、人生の慾求は富貴を得て、之れを子孫に傳ふるにある所以を説ひて、開國の勳臣が有する兵權を、一席の宴を以て解決したと云ふことは、五代以來未だ嘗て見ることの出來ない大事業であつた。故に唐朝以來宰相の權方重くして、一切の號令、賞罰、任免も皆事を決して後に、之れを奏するに過ぎざりしものを改めて、事前に之れを文書にて上奏せしめ、旨を得て之れを行はしむることとした。此れが所謂筭子の始りである。故に天子が政務に關して、閱覽するの文書は激増した。されど之れを概見すれば、帝は中央集權には成功したるも、有宋一代を通觀すれば宋は文弱の風に陥りて、終に北狄の侵入の爲めに滅亡した。

口 新學勃興の動機

漢末以來の支那の思想界は、頗る寂漠たるものにして、全く先秦の如き盛氣なく、惟だ道教の勃興せると、佛教の傳來を見たるのみにて、儒教は殆んど之れが従たるの觀を呈すること、數百年の久しきに亘りたれば、唐朝の如き燦然たる文物、制度を有し、文學、美術の方面に至るまで、各其の美を擅まゝにしたるも、要するに其の形式と外觀を整へたるに過ぎずして、生氣の潑刺たる思想は之れを認むるに由なく、獨り佛教のみが深遠なる印度思想を基調として、此れに支那獨特の文學及び思想を加味して、印度に於いても見ること能はざりし、支那學としての佛教學を大成し、且つ之れを空理、空論に終らしめずして、幾多の高僧、碩徳が、其の身に行ふて、一種の法統を垂れたと云ふのみであつた。

故に之れを大いなる眼を以て觀察すれば、支那學其の物の發達にも非ず、又支那固有の特長を發揮したる、思索的の哲學も發生せざる、極めて寂漠なる時代であつた。

之れに反して佛教は、老莊學の超越思想は勿論、孔孟の倫理觀をも巧みに攝取して、悉く自家藥籠中のものと爲し、晋朝の慧遠法師以來、各宗の宗祖が撰述したる著書には、倫理觀を無視せずして、直ちに超越せる世界に引入せるのみならず、更に之れを三觀、又は事、理の二門等に分ちて、精神界の極致に到着する順序、方法等を定め、單なる人と天、又は神と人と云ふが如き、單純なる

思想の上に、佛、菩薩、圓覺、聲聞、天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄の十界を立て、更に又此の十界は、人々の努力如何に依りて、直ちに之れを流轉して、人が天ともなり、又佛ともなり得るのであるとし、其の佛も亦人及び天と同様なる素質を有するとして、人を向上せしむるには戒律を必要とするとして、大小の二律を説き、大乘は一切衆生を度する爲めの律なるも、小乗は自らを修める爲めの戒律である。而して其の他を利益する爲の大乗戒も、自を利する爲の小乗戒も、要するに人類は、自己が善惡の二者を行ひたる行爲を累積したる『業』と云ふものに依りて、或は生じ、或は死するものであつて、其の間に一定せる自己の自由境はないのである。故に之れを解脱して、自由境に至るには、先づ其の『業』に依りて支配せらるゝ、生又は死と云ふ問題より解脱せねばならぬ。其の生又は死を離脱するには、戒に依りて其の『業』と云ふ根本を改善して、惡を去り善に歸せしめねばならぬ。其の善に歸し惡を去るにも、先づ他人をして去らしむるを主眼とするものが大乘戒であり、他人は暫らく措ひて、先づ自己の身を修めて惡を去り歸して、生死の根源を斷たねばならぬと云ふのが小乗戒である。

茲に於てか、支那の思想界は一變して、十界流轉説より、生死解脱觀を生ずることとなり、善惡の二者は、善因善果、惡因惡果を生ずると云ふ説より、變じて過去現在、未來の三世を通じて『業』

の作用に依りて、支配せらるゝものであると云ふ、三世因果説が取入れられた。故に道教でも其の思想の影響を受けて、單なる久生長視とか、延年益壽と云ふが如き、現世を中心としたる思想より一步を進めて度人開劫説は勿論、生死解脱論を唱へ、且つ戒律を高調することゝなつて來たのは、支那思想界の一變化であつた。

故にかゝる大變化に際して、儒教は全く傍觀的態度を取るに非ざれば、妥協的態度を執るのみで、其間に何等の主張も爲すものなかりしが、唐の韓愈は敢然として、之れに反抗し、あらゆる場合に排佛を以て任と爲したるが、之れは或る意味に於ける國粹主義の提唱であると同時に、數百年來の儒教側の不平を代表して、之れを筆に上したものと云ふことが出来るのである。其の結果は韓退之の死後二百餘年にして、宋儒の手に依りて、儒學の復興の新機運を啓く原動力となつた。此れは恰も我國の高彦九郎に依りて提唱せられたる勤王論が、遂に明治維新の大業を完成する動力たりしと等しく、唐の韓愈は宋儒をして一新紀元を開かしむるの原動力となつたものである。故に宋儒の思想を考察せんとするには、其の源たる韓愈の思想を一瞥する必要がある。

ハ 韓退之の思想

韓退之は古文復興の大旗を翻して、李唐の天下に獨歩したる一人なるが、其の思想は徹頭徹尾孔子を中心とする王道を鼓吹し、老佛二教を排斥したる者である。故に其の思想的一斑を看取する爲めに、原動論の一節を検討すれば、

博く之れを愛するを仁と謂ひ、行ふて之れを宜しくするを義と謂ふ。之れに依りて之く、之れを道と謂ふ。己に足りて外に待つこと無き、之れを徳と謂ふ。仁と義とは定名なり。道と徳とは虚位なり。故に道に君子あり、小人あり、徳に凶あり、吉あり。老子の仁義を小とするは、之れを毀れるに非ずして、其の見る者の小なるを以てなり。井に坐して天を見て、天は小なりと云ふも、天は小なるに非ざるなり。彼照々(小患)を以て仁と爲し、彼の子子(孤立)を以て義と爲す。其の之れを小とするは宜なり。

と云ふて、先づ王道の大義を提唱せんと欲して、老子の主張を擊破するに井蛙の見を以てしたる後、

其の所謂道(老子)なるものは、夫の道とする所を道とするも、我が所謂道(王道)には非ざるなり。其の所謂徳(老子の徳)なるものは、其の徳とする所を徳とするも、我が所謂徳には非ざるなり。凡そ我が所謂徳と云ふは、仁と義を合して、之れを言ふものなり。天下の公言なり、老

子の所謂道德と云ふは、仁と義とを去つて之れを曰ふなり。一人の私言なり。周道衰へ、孔子没し秦に火あり、漢に黄老あり、晋、宋、魏、隋、齊、梁の間に佛あり。其の仁義道德を言ふもの楊に入らずんば墨に入り、墨に入らずんば老に入り、老に入らずんば佛に入り、彼に入れば必ず之れを出で、入るものは之れを主とし、出するものは奴とす。入るものは之れに就き、出するものは之れを汗(辱)す。嗚呼彼の人、夫れ仁義道德の説を聞かんと欲すれども、誰に従つてか之れを聽かんや。

老子は曰く。孔子は我師の弟子なり、佛者は曰く、孔子は我師の弟子なり。孔子を學ぶもの其の説を習ひ聞ひて、其の誕を樂むは、自ら小とすればなり。又曰く我師も亦嘗て之れを師とす。曰ふて、惟だ之れを口の上ほすのみならず、亦之れを書に筆す、噎後の人、仁義道德の説を聞かんと欲すと雖も、夫れ誰に従つてか之れを求めんや。甚だしい哉、人の怪を好むや。其の端を求めず、其の末を問はず、惟だ怪のみ之れを聞かんと欲す。

と云ふて、儒教以外に出入するものを排斥し、之れを怪異なりとしたる後、更に一步を進めて、其の社會組織を説明して、儒教以外の教は、皆民生に害ある所以を左の如く陳べて居る。古の民を爲す者は四。今の民たるものは六。古の教は其の一に處り、今の教は其の三に處る。

農の家は一にして、粟を食むの家は六。工の家は一にして、器を用ふるの家は六。賈の家は一にして、之れを資(需要)する家は六なり。此れ如何ぞ民窮し、且盜まざらんや。古の時は民に害多し。聖人なる者あつて立ち、而して後之れを教ふるに、相生相養の途を以てし、之れが君となり。之が師となり。其の虫蛇禽獸を驅りて、其中土に處らしむ。寒へて而して後、之れが衣を作り、餓へて而して後、之れが食を爲り。木處して顛(倒)れ土處して病む。而して後之れが宮室を爲り、之れが工を爲し、以て其の器用を贍し。之れが賈と爲りて、以て其の有無を通じ。之れが醫藥を爲りて、以て其天死を救ふ。之れが葬埋、祭祀を爲りて、以て其の恩愛を永くし、之れが禮を爲りて、以て其の先後を次(序)す。之れが樂を爲りて、以て其の淫鬱を宣ぶ。之れが政を爲り、以て其の怠倦を率ひ。之れが刑を爲り、以て其の強梗を鋤き、相欺くや、之れが爲めに符璽、斗斛、權衡を爲りて、以て之れを信にし、相奪ふや、之れが城廓、甲兵を爲りて、以て之れを守る。害至りて之れが備へを爲し、患生じて、之れが防を爲す。今其の言に曰く。聖人死せざれば、大盜止まず。斗を剖(破)り、衡を析(毀)して而して民争ふすと。嗚呼、夫れ亦思はざるのみ。

と云ふて、仁義は即ち王道であつて、王道は即ち政治であり。政治は即ち生活であると云ふ。唯

物^{ぶつ}義^ぎを提唱^{ていしやう}して、其^{その}の間に思想的^{しきてき}の何物^{なにもの}をも有^あせず、たゞ生産者^{せいさんしや}よりも、消費者^{しょうひしや}が増^ましたと云^いふことを慨嘆^{がいたん}したる後^{のち}、更に筆^{ふで}を進^{すす}めて

若^し古^{いにしへ}の聖人^{せいじん}無^なかりせば、人類^{じんるい}の滅^{ほろ}びんこと久^{ひさ}しからず。何^{なん}ぞや、羽毛^{うも}、魚介^{ぎょかい}以^{もつ}て寒熱^{かんねつ}に居^をれば、爪^{つめ}を以^{もつ}て食^{しょく}を争^あはざるもの無^なからん。是^この故^{ゆゑ}に君^{きみ}は令^{れい}を出^{いだ}し、臣^{しん}は君^{きみ}の令^{れい}を行^なひ、而^{しか}して之^{これ}を民^{たみ}に致^{いた}し、民^{たみ}は粟米^{ぞくまい}、麻絲^{あさいと}を出^{いだ}し、器皿^{きべい}を作り、貨財^{くわさい}を通^{つう}じて、以^{もつ}て其上^{そのうへ}に事^{つか}ふるものならば、君令^{くんれい}を出^{いだ}さざれば、則^{すなは}ち其^{その}の君^{きみ}たる所以^{ゆゑん}を失^うひ。臣^{しん}君^{きみ}の令^{れい}を行^なひて、而^{しか}して之^{これ}を民^{たみ}に致^{いた}さざれば、則^{すなは}ち其^{その}の臣^{しん}たるの所以^{ゆゑん}を失^うふ。民^{たみ}は粟米^{ぞくまい}、麻絲^{あさいと}を出^{いだ}し、器皿^{きべい}を作り、貨財^{くわさい}を通^{つう}じて、以^{もつ}て其^{その}の上^{うへ}に事^{つか}へざれば、則^{すなは}ち誅^{ちゆう}せらる。今^{いま}其^{その}の法^{はふ}に曰^{いは}く、必^{かな}らず而^{なん}が君^{くん}臣^{しん}を棄^すて、而^{なん}が父子^{ふし}を去^さり。而^{なん}の相生^{あひしやう}、相養^{あひやしな}ふの道^{みち}を禁^{きん}じて、以^{もつ}て其^{その}所謂^{そのいはゆる}清淨寂滅^{せいじやくじやくめつ}なるもの^{もの}を求^{もと}めよと。嗚呼^{あゝ}夫^それ亦^{また}幸^{さいわい}にして、三代^{さんだい}の後^{のち}に出^いで、而^{しか}して禹^う、湯^{たう}、文武^{ぶんぶ}、周公^{しゆうこう}、孔子^{こうし}に黜^{しりぞ}けられざることを、夫^それ亦^{また}不幸^{ふかう}にして、三代^{さんだい}の前^{まへ}に出^いずして、禹^う、湯^{たう}、文武^{ぶんぶ}、周公^{しゆうこう}、孔子^{こうし}に正^{ただ}されざることを。と云^いふて、物質^{ぶつしつ}生活^{せいかつ}の上^{うへ}より見^みたる、現實^{げんじつ}主義^{しゆぎ}を高^{かう}調^{てう}して、佛老^{ぶつらう}二家^{にか}の精神^{せいしん}生活^{せいかつ}を排^{はい}斥^{しつ}したる後^{のち}帝^{てい}と王^{わう}とは其^{その}の號^{がう}特^{とく}なりと雖^{いへど}も、其^{その}の聖^{せい}たる所以^{ゆゑん}は一^いなりとて、夏^{なつ}は葛^{かつ}を衣^いとし、冬^{ふゆ}は裘^{きう}を着^きることより、渴^{かつ}して飲^のみ、饑^{うえ}ては食^{くわ}ふまでを以^{もつ}て、道^{みち}の本體^{ほんたい}なりと爲^なし、其^{その}の外^{ほか}に何^{なん}等^ら求^{もと}むる所^{ところ}

なしとて、其^{その}の文^{ぶん}は詩^し、書^{しよ}、易^{えき}、春秋^{しゆんしゆ}、其^{その}法^{はふ}は禮^{らい}、樂^{らく}、刑^{けい}、政^{せい}、其^{その}の民^{たみ}は士^し、農^{のう}、工^{こう}、商^{しやう}、其^{その}の位^ゐは君^{くん}臣^{しん}、父^ふ子^し、師^し友^{ゆう}、賓^{ひん}王^{わう}、昆^{こん}弟^{てい}、夫^ふ婦^ふ、其^{その}の服^{ふく}は、麻^あ絲^{さい}、其^{その}の居^きは宮^{きゆう}室^{しつ}、其^{その}の食^{しょく}は粟^{ぞく}米^{まい}、蔬^そ菜^{さい}、魚^{ぎよ}肉^{にく}なれば、其^{その}の道^{みち}たるや明^{あき}らめ易^{やす}くして、行^{おこな}ひ易^{やす}きものなれば、之^{これ}に順^{じゆん}すれば昌^{さか}ゆるも、之^{これ}に逆^{さか}する時は、人^{じん}類^{るい}は滅^{めつ}亡^{ぼう}するものである。

故^{ゆゑ}に其^{その}の道^{みち}を道^{みち}とせざる、老^{らう}佛^{ぶつ}の二^{にか}教^{けう}は、其^{その}の源^{みなもと}を塞^{ふさ}ぎて流^{なが}さず。其^{その}の行^{かう}を止^とめて行^{おこな}はざらしむる爲^{ため}めには「其^{その}の人^{ひと}を人^{ひと}とし、其^{その}の書^{しよ}を火^かき、其^{その}の居^きを廬^いにし、先^{せん}王^{わう}の道^{みち}を明^{あき}かにして、以^{もつ}て之^{これ}を道^{みち}びき。鰥^{くわん}寡^{くわ}、孤^こ獨^{どく}、廢^{はい}疾^{しつ}者^{しや}を養^{やしな}ふことあれば、夫^それ亦^{また}其^{その}の可^かなるに幾^{ちか}庶^かからん」と云^いふて居^ゐる。故^{ゆゑ}に之^{これ}は一面^{めん}より見^みる時^{とき}、後^ご漢^{かん}より唐^{たう}に至^{いた}る思想^{しきう}界^{かい}の傾^{けい}向^{かう}を概^{がい}評^{ひやう}すると同時^{どうじ}に所謂^{いはゆる}先^{せん}王^{わう}が社^{しゃ}會^{かい}を經^{けい}綸^{りん}して土^ど居^き、木^{もく}居^きの域^{いき}を脱^{だつ}せしめたる以^{もつ}來^{らい}、詩^し、書^{しよ}、禮^{らい}、樂^{らく}を設^まけたるものなると、佛^{ぶつ}老^{らう}の二^{にか}家^かは、之^{これ}と相^あ反^{はん}するものであるから、斯^かる流^{なが}れを防^{ぼう}止^しする爲^{ため}めには、其^{その}の出^{しゆつ}家を禁^{きん}止^しし、其^{その}の書^{しよ}は之^{これ}を焚^やき棄^すて、其^{その}の住^{じゆう}居^きせる奇^き觀^{くわん}は、之^{これ}を常^{じやう}人^{じん}住^{じゆう}居^きと爲^なし、先^{せん}王^{わう}の道^{みち}を以^{もつ}て之^{これ}を導^{みちび}き鰥^{くわん}寡^{くわ}、孤^こ獨^{どく}、廢^{はい}疾^{しつ}の者^{もの}は、之^{これ}を養^{やしな}ふべきものであると云^いふは、即^{すなは}ち佛^{ぶつ}老^{らう}二^{にか}家^かの消^{しょう}費^ひせるものを以^{もつ}て、社^{しゃ}會^{かい}政^{せい}策^{さく}を實^{じつ}行^{かう}せんと云^いふに外^{ほか}ならぬのである。

第二節 宋儒の學說

1 宋儒の二潮流

右は儒教が後漢以來、支那學としての立場を失ひ、佛道二教の爲めに壓倒せられて、何等の生氣なきを憤り、韓退之が起つて之れを追撃したるも、其の要旨は、社會組織の發達せる徑路を述べ、老佛を斥ぞけたと云ふのみであつて、歴史的の説明としては、極めて巧妙なるも、思想的又は哲理的の深味無きことは恰も吾人が幼年時代に慈愛溢るゝ母の懷中にて哺乳されつゝ成育したるものなれば、吾人が種々なる飲食を要求し、嗜好するは以ての外のことなれば、須らく幼時に立歸りて哺乳的生活を持續せよと云ふが如きものであつて、思想的に成熟期に達したる壯年者としては、殆んど何等の興味を唆らるゝものではなかつた。

故に宋儒は、韓退之の國粹的復古思想を基調として、儒教を提唱せるに當り、如何にして之れに其の時代思潮を加味せしむるかと云ふことは、特に力を用ひたる點であつて、其の努力の結果が即ち後世に於ける宋代の理學として一生面を啓き、遠くは之れを先秦の諸子に繼ぎ、近くは之れを老佛の二教より其の長を採り、從來の如き訓話的態度を變じて、研究の態度を取り、今に至るも尙ほ支那に於ける哲學史上の優位を占めたのが、支那の思想界に於ける宋學の立場である。

而して此の宋學の體系を造り成したるは、即ち程明道、程伊川、朱子、陵象山等の諸子である。程明道の學說を大成するに當つて、其の前驅となつたものは、即ち周濂溪、邵康節、張橫渠の三子である。周濂溪は、易を中心として『太極圖說』又は『通書』等の書を著し、邵康節は『皇極警世書』『魚樵問對』等を著し、張橫渠は『橫渠易說』『經學理窟』『西銘』『東銘』等の書を著した。此の三子は何れも、一代に傑出し、濂溪は光風齊月、恰も荷葉水を出すが如き人格を有し、『宇宙の萬象は、無極であるが、其の無極は大極を本體として、發生したるものなれば、其の内には陰陽、五行を備へると同時に、其處に太極がある。故に大極は即ち無極であつて、男女の兩性も亦此の無極より發して、五行の氣を受けたるものである』と、云ふが如き方法を以て、易を本體とし、之れに五行説を加味して、宇宙觀を説明して居る。

邵康節は、綜論的に宇宙を説明せんと欲して、四の數を基調とし、天に日、月、星、辰の四象あり、地に水、火、土、石の四象あり。故に天の四時には、无、會、運、世の四者あり。地の四維には、歳、月、日、辰があると云ふて、一切の萬象を四の數に依つて説明せんとして居る。然らば其

宋代に勃興せる儒教の理學

の四象を生ずる絶對的の根本は、如何なるものであるかと云ふに、此れは即ち太極である。而して此の太極は陰陽、剛柔を生ずる微妙なる作用を爲すものであると云ふ説明方法を取り、張横渠は、無形の本體を太虚若しくは太和と名づけ「萬物は皆虚を本として、發生するものなれば、虚は天地の祖である。故に天地は虚より生じ、陰陽の二氣は、太虚の實質であり、又其の屬性であるから、此の二者は相互に交錯して、萬物を生ずるものである」と云ふて、虚は即ち氣、氣は即ち虚であると云ふ一元的の説明を施して居る。

此の三子は、心性及び倫理に關して、周子は「誠は人の本性なるも、其の善惡を生ずる所以は、動靜がある爲めである。故に動に就けば惡となり、靜に就けば善となるものなれば、人の修養法は無欲を必要とする」と唱へ、邵子は「人の心は、宇宙の心であり、宇宙は即ち我が體であるから、現象は即ち實在であり、實在は即ち現象であるから、此の理を知つて、天地の徳（即ち宇宙の根本生命）に合致すれば、何人も聖人たり得る」と教へ、張子も亦天人合一、物我一體の眞理を認めて「人は天道の誠を體得すれば、本體と一致することを得るも、人の性に偏と正の差を生ずるは、氣の剛柔、緩急に由るものなれば、其の偏を矯むれば、天地の性に歸る事を得る」と唱へ、外的の修養法としては、禮を重視し、內的修養としては、虚心平氣を保つべき事を主張した。此の三子は二

程、朱子、其他の宋儒の學說を發達せしむる。三大人格者であつた。

程明道の認識論

程明道、名は顥、字は伯淳、明道は其の諡である。幼より神童の名あり、十歳にして詩を造り十二三歳の時には老成人の風があつた。進士に及第の後諸官に歴仕し、治績を示して人望を得たるも、熙寧の初め王安石と政見を異にして辭職した。爾後哲宗即位の後、明道を召したるも、應ぜずして元豐八年に病歿したのは五十四歳であつた。其の弟伊川は彼の性格に就いて「資稟既に異にして、充養道あり、純粹精金の如く、溫順玉の如し」と云ふて居るのを見れば、其の性格は此れを想望することが出来る。幼より其の弟伊川と共に、周子に學びたる外、先秦時代の諸家を研究し一面には、佛老の思想をも研究し、佛典の中では、楞嚴、涅槃、華嚴の大乘諸經に造詣深く、其の著書は『明道文集』、『二程遺書』、『二程外集』等がある。

其の思想は、老莊の影響を受けて居る。彼の宇宙觀は易を本として、萬有發生の根本を乾元として居る。されど太極説と乾元とは何の變りもなく、乾元と共に坤元が現はれ、乾は陽、坤は陰となり、此の二氣の集散、動靜に依りて萬物を生ずるが故に、天地人の三才は一體であつて、此の一を

缺けば、天地も其の形を失ふものであると云ふも、明道の學説には、在來の宇宙を認識するには、心の窓を通さなければならぬ。心を離れては、天地の存在も、之れを認むることは出来ない。之れを換言すれば、人あつての天地であつて、天地あつての人ではなく、心あつての現象であつて、現象あつての心ではないと云ふ、唯心的の見地に立つて、天は上に位し、地は下に位し、人は中に位す、人無ければ、即ち天地を見ること無しと言ふにある。故に在來の學説に認識論を加へ、此の認識は即ち人の心であると云ふ點を説明したのが、即ち明道哲學の一進歩である。

ハ 程明道の人生觀

彼の宇宙觀は普通一般に唱へらるゝ、生命の根本は、至精、至純であるといふ説に反して、善なく、悪なく、中正的のものとして居る。何となれば人も、萬有も、善と定めることは出来ない。萬物の上に善悪、美醜を生ずるのは、陰陽の集散、動靜、及び清濁の作用に依る。自然の結果なれば絶対的の善悪、美醜は無いものである。人は中正の道に就いて、天地人の融合を默識し、萬物我れに具はると云ふ境地に入れば、聖人となる事が出来ると云ふのが、彼の宇宙觀である。彼の人性説は、佛教及び老莊より得たものであつて、人性に就いて、凡人と、聖人の差別を立てぬ所は、即

ち佛教には人間の心に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界を説き又如是性、如是相、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等の十如是を説き、又五陰世間、衆生世間、國土世間の三世間を具するを以て、吾人の心の中には、十の法界を具し、百の法界には即ち三千種の世間を具す。故に此の三千は、即ち吾人の一念にありと云へるに基づくものなれば、宋儒の宇宙觀及び人生觀に大なる變化を與へた。故に宋儒の哲學は明道に至りて、一紀元を開かれたるは、古代より現實主義のみを唱へた單調なるものを、轉じて幽玄微妙の内容を有するものと爲した點にある。

ニ 明道の識仁篇

明道の主張は、人性に善惡の差別なしと云ふ平等相も、其の行爲の如何によりて、善惡の差別相を生ずるものである。元來此の差別相と、平等相の二面は、仁が事物の上に現はれて、鶏雛が生々として發育するが如きは、大自然の仁の差別的の現はれるが、人々互に憐む心に、仁の影が見えるのは、即ち仁の平等的の現はれるとて、「夫れ至仁は、即ち天地を一身と爲す。天地間の品物萬形、四肢、百體と爲る。夫れ人豈四肢百體を愛せざるものあらんや。聖人は仁の至りなり」と云

宋代に勃興せる儒教の理學

ひ、又「仁者は天地萬物を以て一體と爲す。己に非ざるなし。認め得て己と爲す。何ぞ至らざる所あらんや」と云ふて、仁は天地萬物と一體となるものであるとの解釋を下して居る。

而して其の仁に至るの道としては「仁は渾然として、物と體を同じふするものなれば、義禮智信も皆仁である。故に此の理を識得し、誠教を以て之れを存すれば、防檢を須ひず、究索を用ひず。

若し心懈らば即ち防あらんも、仁が苟くも懈たらずんば何の防か之れあらん。未だ理を得ざるが故に、究索を用ゆるも、存すること久しければ、自ら明かなるを以て焉くんぞ、究索を待たんや」と云ふて、即ち仁は天地の生々の徳を有して、萬物此れに依るものなれば、萬物も亦生々の徳を心に具備するは當然である。故に特に此れを防檢する必要はない」と云ふて居る。此の點は孟子の先

天良知説よりも一步を進めて、何人も誠教を存し、誠の心を以てすれば、天地萬物は悉く我と一體となるものである。此の境地に至るには、無我自然の心境を保持して、宇宙の心、即ち仁を直覺せねばならぬ。夫には主一無適の道を説いて、人を導いて靜坐を努めしめて居る。主一無適とは、即ち佛教の所謂三昧に入るものである。而して靜坐は、即ち佛教の禪定と一致して居る。故に彼は

行ふべきこと無き時は暫く靜坐し去れ。蓋し靜坐する時は、則ち本源を涵養し得て稍定るあり此れ物を追ふことを免れずと雖も、自ら覺して修斂し、寄頼するに及びて、又此の落着あり。例

へば人の外に出で去つて、家に歸る時は、自ら此の身を着する所あるが如し。若し夫れ此の本源を涵養し得ざれば、茫然として物を追ふて外にあり、則ち修斂して寄頼せんことを要するも、亦此の身を着する所なきなり。

と云ふて、門人を訓へて居る。此の學風は陸象山を初め、明の王陽明の學説を組織せしむる上に大なる影響を及ぼして居る。

第三節 程門の子弟

1 朱子の學説

明道の弟の伊川は、明道よりも一步を進めて、宇宙は理氣の二元より成り立つものなれば、萬物は氣に依つて形を爲し、理は精神的の働きに依つて、箇々の事象を遍く具へるものである。故に此の理氣の交錯に依つて、形而上と、形而下に分れて、宇宙の森羅萬象を造るも、此の理氣の相對する所に道がある。此の道は、即ち本體であると云ひ、又人性觀に對しても、人の性には本然の性と、氣質の性の二者あるも本然の性は、一人の心は天地の心となるものなれば、此れは平等の性で

ある。氣質の性は、清濁の氣に依つて、善惡を生ずるものなれば、此れは差別の相である。故に性は不善なるも、惟だ上智と下愚は移すべからずと云ふは、移す可からざるに非ずして、移らないのである。移らざる所以は、惟だ兩般あり。即ち自暴自棄を事として、敢て學ばないからである。若し敢て學んで、敢て自暴自棄ならしめば、安んぞ移すべからざるの理あらんや」と云ふて、萬人の有する本源の性と、才情とを調節すれば、一人の心は天地の心、一物の理は萬物の理となることを斷じて居る。

以上の二程には、宋學に於いて最も重要な地位を占め、其の門下には、謝上蔡、柳龜山、遊薦山、呂藍田等あつて、何れも斯學を繼承したる中でも、上蔡は明道の仁に對する解釋の下に、仁に至る内外兩面の修養を怠らず、努めて人慾を排して、仁に到達せんと欲し、天理は人欲と相對するものなれば、一分の人慾あれば、即ち一分の天理を滅却し、一分の天理を滅却すれば、卿ち一分の人慾を勝得するものなれば、僅に人慾を恣にするれば、天理滅すと云ふて、人慾を去つて良知、良能の光を發揮して、仁を體得せんとした。故に彼の修養は、唯一の矜字を去り得ることに努めたのである。柳龜山も亦「聖人たるべき道は、先ず勝心を去れ」と唱えて、私心を去り意を誠にして明なること鏡の如くなることに努め、呂藍田は「赤子の心は良心なり、これ天の中を人に下す所以なり。人が天地の中を享る所以なり。寂然不動、虛明純一なるは、天地と相似たり。神明と一たり。傳に曰く、喜怒哀樂の未だ發せざる、之れを中と謂ふとは、此れ其れの謂である」と云ふが如き方法を以て、良心を直養し。此の良心を擴大して、天地の本源と合一せしめんとするのが、其の學說である。

口 宋學を大成せる朱子

朱子は、程門の哲學的體系を集めて、之れを大成するに、博大なる頭腦と、綜合的才能とを以てし、規律的生活を嚴守し、道義的觀念を把持したる點は、恰も西洋の哲人カントにも比すべきものである。彼の名は熹、字を元晦、又は晦菴、晦翁とも號した。幼より學を好み、五歳の時には、早くも彼の父が天を指して、天であると云ひたるに對し、彼は天上に何物があるかと問ふて、其の父を困らしたと云ふ逸話を殘して居る。故に彼が晩年に幼時を回想して「吾れ年五、六歳にして、心即ち煩惱す。天體は此れ如何、外面は此れ何事ぞと云ふにあつた」と記して居るのを見れば、彼の哲學的思索は、其の天性であつた。彼は十四歳にして父を失ひ、父の遺言に依つて、劉屏山、劉白水、胡籍溪の三人に従學した。中でも最も久しく従學したるは籍溪であつた。彼は十九歳にして進

士に登第した。其の當時の彼は主として心を傾けて、佛、老を研究した。

然るに彼は二十四歳にして、李延年の門に入るに及んで、講學の方法を一變した。延年は羅猶章の門下にして、羅猶章は柳龜山の門下なれば、彼は其の學統より云へば、程明道の第五世である。

而して延年は、實踐倫理を主とし新説を出さざるも、性情未發の心性を體して事物に當らば、必ず中庸の道を得て、天命に合致するものとして、惟だ靜を始めて未だ動かざるの先に求むれば、靜の眞を見るべし。眞を未だ始めて偽らざる先に求むれば、靜の眞を見るべく。善を未だ始めて惡ならざるの先に求めば、靜の善を見るべし」と云ふて居る。彼は延年の此の思想を述べて、李先生の人

物を接して自然に節に中ると云ふのが、即ち此れ龜山門下相傳の秘訣である」と云ふて居る。朱子は此の學風を體得し、三十三歳にして、文學博士となりたるも、宰相其の人を得ざりし爲め、官吏の生活を斷念して、子弟を教養する事に没頭し。三十九歳（乾道五年）の時召されて、南康郡の知事となり成績を收めたる中には、先づ白鹿洞書院を修理し、學紀を作りて書生を導いた。其の時陸象山は彼を訪ふて、論語を白鹿洞書院に講じたこともあつた。

其の後彼の生活は極めて多難であつて、政治上には正義の精神に依つて、邪曲の徒を排したる爲め、反對黨よりは屢々偽學、又は逆黨と云はれて、長く其の地位に安んぜず。竹林精舎に於いて靜かに學を講じ、懇篤に書生を導いた。晩年には眼疾に苦しみ、七十歳（慶元六年）にして卒去した

彼は絶大なる精力を以て事理を究明し、精進して止むことなく、其の著も亦頗る多き中に於いて、文集百二十一卷、語類百四十卷、四書集註十二卷、周易本義十二卷、易學啓蒙四卷、太極圖說論一卷、楚辭集註八卷、近思錄十四卷、名臣言行錄二十四卷、資治通鑑綱目六十卷等は其の主要なるものである。

ハ 朱子の辨學論

朱子は學を爲すの工夫に關して、左の如き述懐を爲して居る。

某（自稱）十數歳の時、孟子の『聖人は我と同類である』と云ふを讀んで、喜び言ふ可からず聖人と傲るは亦易しと思へるに、今將に得難きを覺えた。

某又十五六の時より、二十歳に至るまで、史書は凡て見ることを欲せず、惟だ閑是、閑非にして、緊要ならざるのみならず、理解するに難らざることを、覺得し、大率此れ等の文字を見れば味あるも畢竟心を粗にするものなるに、魯伯恭は人をして、左傳を讀ましむるは、何の謂ひた

宋代に勃興せる儒教の理學

るを知らない。

某又舊年義理を思量して、未だ透せざれば、直ちに眠ること能はず、初め子夏の專傳を見て、後卷の一章には、凡そ三四夜も窮究して明に至り、徹夜杜鵑の聲を聞いた。

又近日既に向來の説は、説話大いに支離する所あるを覺え、身に返へして以て正坐に求むるも自己の工夫亦未だ切ならざるに因りて、文字の工夫を滅去し、閑中の氣象甚だ適するを覺えたれば、常に之を學者に勸めて居る。

亦且つ孟子の性善と道ひ、放心を求むるの兩章を看るに、着實に體察すれば、收拾を要と爲すものなるも、其の余の文字は、大概に諷誦涵詠して、未だ大いに力を着けて、考察するを用ひない。

又某舊時、禪道、文章、楚辭、詩、兵法までも、事々學ばざる所なかと要して、無數の文字に出入し、事々に兩冊ありたるも、一日忽ちにして之を思ふて曰く、且つ慢なり。惟だ我が一色の渾身、如何ぞ幾多を兼ね得んや、此れ時を遂ふて去るのみである。人は大に此の心を用ひる所を知らば、自ら縁の外事に及び得るものではない。と云ふが如く、あらゆる場合に、自己の省察を本とし、周濂溪、程明道の未だ明確にせざりし所

を明確にし、漫然として無極は即ち太極であるとか、天地と我とは同一の體であると云ふが如き説明に甘んぜず。外的方面の修養には、物の理を究め、内的方面の修養には、敬に居ることを必要とし。此の『居敬』と『究理』の二者は、相互に相發して、日に進むものなれば、敬に居るは即ち理を究むる所以であり。理を究むれば即ち敬に居るを得て、内外の關係は自然に密接となること恰も人の兩足の如くにして、一物の空中に懸るが如く、右を抑れば左上り、左を抑れば右が上る如きものとなつて、『究理』と『居敬』の二者は、自然に一致するものである。之れを一致せしむるには自然に知識を尊重し、先知後行説を唱へて、一切の行爲は、先づ心に之れを認識して、而して後にこれに應ぜしめんとすると云ふのが、彼の學問に對する態度であつた。故に陸象山は之れに對して、知行合一説を唱へて、更に又一派の哲學を形成したのである。

二 陸象山の哲學

周濂溪以來宋代の理學は、朱子に依つて大成せられ、冥想的に傾き、智を主としたるを以て、煩瑣なる研究に没頭し、儒教本來の面目たる、實行方面を閑却することとなつた。陸象山は之れに對して、空虚なる議論を離れ、實社會に活用するの人物を造らんとしたのである。而して陸象山の學

宋代に勃興せる儒教の理學